

(題字松陰先生筆蹟擴大攝影)

大正十五年十二月發行



# 校友會雜誌

第貳拾五號

山口縣立萩中學校校友會

□奉迎歌

みどり濃き五月の空に  
天照らす日繼のみこを  
かしこさを何にたゞへむ  
わたります長門の海も  
かがやくは我等のみかは  
いざうたへこのよろこびを  
1 國見すといでましたまふ  
2 過へてし今日のかしこさ  
3 みそなはす周防の山も  
みひかりにかがやきいでぬ  
祖先ミオヤらの靈も笑むらむ  
百萬心一つに

□奉迎行進歌

1 豊榮のぼる朝日子の  
2 御旗の光さしそひて  
3 見よ風薰る空の色  
4 昔ながらのまごころを  
いざことほがむ日の皇子の  
1 國見しますと山口の  
2 州に生ふる民草の  
3 川の神海の神  
4 山川の神海の神  
今日のいでましことほがむ

# 次目號五拾貳第

勞おお孟祖寢兄涼男殺二七赤涼停月窓欄磯朝池海夕夏海月欄涼  
先らら對一光にに邊の峠陽を光に  
鶴の墓れ弟みし生間み車すよに落の渡よ  
局蘭に詣ぬい大接のがりの立つ立ちのり  
かるゝがりのりて陽て朝風下てみ  
勤原島盆ゝ夜瀧臺人塚戦夕宮臺場下て夕

吉五田三田小岩山村原田瀬三藤大田荒楊宮香高松田山赤長豐金  
田島中好申田武本木田邊川島本野原瀬井本月松岡中崎間嶺田田  
直茂謙敏 照宗八正世 一義國誠哲 了三 正正範  
曹人一介亮博彦一郎人民治將實郎雄亮之治斌博嚴範資傳衛之尾

# 山林中口立校學縣中立校友會雜誌

皇太子殿下奉迎記事事……一十七

奉迎歌並に奉迎行進歌  
長藩公族毛利氏宅址碑文  
鶴駕奉迎に就ての所感を述べて 會長 岩田博穂  
生徒諸子に告ぐ

萩御親闇記 御親闇日誌

學びの園 林 特別會員 香川政一

二記念の由來及精神

文の行の樂

土を釣りの水の景

休日記の一の家の景

夏農海夏郷魚庄海海魚歸夏の旅

海村朝姉夏農海夏郷魚庄海海魚歸夏の旅

を渡る傳

風説寝 節夏色庭てり兄浴色り夕省樂

岩山中大淺藤磯井齋平佐井井河高森平  
田田村谷原田野上藤川伯町上武橋澤井  
精東梅精勵三五正秀國治祐陽正  
耕行男齋次完三郎毅致道介雄雄之亮臣

雁	信	—	K1	—	甲
時海時魚新海時國民の責	價値任值紙釣任值國民の價	開	恒武友	季禮	作雄弘
運は天にあらずして努力にあり	通信機關之文明恩の價値	田上根田留木垣	哲郎	夫信賢	治
運動により得る修養人	時成敗失功之失敗	保山木野田吉永	郎朝郎	夫寅實	治
運は天にあらずして努力にあり	運動により得る修養人	片池和永赤竹板	郎朗	夫信賢	作
英	文	久横安村河吉永	郎朗	夫寅實	弘
Lesson from the world-map.	G. Inji Suzuki, Toshio Akagi, Reisaku Itagaki.	田村貞太郎	七三一剛	季禮	作
The sun.	Shuho-do.	吉永	哲郎	季禮	作
An evening on the beach.	(From my diary)	柴村河久	郎朗	季禮	作
The great man on my desk.	Saburo Miyazaki, Tohio Akagi.	安片池和永	郎朗	季禮	作
Radio.		赤竹板	郎朗	季禮	作

□奉迎歌

みどり濃き五月の空に  
天照らす日繼のみこを  
かしこさを何にたゞへむ  
わたります長門の海も  
かがやくは我等のみかは  
いざうたへこのよろこびを

1 國見すといでましたまふ  
2 迎へてし今日のかしこさ  
3 みそなはす周防の山も  
みひかりにかがやきいでぬ  
祖先らの靈も笑むらむ

百萬心一つに

□奉迎行進歌

1 豊榮のぼる朝日子の  
2 御旗の光さしそひて  
3 見よ風薰る空の色  
4 山川の神海の神

1 国見しますと山口の  
2 州に生ふる民草の  
3 空の色  
4 昔ながらのまごころを

旭の旗にたぐへつづ  
いざことはがむ日の皇子の

1 日嗣の皇子は畏くも  
2 県に今や入りましぬ  
3 恵の露のかかるとき  
4 その喜びぞ極みなき  
5 緑に映ゆる地のよそひ  
6 今日のいでまし祝ふなり  
7 今日のいでましことほがむ

# 次目號五拾貳第

勞おお孟祖寢兄涼男殺二七赤涼停月窓欄磯朝池海夕夏海月欄涼  
先らら對光にに邊の峠陽を光に  
鶴局蘭墓れ弟みし生間み車のすよの前に落つ立つるのり  
がに詣ぬい大接のさがりの立ちのり  
勵原島盆、夜瀧臺人塚戦夕宮臺場下てて夕て陽て朝風下てみ

吉五田三田小岩山村原田瀬三藤大田莊楊宮香高松田山赤長豐金  
島中好中田武木本木田邊川島本野原瀬井本月松岡中崎間嶺田田  
直茂謙敏 照宗八正世 一義國誠哲 了三 正正範  
豊人一介亮博彦一郎人民治將實郎雄亮之治斌博嚴範資傳衛之尾

# 山林中口立校學縣

皇太子殿下奉迎記事事……一一一七  
奉迎歌並に奉迎行進歌  
長藩公族毛利氏宅址碑文  
鶴窓奉迎に就ての所感を述べて 會長 岩田博藏  
生徒諸子に告ぐ  
萩御親閱記  
御親閱日誌  
學びの園： 一八一三  
二記念の由來及精神  
特別會員 香川政一  
林：  
岩山中大淺藤磯井齊平佐井井河高森平  
田田村谷原田野上藤川伯町上武橋澤井  
精東梅精勵三五正秀國治祐陽正  
耕行男齊次完三郎毅致道介雄雄之亮臣五

雁	信	時海時魚新海時國民の責
		聞 値 任 值 任 值
		の 價 値 任 值
		運は天にあらずして努力にあり
		通信機關之文明
		恩の價値念敗
		成運動により得る修養
		人功失敗
		眞人生と奮闘
		英文
		運は天にあらずして努力にあり
		Lesson from the world-map.
The sun.	Goro Nagdoni.	Goraji Suzuki. Toshiro Akagi. Reisaku Itagaki.
Shuho-do.	(From my diary)	An evening on the beach.
Au evening on the beach.	The great man on my desk.	Saburo Miyazaki. Tohio Akagi.
Radio.		

長藩公族毛利氏宅址碑

昔者長藩之治國、最尙教化。而學校之設、以公族毛利元法君爲嚆矢。其孫廣政君令德好學。享保二年、藩主毛利吉元君創建明倫館。君時爲加判、多所贊畫。而後國中翕然向學矣。後君爲國相、以至宗廣公時、愛民節財、延士容言。有餘力則講學問道。信孚于國、人皆矜式之。歿、私謚文子。今男爵祥久君即其後裔。而我校之地實其宅址也。初萩町民之議興中學、先相攸于此、求於祥久君。君即從之。蓋追祖風以贊其舉也。事在明治三十二年。夫我校已承緒藩學。而其地適與賢大夫有故矣。則從事教學者、豈得無甘棠蔽芾之感乎。所以建碑誌之也。

大正十五年九月吉日

山口縣立萩中學校長從五位勳六等 岩田博藏 撰

奉迎記念記事

鶴駕奉迎に就ての所感を述べて

生徒諸子に告ぐ

會長 岩田 博 藏

本年五月、本縣に鶴駕を迎へた事は、百万縣民の齊しく歡喜の情に堪へぬ所であります、特に邊鄙に僻在する本校が、御親闈場となつて、約五千二百名の者が、御親闈を受くるに至つた事は、正に光榮中の光榮とする所であります。

從來、皇室の方々の御高徳に關しては、諸子も屢々之を聽いた事と思ひます。然し九重の奥深い事に就ては、畏多いといふ情が先に立つて、とかく尊敬の念のみが深くて、親愛の情が充分ではなかつたかと心配して居たのであります。然るに今回の行啓には、我等率土の濱の者迄も、親しく 殿下を拜み奉る事ができまして、所謂義は即ち君臣であるが、情は即ち父子であるといふ感を、切實にすることができたらと思ひます。我等は此の好機を以て、一時期を劃し、從來よりも一層敬虔と親愛との至情を以て、奉公の念を徹底せしめたいと思ひます。二州勤王の精神は、過去の遺品でもなく、骨董品でもありません

更に父祖の精神を發揚顯彰して、新時代に適する様、至醇至美的誠意を盡すべきであります。御親閲場の準備作業に就て、職員生徒一同が、日夜肝膽を挫き、多大の労力をも厭はなかつた事は、感銘に堪へぬ所であります。此の熱誠と敬虔の至情とを、將來にはぐくみ育てゝ、やがて國家公共の事業に貢献する所あらしむる事は、切望に堪へぬ所であります。此の光榮ある運動場の產物として、山口町に於ける、全縣下の陸上競技大會に、引續き三度優勝旗を獲得した事は、無上の興味を唆るものであります。但、更に學問の修業の上にも、德性の涵養の上にも、あらゆる方面に於いて、此の意氣を發揮することが必要であります。

殿下の御高徳に就ては、我等の常に瞻仰する所で、今更事新しく申上ぐるを要しませんが、殿下は極めて御多忙なる御日程であらせられたにも拘らず、毫も御疲勞御倦怠の御様子もなく、終始御日程の通り時間正しく御行動あらせられた御精勤と御忍耐と、將又 殿下が民情を御視察になる御熱心と、一には下民の準備を無にせざらんとする御温情とには、感泣の外はないのであります。我等は、未來の國君として仰ぐべき 殿下の御高徳を思ふ毎に、昭代を謳歌し、我が國民の幸福を思はざるを得ないのであります。御親閲場では、殿下を御先導し奉り、又特に御賜謁の榮に浴した自分としては、一層此の感が深いのであります。

今も御親閲當時を追想する毎に、感慨深いものがあります。嚴肅の裡に、和氣を湛へさせられ、端然としてスタンドの上に立たせられた時に、参列の各團體は、一齊に敬禮して、一糸紊るゝ所なく、滿場肅として聲なく、敬虔の情の高潮に達した緊張振は、一團の熱火の如くで、何人も此の緊張振があつたな

ら、天下何物か成らざらんと思はれ、涙ぐましきまで壯嚴の感に打たれました。此大正十五年五月三十日は、現在の職員生徒にとつては、又あるまじき榮譽であつたばかりでなく、本校としては、又永久に記念すべきであります。そこで御親閲場に、記念碑を建立する事に決定して居ますが、記念碑が、唯單に過去を追想せしむるのみのものであるならば、其の意義は少いのであります。之を以て更に將來、感奮興起する所となるやう、至嘱に堪へるのであります。

當日は幸天候の都合もよく、何の遺漏も、遺算もなかつた事は、一同の捧ぐる赤誠の結果と信じます。今や當時を追想して、感慨盡きず、改めて諸子に、此の盛儀を無にせざるやう、祈るのであります。

## 萩 御 親 閲 記

我等はあまりにこの感激の熱情を表現すべく自らの語彙の貧弱を愧づるものである。

大正十五年五月三十日午後二時十四分!!

我等、否上遠く我等の祖 下永く我等の裔にまでも語り傳ふべき無上の光榮と無限の歓喜に浴し得たその日その時である。英明の君わが 皇太子殿下を載せ奉りたる鶴駕はしづしづ校庭前に車を停め、畏くも殿下の御一步は静かに我校庭に踏ませられ。かくて數ならぬ我等が 殿下御親閲の光榮に浴し、御英姿を咫尺し奉るを得た時である。

あゝこの日よ この時よ!!

指月の峯の月に盈缺はあらうとも 阿武の川浪逆流の日は来ようとも、我等がこの光榮に感激する心は永劫に消ゆる日はあるまい。

この土よ!! かつて 殿下の御足は親しくこゝに踏ませられたものである。

この山よ この水よ!! かつて 殿下の御旅情を慰め奉つた光榮のものである。

而して數ならぬこの身よ!! かつて 殿下に咫尺し奉つた光榮の身ではないか。

筆を執りつゝも熱淚の滂沱たるを禁じ得ないものがある。

何事のおはしますかは知れども

かたじけなさに なみだこぼる、

我等は餘りにこの感激の熱情を表現すべく自らの語彙の貧弱を愧づるものである。此に御親閥の次第を錄し、我等と我等の祖と裔との永久の記念としたいものである。

### 一、設備作業の概況

國史三千年の久しき嘗て 天皇 皇太子の行幸啓を迎ふるを得ざりし北海岸の萩が、惶くも鶴駕を奉迎し得るの光榮を荷ひ得べしとの御發表に對し、苟も萩に緣故あるもの、誰か抃舞欣喜しないものがあつたらうか。而も我が萩中學校の運動場が御親閥場と定められ、我校の校長岩田博藏先生が御親閥場委員にして又御先導役に任せらるゝことに指定せらるゝや、我校の職員生徒の緊張味は、又極めて他と異なるものあつた事は言を族たない。職員會議は之が爲に幾度か開催せられて、御親閥場の設備作業は一切我校の職員と生徒とに於て担任することに決定し、軒て其豫定は發表せられた。生徒は押し合ひて掲示場に集まつた。讀む者は皆踊躍した。語るものは皆歎呼した。

曰く「質實義勇の校訓、忠孝第一の國教、我輩之を發揮すべき秋は來たのだ。我輩奮つて運動場の均平清掃の事に當らずして誰ぞ。誓つて他者の手を勞する事をせんや」曰く「殿下我校に行啓あらせられ我校長之が御先導申上ぐるの光榮は、我輩之を御先導するの光榮を荷ひたると何ぞ擇ばん。我輩はこの特別の光榮を有す。運動場整理の勞何かあらん」と。是生徒の多數が相語れる熟誠であり、且つ所期であつた。

さりながら我が八段歩の運動場は其整理又容易ならざるものがあつた。其地元來舊藩大夫の邸地にして堅牢なる土壁、大廈の礎石は、地底幾尺の深きに達し、之を除去することは容易でない。其中央部は兎も角多年の間に堀り取られたけれど、縁邊四周に屬するものは、平素餘り使用せられず、依然地面に多くの尖頭を露出せるまゝに放棄せられ、除去の工事の困難は想像に難くなかつた。加ふるに場の中央部低下して疏水良好ならず、雨後の使用は往々不便なるものあり。到底この儘にて鶴駕を奉迎し得べくもない。以て人を役せんか、必ずしもその費なきにあらねど、而も多額の費を要し、且つ我輩生徒の志でもない。

議は既に決した。職員生徒の氣は既に溢れた。作業は今や開始せられんとする。

大正十五年五月十七日、全員講堂に會して岩田校長先づ 皇太子殿下の御高徳につきて約一時間餘講せられる所があり、次に教師香川政一氏の防長人士忠君事績の講話があつた。曰く

「抑防長の勤王はその由來極めて久しきも、其運動の最も明確となつたのは、文久戊午の密勅降下以後である。水戸藩等十五藩に賜はつた文久密勅については、天下既に之を知るも、特に我藩に下賜せられた密勅に就ては、天下之を知るものが少い。安政五年八月五日、右田毛利氏の臣甲谷兵庫京都にあり、

議奏正親町三條卿と書事を以て豫て之を知る。乃議奏中山大納言と議して彼を非藏に召し托するに密勅を以てした。兵庫之を髪に納れ微服して歸國し、八月廿一日萩着、之を藩公の手に達す。公感奮直に周布政之助を内奏使として陰に京都に入り奉奏する所あらしめた。藩は是から藩是を定めて、皇室に忠、祖先に孝、幕府に信の三綱領とし、公武の間に周旋したか、幕府の誠意なきを見て、自ら奏して車駕宮門を出でらるゝ様に請うた。勅旨嘉納せられて文久三年二月廿八日、孝明天皇加茂行幸のことか決した。清永五年後水尾天皇二條城行幸以來二百餘年、今長州の建議によつて始めて此の盛事があつた。次で石清水行幸、畠火山行幸の議皆長州の建議で、凡て攘夷親征の前提であつた。幕府大に驚き俄に密策を以て朝議を一變した。これ實に文久三年八月十八日で長人は京畿を退けられ、勅して攘夷の事凡て之を幕府の便宜に任せ、更に同日以前の勅宣は聖旨でないとの布達があつた。長人服せず十八日以前の勅宣こそ全く眞の聖旨であると、遂に元治元年蛤御門の變となり、前後二回の征長の役となつた。長人益々服せず、或は奉勅始末を錄して天下に訴へ、或は防長臣民合議書三十六萬卷を活刷して各自之を懷にして一死快戦し、微衷を聖上に達せんと契つた。かくて大政奉還となり藩主敬親更に眞に聖旨を奉戴するは國を擧げて王土王民となすにあるとし、薩土肥に説きて遂に明治二年正月二十日封土奉還の奏請となつた。而して之等多年の奔走は凡てかの密勅奉戴の一事がから生じたのである。香川教師の講演は二時間に涉りて能くこの顛末を明かにし、天皇親政あらせられ、出でゝ四方に行幸せらるゝは、實に長州上奏の賀茂行幸に胚胎し、今回殿下特に萩城址に行啓、舊邸内の我校運動場が御親閲場となし給ふについては特に無限の感慨があると說かれて局を結はれた。

此の日午后全校生徒作業に從事したが固より一日で完成する筈はない。且つ日々の學業も亦決して廢すべきでない。是より十八日十九日二十日二十一日の各日に涉つて各學年各其の區域と其の作業の種類とを分担し、授業と作業と交互交替して寸隙も憩はないこと連日、略、巨石の堀取り、石垣排水の整理瓦礫雜草の除去の功を竣つた。

然るに廿三日御親閲豫行の後、更に局部再作業の必要を認め、次で二十日以來天候不良陰霖連日に亘り、殊に廿八日の豪雨は作業の跡を破壊して天猶晴れず、廿九日朝全校生徒登校したが遂に作業に就くを得ないで解散した。かくて午后雨少し減じたので寄宿舍生百餘名直に残りの作業を破壊復舊の事に當り、夕暮漸く全部の作業を完了した。

翌三十日は即ち鶴駕行啓の當日である。早朝舍生全部場内を清掃し、縣施設の御親閲臺も竣成した。緑門の額「奉迎」の二字は新綠の指月を背に特に鮮かにして、全校至誠の溢るゝ所全くこの二字に表徵せられてゐるものである。洵に校長以下教職員生徒使丁に至るまでの全校總動員の血と汗が凝つた奉仕作業の結果は、清潔森嚴の氣をして御親閲場全部に漲らしめることが出來たのである。

かくて定刻の近づくを待ちつゝ、只管の霖雨の霽れんことを祈つた。

## 一一、御親閲場ご史蹟

萩中學校の敷地は舊藩時代の一門宍戸氏同じく一門右田毛利氏及び藩士口羽林二氏の屋敷跡で、右田毛利氏は防長文學上由緒特に深く、佐波郡右田小野牟禮等凡て文學發祥の地とも稱すべき諸邑を領し、

領主も代々好學にして屢々國相となつて藩治に貢献する所があつた。就中毛利廣政の如きは天下稀に見る賢相で、治績も多く藩學明倫館の創建も主として廣政の力であつた。所領小野村から山縣良齋、周南父子が出て、二州文學始めて傳ふべきものがあり、實に二州文學は全く右田毛利氏から出たといつても過言でない。維新前の當主は毛利筑前元統で、毛利藤内は實にその子である。藤内は維新的際國事に功があり、後佛蘭西に留學して防長百十銀行及び今の防府中學校の前身である周陽中學創建等の事蹟があつた。明治十八年明治天皇本縣行幸の際特に藤内の墓前に勅使を派せられた。明治三十二年萩中學校が縣立となつて新に敷地を要するに當つて、現當主男爵毛利祥久氏は價を論せず邸址全部をその敷地に提供し、始めて堀内に萩中學校の建設を見るに至つた。惟ふに萩中學校がなければ御親閱場もない。此際校地の由緒は大いに御親閱に關係があるといつてよい。

宍戸氏の邸址は其の後購入擴張せられた運動場で、實に今回の御親閱場がそれである。宍戸氏は毛利氏一門六家の上席であつて、資格四支藩の次に位し、熊毛郡三丘を領してゐた。家祖宍戸隆家は藝州の豪族、元就公の長女五龍の方を娶り、公の股肱としてその建業を佐け、功を以て藝州高田郡甲立五龍城主となつた。輝元公移封の際當主元秀隨つて萩に移り、佐波郡右田牟禮地方を領し右田毛利氏の祖元政は三丘を領した。後、命により二家其の所領を交換して維新に至つた。其の際の當主は宍戸備前親基であつた。元治甲子の變後長藩朝讒を蒙り、幕軍來つて四境に逼り藩大夫益田彈正親施、福原越後元禪、國司信濃親相は責を負うて死を賜ひ、次で清水美作親春も亦死を賜ふに及んで、又大夫に任する家なく下僚藩政を握つて専ら恭順の意を表した。高杉晋作奮つて義旗を翻し藩論を一定して、一意朝旨を奉戴

且幕府無名の師に抗したので、再征總督紀伊茂承は廣島に來て藩主を召した。偶藩主病あつて命に應ずる能はず、次で四支藩を召したが亦皆病を以て辭した。親基の資格が其次だつたので遂に藩主に代つて廣島に行く事となつた。處が内外の要務は悉く親基の双肩に掛つて、藩外に出る餘裕もなかつた。そこで藩士山縣半藏を親基に代つて遣はした。所謂宍戸備後介で親基の分家といふことにした。時は慶應元年六月廿四日の事であつた。次で八月一日親基親ら廣島に行つて藩情を陳べた。松原音三、小田村素太郎が之に從うた。素太郎は後の男爵構取素彦のことである。

是より先元治元年八月英米佛蘭四國の聯合艦隊が下關を攻撃した。その和を講ずるや、媾和使高杉晋作は親基の子宍戸刑馬と稱して英艦に赴いた。

思ふに外艦亦親基を藩主の代理としたのである。維新後備後介は功によつて子爵を受けられた。宍戸磯がこれである。親基の家も亦國事に功あるを以て男爵を授けられた。現當主は宍戸乙彦である。

御親閱場は防長勤王事蹟に密接の關係あること此の如く、且つ道を隔てゝ東に國司信濃の邸址に隣り、北に隣れる福原越後の宅址は我校校長住宅となつてゐる。清水益田兩大夫の家亦校を距ること遠くなく殿下行啓の御道筋から總て望見する事か出来る。仰ぐ指月の城山は新綠深き木陰に維新回天の策源史實を擁して、我か親閱場と相待ちて鶴駕の御來臨を待つこと切なるもののやうである。思へば歎呼抃舞して鶴駕を迎ぶるもの、決して參集數千の民衆はかりではないのである。

### 三、奉迎感想の一端

我が御親閲場に參集すべき關係者は阿武、大津、美禰三郡の男女中等學校、在郷軍人、青年團、處女會にして、學校數七、團體數百六十六。人員は生徒二千一百七十六人、團體員三千〇三十人、合計五千二百六人である。豫備役陸軍少將松田善衛氏之が總指揮官である。

前日まで霧々たりし淫雨、此日漸くその脚を減じて四周の峯巒は黎明と共に濃霧模糊の間よりその頂を現はし、仰けば冥雲漸く薄らぎて殘雨亦減す。午前十時所定の人員悉く參入。場は早晩清掃せられて一点の塵を見ず、鶴駕を迎ふる用意に於て、地と人と、凡て緊張敬虔の氣満ち溢るゝを見た。

軋て續々として打ち揚げらるゝ煙火の爆音は、美禰郡瀧穴を出て給ひし鶴駕の漸く近づき給ふを報するのであつた。折しも西北の和風は徐々に宿雲を拂つて、爆聲毎に深碧の空点々として仰ぎ見るを得、正午鶴駕御着萩の頃には霧、雨共に收まり、脩竹老松端然として動かす、三四日來見るを得なかつた陽光は燦として高く中天より金線を場に放ち、軒檐に翻る日章旗と共に、一天を至大的奉迎國旗化したのは誠に此の日無比の祥瑞であつた。

午后二時十四分玉車の響あり。嘹亮の喇叭は君が代を奏して森嚴の氣場に満つ。爰に畏くも尊き御親閲のこと行はれ、岩田校長は畏くも御先導を爲し奉り、扈從の大官陸續として劍光帽影燐として輝く、總指揮官松田少將は全員を指揮して敬禮を行ひ、殿下は舉手の禮を賜ひつゝ場内を一巡し終られて御親閲臺上に立たせられた。阿武郡長岡乙次郎氏は鞠躬如として御前に進み出た。殿下萬歳の聲は三度高く五月の空に響いて、全員の心腸に徹し、我もなく人もなく敬虔感戴の極感涙の禁じ得ないものがあつて私かに至誠奉公の默契を結んだものあること疑ひをまたない。かくて二時二十分御親閲全く終つて、再び君が代吹奏裡に鶴駕は轆轤として場を發せられた。

凡そ今回の行啓に當りその光榮を荷ひしものすべてが、如何に之を子孫に傳ふべきかについては、意義に於ても計畫に就ても、考ふべく爲すべきもの多きを信する。さりながら我等の爰に痛切に感じたる教育上の問題三あり。曰く

一、防長維新翼賛の歴史が如何に貴く重んすべきかを明にし、今後の教育上國體の擁護と國力の伸展を期するには、唯一の精神亦この外に出てざることを今更の如く天下に示されたること。

二、縣及び特に萩はこの大なる光榮に答ふるに、先つ教育施設の發展を期し、以て教育縣たる平素の所期を空しくすべからざること。

三、學生青年處女に引見を賜はりし無上の光榮について、彼等に意義ある理解をなさしめ、謹嚴以て國を愛し、質實以て身を固め、義勇以て國家の中堅として自ら任せしむるやう、學校教育上及社會教育上一段の指導と向上とを期すべきこと。

これである。

### ◎御親閲日誌

皇太子殿下萩町行啓、本校運動場を以て御親閲場に充てられ、本校職員生徒一同親しく殿下御引見の榮に浴し、殿下の御英姿に咫尺し奉るを得たるは、本校歴史の頁を飾るべき無上の光榮で、左の日誌は特に本誌に錄して意義深きものたるを信する。

大正十五年三月十六日 木下東宮事務官は縣知事、警察部長等を隨へ午后四時來校御親閲場を視察せらる。

四月二十三日 午后二時より御親閲に關する縣の方針内示會を本校應接室に於て開く。縣廳よりは小倉縣視學の臨席あり。其他岩田學校長、山本(光)伊藤兩教諭、齋藤萩高等女學校長、長井萩商業學校教諭末宗阿武郡視學、藤村在鄉軍人分會長、萩町より岡田幸槌氏等列席せられ、各種事項を打合せ四時過終了す。

五月四日 午后一時三十分より萩公會堂に於て前東宮武官陸軍歩兵大佐濱田豊城氏の皇太子殿下御高徳に關する講演會あり。生徒をして之を聽講せしむ。全夜午后七時より同じく公會堂に於て皇太子殿下に關する活動寫真あり。生徒をして觀覽せしむ。

五月六日 學校長より御親閲場地均し其他に關する經費豫算調書を縣知事に提出す。全日附を以て學校長は御親閲の際の正御先導者に委嘱せらる。

五月八日 學校長御親閲に關する打合會の爲め山口に出張せらる。

五月十日 學校長は本日附を以て御親閲に關する委員を委嘱せらる。

五月十三日 午後五時十分磯松學務課長、玉野縣屬、岡郡長御親閲場視察の爲來校、山本(光)伊藤兩教諭立會の上視察を了し即時退去せらる。

五月十五日 午前九時より本校地内萩圖書館に於て參列各團體の行事打合會を開く。列席者は阿武、大津、美禰三郡の在郷軍人會、中等學校、青年團等の幹部なり。午后三時過終了す。

五月十七日 午前八時より講堂に全校生徒を集め學校長より御高徳に關する講話あり。次で香川教師より防長人士勤王事蹟に關する講話あり。午後は全生徒の服裝検査後御親閲場地均し作業をなす。

御親閲場は四分して第二學年生以上之を分擔し、第一學年生は鍬を要せざる中央を受持つ。作業は全般の地面の地均しをなし排水をよくし四周の溝を清潔にすることとす。

五月十八日 午前中三年生以下午后四年生以上の御親閲場整理の奉仕作業をなす。

五月十九日 午前中四年以上午后三年以下の作業。

五月二十日 全校生徒午前八時より十時迄作業、降雨のため中止して全生徒奉迎歌練習、午後又作業、二時四十分よりは生徒一同提灯行列豫行演習に參加のため運動場に集合、山本(百)教諭の提灯行列に關する一般心得及注意ありて奉迎行進歌練習後同三時三十分提灯行列集合地に出發、同五時三十分歸校解散す。

五月二十一日 午前八時より十一時まで一、四學年作業、午前十一時より午后一時三十分迄二、三、五年生作業、作業後行啓に關する職員會議あり。

五月二十二日 午前八時服裝検査を行ふ。終了後御親閲隊形編制及奉迎歌練習を行ひ、後又作業。

五月二十三日 午后御親閲と同一時刻を以て豫行演習を行ふ。萩町内男女中等學校及阿武郡青年團處女會在郷軍人美禰大津兩郡の各團體代表者等參集し、地方長官親しく臨場せらる。

五月二十四日 三年生以下半日作業。

五月二十六日 午前十一時より生徒の服裝検査を行ひ本校生徒のみの御親閲豫行演習を行ふ。午后一時四十分より各學年作業。

五月二十八日 午前八時十分より校庭及各教室の掃除を行ひ。午前十時より御行程御安泰の祈願祭縣社春日神社に於て執行せらるゝに付職員生徒一同參拜祈願す。歸校後前庭に於て明二十九日行ふべき奉迎式の隊形に整列し、奉迎歌の練習をなし當日遺憾なきを期す。

五月二十九日 午前九時本縣廳前庭に於て奉迎式舉行せらるゝにつき本校よりは岩田學校長及職員總代として伊藤教諭列席せらる。本校に於ても同刻奉迎式を舉行す。雨天のため講堂内にて舉式、皇太子殿下の御寫真を拜し奉迎歌を唱へて萬歳を三唱す。式後生徒一同に紅白の祝餅一組を分配す。本日御親閱臺成れるを以て之が警備のため及校内一般警備のため本校も寄宿舎も宿直教員を各二名とし小使炊夫は全部宿直す。

五月三十日 本日は愈々御親閱の日なり。早朝寄宿舎生全部は御親閱場全般に渡りて之を清掃し一点の織塵をも留めず掃痕拭へるが如し。昨日來の豪雨も次第に霽れて初夏の陽麗かなり。御親閱場は入口に萩町より設備せし綠門あり、場の中央には縣より設備せし御親閱臺あり、場の西南道路には赤十字社山口支部及萩町派遣の醫師看護婦の控ふる救護所あり、午前十時各團體は各集合所に集合し午前十一時半迄には悉く參入を終る。各團體整列を終るや一二回豫行演習を行ひ一同敬度慎重に鶴駕の御到着を待つ。かくて豫定の時刻より後るゝこと二十分、午后二時四十分殿下の御召自動車は轆轤の響と共に御到着あらせらるゝや、岩田學校長は恭しく御親閱場入口に奉迎し總指揮官松田少將は「氣を付け」を令す。此の時に當りてや滿場寂として聲なく、在郷軍人會の旭日の會旗と青年團の星章の團旗とは翻々として微風に靡き、壯嚴嚴肅の氣場に満つ。やがて總指揮官は敬禮を令し、喇叭手の君

か代吹奏裡に殿下は靜かに場に入り給ひ、岩田學校長は恭しく殿下の十五六歩前を御先導す。殿下は東宮武官を前にし、地方長官を側にし扈從の、大官を從へさせられ、在郷軍人會を始め男女各中等學校青年團處女會の順に御親閱し給ふ。各團體を一巡し給ひ中央の臺上に立たせ給ふや、阿武郡處女會長岡乙次郎氏は鞠躬如として中央御前に進み出で、殿下の萬歳を三唱し全員一唱毎に雙手を上げて之に和す。天地爲に震撼す。之にて御親閱を終り長官は進み出で、殿下の御先導を承はり、學校長は之を御出口に奉送す。再び喇叭の君か代吹奏裡に御召自動車は靜かに場を發す。

あゝこの僻陬に殿下の御親閱を仰ぐ聖代の恩澤一同の感激措く能はざる所にして、草莽の微臣御風貌に咫尺し奉るを得る、光榮何物か之に如かん。かの豫行演習に當りては或は時に卒倒するものありしと雖も、愈々御親閱に當りては一人の倒れし者なし。以て如何に各自が緊張せるかを知るべし。

かくて我等は四旬に餘る時日の間、肝膽を挫き萬遺漏なきを期して準備せし御親閱は、極めて敬度嚴肅の裡に好成績を以て終るを得たり。上は學校長より下は生徒小廝に至るまで漸く安堵するを得、茲に首尾よく大任を了したり。それより各隊は各自解散歸途につく。

五月三十一日 午前六時職員生徒一同は橋本町に集合し後萩驛前所定の位置に整列し、鶴駕を奉送す。午前八時御召列車は萩驛を發す。

六月一日 午前七時三十分より學校長は講堂に全生徒を集めて行啓に關する訓話を行ひ、終了後全生徒御座所跡(毛利家別邸)を拜観す。

六月八日 午前七時三十分より今回笠山にて全山博物につき御説明申上げし本校田中教諭及萩町鄉土史

に就て御説明申上げし萩町書記藤本灑江氏より當時の状況を生徒一般に聽講せしめたり。

#### 附記 第一

御親閥と相關して今回の鶴駕奉迎に就て、特記せざるべからざるは、我校陸上競技部選手が、山口に於ける台覽競技に優勝せること之なり。

五月二日 午前十時より山口高等商業學校前運動場に於て豫選會あり。（部記事参照）

五月十二日 午前十時より山口町御親閥場に於て台覽競技豫行演習あり。三浦教師選手を引率して参加す。

五月二十一日 同じく第二回豫行演習あり。前回と同様參加す。

五月二十九日 本日愈山口町御親閥場にて台覽競技あり。成績左の如く我が校陸上競技部の名譽は永く校誌に記錄すべきなり。（部記事参照）

#### 附記 第二

陸上競技部の名譽と共に更に我が校は山口町御泊所に於て左の生徒の成績品を台覽に供するを得しは獨り生徒の光榮とすべきのみならず、又我が校の光榮とすべきなり。

寫生畫（本校前面の水彩） 五年生 河村祥三

全 （萩城址の水彩） 四年生 河村忠雄

平假名交り文細字楷書 三年生 藤井 潔

士規七則中の二大字楷書 二年生 中所元臣

#### 附記 第三

萩町主催提灯行列參加

五月三十日 午后六時生徒一同は本校運動場に集合し隊伍を整へ町役場より配布せられたる提灯を受取り、校旗及高張提灯を先頭として堀内本町片河五間町渡り口を経て土原濱坊筋に一旦整列し、八時十分迄に土原新道に御假泊所毛利家別邸に面して八列横隊に整列し、八時三十分總指揮官豫備役陸軍少將松田善衛氏の發唱にて參加者全部と共に一齊に、皇太子殿下の萬歳を三唱し、本校は全員の先頭たるを以て第一に行進を起し、奉迎行進歌を高唱しつゝ八列縱隊のまま御假泊所前を経て五間町に至り四列となり五間町を経て香雪園に至り解散せり。

#### 附記 第四

岩田學校長が萩町御親閥場に於ける御先導の大任を受けしことは前記の通りなり。尙學校長及教諭心得香川政一氏は教育功勞者として、殿下の命により二十九日山口町に於て賜謁の榮に浴し（但し香川政一氏は都合により御辭退せらる）田中市郎教諭は笠山に於て同山博物狀況に關し御説明を申し上げ、三浦梅次教師は山口御親閥場に於ける競技審判に與りし事、何れも本校の光榮とする所なり。



## 學びの園

### 二記念の由來及精神

特別會員 香川政

#### (一) 緒言

今回我校校友會基金一万圓に達し、利子の使用を始めらるゝに當り、報本反始の趣旨に基づき、先づ二つの記念事業を行はることとなれり。我校の敷地なる右田邸址のために碑を建つること、明治初年萩中學の創建以來尤も功勞ありし中村雪樹先生の寫真を、講堂に掲ぐることはなり。

#### (二) 右田毛利氏と防長

右田毛利氏は洞春公の第八子天徳院元政公に起る。元政少壯にして播州上月城の役に驍名を顯はし、征韓役に從軍して、殊勳を樹つ。毛利氏移封後、熊毛郡三丘を領し、次で移封して、佐波郡右田小野牟禮等の諸邑を領す。後裔常に藩の要職に任じ、就中五世廣政は藩主泰桓公を輔けて、藩學明倫館を創建し次で觀光公に仕へて、享保飢餓の際には尤も賑恤に力め、其身も遂に其際流行の疫に罹りて逝く。稀に見るの賢相にして、人稱して小松殿といひ、以て平重盛に比せり。

#### (三) 海北文學と防長

右田毛利氏の鄉學を、時觀園といふ。寛永五年に三世元法君之を創建し、江戸林氏の昌平黌（寛永十年創建）に先つこと五年、藩學明倫館（享保二年の創建）に先つこと八十九年、徳川時代に於て、諸國學館中の尤も早きものと稱せらる。時觀園創建當時の教師等は遺憾ながら明かならざるも、牟禮に桑原武正あり、文武に達し、寛永より元祿時代にわたり、郷中の子弟を教育する傍ら時觀園の教授たりしといふ小野村に山縣良齋あり。貞享中主として時觀園を掌り、才學多く門下より出づ。時に邑主廣政藩學明倫館を經營し、良齋及其子周南相携へて、明倫館講官に列す。周南は荻生徂徠に學ぶ。職を明倫館に奉するに及び主として學規を立て、次で館祭酒に任す。防長の學事これより觀るべし。

時觀園は其後博文堂、學文堂、本教館等と改稱し、瀧鶴台、尾中昌言、宮原敬齋、若月伯禮、杉山三關、大田稻香等は歴代講官中尤も名聲ありしものなり。稻香名は穀、三田尻の人なり。文を廣瀬淡窓に學び、武を高島秋帆に學ぶ。門下尤も秀俊を出し、赤川晚翠、大樂源太郎、德永秀之、佐久間佐兵衛、中村九郎、甲谷兵庫、今川岳南、今川深造、青木周藏、大洲鍊然、土肥螺峯、吉田恕庵、長松幹、長松鍊藏等特に著る。今川岳南其の後を承け、次で明治時代に至り、岳南は周陽學舎の校長となる。

#### (四) 我校との關係

明治三十二年夏我校縣立の議あり。有志より敷地及校舎の一部を縣に寄附するにあらざれば成立せず。偶醜金猶多く集らすして敷地購入に苦しむ。堀内三郭の右田屋敷址を選みて、廉價を以て販賣せられんことを請ふ。男爵毛利祥久君之を快諾し、縣立の議始めて進捗するを得たり。邸中針櫻の大樹あり。保存して記念となす、所謂甘棠剪らず伐らざるの意なり。其後樹枯る代るに今回の建碑を以てせり。

## (五) 中村先生事蹟

中村先生名は雪樹、草菌生又栗軒と號す、萩の人、幼にして藩學明倫館に學び、壯年江戸に出で、安井息軒に學ぶ。息軒の先生を送る序に曰く、

夜深ク人定マリ、讀書ノ聲娓々トシテ曉ニ徹スルモノ、問ハズシテ其子彬タルヲ知ルナリ。

と子彬は即先生の字號なり。次で羽倉簡堂及水戸の會澤正志等に學ぶ。歸藩して明倫館都講となり、其後藩政に參與すること十年なり。時に幕末國家多事、藩内は勤王佐幕二派に分れ、國難屢起りて益々藩政を紛糾せしむ。先生終始正義を守りて政事堂庶政の中堅となり、藩治以て紊亂を免る。藩公屢賞賜あり。明治五年藩公居を東京に移さるゝに當り、特に公愛玩の水差を先生に賜ひ書を添へて曰く

御家督以來重き御役に被召出候處今般東京御引越に付被下候事

明治五年より明治七年まで、山口縣に出土して、大參事となる。其間に學制の頒布、地券發行等の大業あり。先生よく其事に任じて治蹟大に擧る。是より先萩に巴城學舍開創のことあり。これ實に萩中學校の前身なり。創設當時の巴城學舍當事者は今詳ならず。明治九年五月十八日先生齡四十六才を以て、改めて巴城學舍校長に任じ、秩序的經營是より始まる、當時の學舍は藩學明倫館の建物を使用せしが、明治九年十月前原一誠亂を起して館内に據り、混亂舍務を妨げ又如何ともするべからず。先生尤も書庫の被害を憂ひ、晝夜敷刀にて庫前に起臥し、以て災厄を免るゝを得たり。今日明倫館藏書の捺印ある遺書を見るもの、先生當年の苦心を思はざるべからず。爾來明治十七年九月二日まで、萩中學校長たるもの九年なり。文部省之を賞して賞賜する所あり。

一、六國史 壱 部

一、硯 箱 壱 個

以上

山口縣立萩中學校長 中村雪樹

教育上功勞不尠ニ付二等賞トシテ目錄の通付與候事

明治十六年十二月二十日 文部省

先生の萩に於ける教育上の効績は獨萩中學校の建設に止らず、明治十八年九月三日より二十年三月まで明倫小學校長に任じて該校を創建し、明治二十一年二月修善女學校創建のことあり。凡萩に於ける中初等新教育のこと、悉く先生其の播種に當りて、以て今日の盛を見るを得たり。明治二十二年六月十五日選ばれて萩町の初任町長となり、次で東京高輪毛利家に編輯局を創設せらるゝに及び、先生特に招かれて副總裁となり以て事實の創業に當る。時に明治二十三年三月なり、偶同年秋東都寓所に於て病を得九月二十三日六十歳を以て歿し萩町北古萩妙蓮寺に歸葬す。

先生嘗て小照に題する詩に曰く、

五十年光彈指間、歷過世路幾多艱、老來一擲經綸事、剩見瘦軀鬚髮班

大正十年秋先生の三十三回期辰に際し、明倫、萩中學、修善及萩商業、萩高等女學校相謀りて、先生のために祭祀を營み、大正十一年十月三十日萩町は、先生のために、明倫小學校内に建碑せり。新刊文庫

(六) 結論

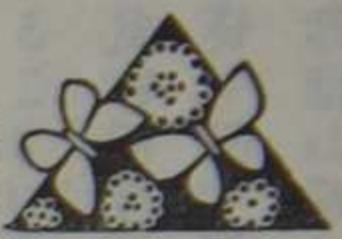
我輩は海北文學及中村先生の事蹟につきて、多くの學ぶへき潛在精神あるを認む。曰く、創建率先の氣分、曰く犠牲的努力、曰く學事尊重の精神、曰く後進に對する熱情是なり。特に注意すべきは海北文學及右田毛利氏の事蹟に温乎たる懇切味を帶び、中村先生の寛厚人を率ゐ、德能く人を化して施設皆成れることは大に味はんことを要す。凡そ世に唱首たるもの、往々慷慨激越、人と相容れざるを以て特色と信じ、自ら以て誇るの觀あり。爲に世人の指彈を受け、事徃々刑累に觸れて遂に爲す所なし。然るに海北諸先輩及先生の爲す所は之に異り、嘗て過激不穩の舉動を見ず、明倫館の山縣周南、右田の大田稻香の如き、其の爲す所頗温健にして、門下に多くの俊才を出せり。最後に一言すべきは中村先生の勤王精神なり。明治四十四年六月一日朝廷特に先生に從四位を贈る。先生の爲す所實に皇家を離れざるなり。萩生徂徠は古今の名儒なるも大義名分に於て聊か通せざる所あるを遺憾とす。然るに其門人なるも右田出身にして防長文學を創建せる山縣周南は曰く、  
大東宇宙ニ超ユルモノ三、一姓君タリ、天下ヲ保ツテ臣位ヲ去ラズ、封建ヲ大成ス  
と、朝廷周南に對しても亦贈從四位の典あり。

我校海北文學に密接の關係ある右田邸址に校舎を有し、我校の前身は中村先生の經營に成る。來りて我校に關係する者、今日施設二記念に對しては、報本反始の根本義に於て、皇家に表忠の誠を竭し教育の本意を全くせんことを要す。顧みれば今年五月には攝政宮殿下親しく萩町に行啓し、我校の運動場にて阿武大津美禰三郡の、在郷軍人、中等學生、青年團、處女會員を親閱遊ばされたり。運動場は右田邸址にあらずして、宍戸親基君の邸址なるも、宍戸家も亦多年舊藩の大夫に任じ、就中親基君の維新の際

國事奔走の勞に對しては、朝廷其家を男爵にす。我校は殿下行啓の記念として、第一に建碑、第二に肺育獎勵、第三に自學指導の三事を定め、既に別に着手の進行するあり。今日の二記念と相須ちて、益々我校の異彩を發揮せんことを願ふや切なり。斯くて後始めて二記念の目的を達せるものといふべし。

（右ハ本年九月廿七日海北邸址建碑式及中村先生寫真掲上式ニ際シテ講演シタル要旨ナリ）





## 文の林

文の林は不相變暑中休暇中の宿題(小品文)を載せることにしました。

### 旅行の樂

第一學年 平井正臣

尋常二年の時、京城地方を旅行したのは、僕が記憶に残る最も長い旅である。汽車で一夜を明したのも、驚きの一つであったが、野も、山も、家もすべてのものが、後へへと飛んで行つて、見る／＼變る姿の面白さ、電車や、自動車に乗つた愉快さ、動物園や奈良の鹿や、鯉は、本當に僕の心を樂しませた。博物館や、神社佛閣等は、何の興味もなかつたけれども、大佛の大きかつた事は、忘れられぬ。學年の進むにつれて、旅行した事が参考になる。母の云ふ事を聞いて、よく見たらよかつたと、後悔してゐる。此の間枝光に行つた時

らくは聲も出なかつた。初めて口を開いたのは、幾分も後のことであつた。

### 夏の夕

一學年一組 高橋祐之

眞赤な夕日は西の空をやいてゐる。鳥は西の空にむかつて飛んで行く。  
雨あがりの川は濁水となつて、渦をまきながら、ごう／＼と音をたてて流れである。川向うを見ると觀月橋の邊で、五六人の人々が長い釣竿で何かさりに釣つてゐるらしい。其の背後の家々や、向うの山々は、はつきりとし雨あがりの鮮な氣分を表してゐる。

景色に見られて居ると、午後七時五十五分の汽車が勢よく汽笛をあげて通つた。もう空は薄暗くなつて、星も小さい瞬をしてゐる涼しい風は芦を戦がせ頬を掠める。

### 魚釣り

第一學年 河武治雄

「私は海の子白浪の……」心持よく吹き渡る風に送られて來る優しい童歌。目前には、赤銅色に

の心持は、大分變つてゐた。もとより乗物は昔に變らず面白いけれども、海の色や、山や、工場等を見るにつけ、色々の事を考へて見るだけに知識も進み樂も加はる様になつた。

### 歸省

第一學年 森澤陽亮

學期試験もすみ樂となつた。寄宿舎の友達仲間では毎日の様に、歸省の話ばかり繰り返された。私も其の一人であつた。いよいよ二十日となつた「さやうなら／＼」の聲はどりかはされる。舍内はだん／＼と寂しくなつて行く。私は成績のことも忘れて、足にまかせて驛にと急いだ。驛に着いた汽車は來ない、待ちどほしくてたまらない。友達もやつぱり同じ思ひであらう。家の事はそれからそれと浮んで、ばんやりする。汽車は來た。停まるが早いか、飛び乗つた。汽車ははやくも我が目的の驛に着いた。弟等は迎へに來て居た。其の顔を見るなり、懐しくなつて、我が顔にも微笑が浮んだ。家に歸つた時は、あまりの嬉しさに、しば

第一學年一組 井上國雄

鍛へ上げられた海國男兒が、白浪と鬪つてゐる。煙吐く、沖の汽船は、何處の港をさしてか静かに海上を走つてゐる。おう、さうだ。三年前の夏、臺灣に旅行した事がある。圓く書かれた水平線の彼方から、旭日の昇る様は海ならでは見られぬ絶景であつた。夕陽落ちる時、そこら一面は、只、赤い夕日にとざされて、海も汽船も金色に彩られたその美さ、眞に筆舌に絶してゐた。一島すぎ、又一島現はれ、水路極るかと思へば復醒める様な景色、嗚呼夏の海の美さよ、壯快さよ、我が海國民の象徴そのものだつた。

まだ沖の汽船は、遠く水天の間を走つてゐる。

### 海 水 浴

第一學年 井町秀介

私は友達や、兄さんと一緒に海に行つた。正午過の日光か、焼けつくやうに暑い。波は随分ひどかつたが、人は澤山来て居る。着物を脱いで、水中に入ると冷さが體中に傳つて、今までの暑さはすっかり無くなり大變よい氣持だ。

聲でお經を讀んで、すました顔で、ちやんとお行儀よく坐つてゐる。お膳を出すと「おいちいい」といつて御飯も五六杯たいらげた。母がお金を包んで盆にのせて出すと、にこくしながら歸つて行つた。

### 魚釣り

第一學年 平川五致

ぼか／＼と照りかがやく日の午后、僕は釣に餘念がなかつた。足もとを、目高がす／＼と泳いで行く。底黒く澄んでゐる水底へほつそりとした芒が、無數の姿を寫してゐる。やがて僕はほいと餌を投げた。小波が遠く近くうねりをたてて四方へ散つていつた。僕の瞳は餌に移つた。無數の魚は餌に集つて來る。釣つたと叫ぶと同時に純白な腹をした魚が、水を切つて上つてきた。嬉しさが一ぱい胸にみち／＼た。太陽は平和な下界を見下してにこくと笑つてゐる。

### 郷土を訪ねて

第一學年 齋藤毅

友達と泳ぎまはつてゐる中に、海のすぐ近くを汽車が勢よくぐわう／＼と音を立てゝ走つて行く。窓から覗いてゐた人の顔もはつきりと見えた。だんだん／＼體が寒くなつたので、岩の上に上つて暖まりながら、沖の方を見ると、遠くの島が浮き立つて見ゆ、白帆が二つ三つ漂うてゐる。空には入道雲が銀色に輝いてゐる。

### 庄 兄

第一學年 佐伯正道

僕の村で名物男は庄兄といつて、六十歳位の老人である。無邪氣なので村人が可愛がる。この爺は佐行の音が出ないから、先生といふのを「てんてい」と云ふ。年は幾つかと問へば「あんまりおほいからちらん」といふ。時々びっくりするやうな、はでな着物に赤い帶をむすんで歩くことがある。僕の祖父がなくなつた時のここであつた。庄兄は墨染の衣を着て「今日は和尚様になりまた」と言つてやつてきた。母がお燈明をあげると「ナムカラタンノウトラヤアヤア」と言つて法外の高

私の郷里は大津郡の三隅村である。此の夏には福岡の義兄夫婦や、羅南の實兄が歸つて來た。自分等は此の機を以て、久しうりで郷土を訪ねることにした。近い一族が集ると十七八人は居るだらう。七月二十五日の朝一番の汽車で行くことにした。先づ母の實家の祖父の家へ着くと、直ぐ舟遊びと云ふ動議が出た。野波瀬と云ふ所から、舟に乗り、松島へ行つた。ここで晝飯を了へ、魚を釣つたり、貝を探つたり、水泳をしたりして、面白く遊んだ。東方を眺むれば笠山が遠くかすかに見ゆ、西方を見れば夕陽をうけた仙崎町が見ゆ、其の右側には青海島が黄金の海上に遠く見ゆる。自分等は此の景色を眺めつゝ歸途についた。自然の美の麗しさを飽く程樂んで郷土の印象を深くした。

### 夏 の 庭

第一學年 井上三郎

縁に立ち止まつて庭を眺めてゐると、俄に暗くなつたやうに感じたと思つたら、ピカ／＼と目も

眩むばかりの電がした。僕は驚いて後へすざりかけたが、間もなく、氣持の悪い大きい雷がゴロゴロ鳴りはためいた。俄に大粒の雨が沛然と襲うた。庭に出てゐた蛙は池へ躍り込む。庭の草木は氣持よささうに雨をかぶつてゐる。間もなく雨は霧れて空には太陽が輝いてゐる。庭の草木は甦つて、葉末には銀の玉をキラキラと光らせてゐる。

### 海の景色

第一學年 磯野勵三

ド、／＼／＼と押し寄せては、岩に激する怒濤の叫が、凄じく、勇しく、聞にする。沖の方から白波をけたてゝ、岩を噛み、岩頭に碎けては玉と散る。波が男性の意氣を發揮するやうに見にする。渺茫たる大海原を眼下に見て、鷗は恐れ氣もなく滑走する。

變り行く景色、變り行く感興、風の日、旭出づる海の景色、夕日入る海の眺、風の日、雨の日、雪の日等、何れも勇壯なる場面、やさしい所、凄い所、皆それ／＼の面白さがある。

### 夏休の日記の一節

第一學年 淺原精次

今日は馬鹿にかんかんと焼けつく様な上天氣である。ふと空を仰ぐと、羊や馬の形をした雲が、沖の方へ滑りながら行く。山の中で蟬が鳴くのが一番よく耳へしみこむ。こんな日に机の前に坐る氣も出す、一つ夏休の宿題の地圖の模型を造らうと思ひ、早速新聞紙を二枚、水の中へ入れた。紙がよくほどびる間に、地圖を取り出して、何處の模型を作らうか考へた。一隅に小さな切圖にしてあつた宮島の圖が目についた。それを見て心の中で嚴島は日本三景の一、僕の幼い時、旅行した所、毛利元就公と陶晴賢との戦のあつた地だ、と思ひ用意してあつた板へ輪郭を取つて、やうやう嚴島の模型を作つた。色どりは明日にしようと思ひ、模型製作はやめた。時は丁度十一時頃であつた。午後からは僕の親友と川遊だ。

### 姉

第一學年 大谷齋

炎暑の烈しい夏、磯風にさらされて、大海に對すれば、暑の苦も、書齋での頭の疲れも、自ら皆消へるやうな氣がする。

### 農家の夏

第一學年 藤田完

灼熱焼くが如き太陽は、地上の何物をも焼き盡くさん許りの光と、熱とを、地上に投げ與へてゐる。其の炎天下に、女は植付した田の草取をする。田の水の熟した中を、草取する其の苦しさも、實際に経験してみなければ分らない。其の稻田に水の涸れる事がある。これも夏の農家に取つての一大苦痛である。男は我等がまだ圓かな夢の中にいる頃から、起きて、牛馬の飼料にする草を刈る。朝早く起きて見ると、静かな朝の空氣をふるはせて、草刈る人の鎌の音のみが心地よく聞にする。かうした光景も、夏の農家においてのみ見る事の出来るものであらう。

大豆や小豆を刈り取り、其の後の畑を耕し、蕎麥等を植ね付ける。かうして農家の夏も暮れて行く。姉が死にいた前日のことでした。姉は私と弟とを枕邊に呼び寄せて、言ひました。「お前達程不惑なものはないけれども、心がけ一つで立派な人間にもなれるのだから、勉強だけは忘れず、早く立派になつてお呉れ。私はそれ迄死にたくない」と、身をふるはせて泣きました。私も、弟も、姉の嘆きに誘はれて、涙を呑みました。その翌日、あれは姉は永い眠りについたのであります。數日の後、私は母と二人で、墓参を致しました。私は新しい墓標の前に蹲つた際、姉が死ぬる前日に言つた言葉を思ひ出して、更に今後も必ず姉の言葉にそむかず、一心に勉強しようと、つくづく感じました。

### 朝

### 寝

第一學年 中村梅男

チソソと柱時計は六時を報じたらしい。夢にせめられた僕は、ふと目を覺ました。戸の隙間にから來る光は、僕の枕許までもさし込んで居る。邊には誰も居ない。しまつたと思つて跳起きて見る

ど、食事をすまして仕事に出たものか、家には誰一人も居ない。外へ出て見ると垣に咲いて居る朝顔はもう萎れて居る。随分寝たなと思つて、向の山を見ると、日ははや山の上に一尺二尺と上りつゝあつた。僕は何心なく下手を見下して居る、隣家の馬が勢よくヒンくと嘶いた。家に入つて食事をすましたが、どうしてものはすみがない。さうして其の一日は、何をしても後れ勝であつた

### 村の傳説

第一學年 山田東行

私の村は、青海島の東部に在る一漁村、大津郡通村です。昔、深川村湯本で、討死した大内義隆に關する傳説が、今も遺つてゐます。仙崎と通との間を往復する漁船の着く所は、大船止といふ船止ですが、こゝは、義隆が、陶晴賢に追はれて、はじめて、青海島に上陸した所ださうで、それで大内の大をとつて大船止といふのださうです。こゝから二丁ばかりの所に、大橋というて、長さ一間位の石橋がありますが、義隆が腰を掛けて休ん

から頬ざわりのよい風が船室を通して、向ふに抜ける。

私の幸福を祈るかの様に！

段々と近づく門司。其の向ふに戀しい博多が！

なんだか私は悲しくなつて來た。

我と我心に問うて見れば、行く時の心持に對して？

全く彼地を離れてから、十年振り、今度は何時行かれるやら分らない。

時よ！ 經つなよ！

一昔前同じ連絡船に乗り同じ海の水を押し分け

て行つたらうか？

それは今私の頬を撫でてゐる風に尋ねたら分るだらう。ねに風よ！

### 涼み

第二學年 金田範尾

水泳に疲れた體を東向の縁側に横へて、遙か向ふの、稻田より吹き来る風に、涼みつゝ東の空を眺めた。黄色を帶びた雲は點々として空に散らば

り、月は山の端から大きな顔を出してゐる。

以前から電燈のかさの上でしきりにアンテナを修繕してゐた小蜘蛛は、もう濟して、自分の發明した、アンテナの真中で、じつとラヂオの放送を聞いてゐる様である。

雲は、いつか散りうせ、月は山を離れてまばらな星と共に僕のまはりを見守つてゐる。又、涼しい風が僕の身を洗ひ去る。

### 欄によりて

第二學年 豊田正之

今先きまで子供を恐らかしてゐた雷は何處へ走つたのだらう。東の方には青々とした空が氣持よく現はれた。向ふの山からは、子供等が「猿が火をたく」といふ煙が、もやくと昇つて雲と一緒になる。麓の石垣からは、涼しさうな白い水が流れてゐる。昨日のあつさにかわいた様が、元氣よい顔になつて、一葉一葉にためた滴をちら／＼光らせ、間々から青白い實を元氣よげに出してゐる竹藪の竹は皆重さうに頭をさげて、何か考へてで

だ所なので、矢張、大を附けて、さう言ふのださうです。義隆主従は、追手が、迫つたと聞いて、鳴を西へ逃がれようと急ぎましたが、或時へ來かゝると、從者の一人は、草履の鼻緒が切れました。落人で、しかも討手は迫つてゐるので、殿様の草履を借りて、坂を駆け上つたさうです。それで。それがねばなりません。仕方がないので、殿様の草履を借りて、坂を駆け上つたさうです。それで。それを、駆坂（かけだ）をの訛であらう）といつてゐるのだといふことです。

世は移り、人は更つて、青海嶋も、毛利氏の領地となり、幕末頃には、藩主毛利公が、美々しく飾りたてた船に、乗りつれて、鯛漁に來られた事があつたさうです。村の老人から傳説を聞いて、夏の宵闇を仰ぐと、星は粲爛としてゐます。空の星は、後の藩公の鯛漁の盛事と、前領主義隆の落人姿とを見比べて、如何なる思をしたであらうか。

### 海を渡る風

第二學年 岩田精耕

パサ／＼と、波の舷に當る音。關門海峡の彼方

あるのだらう。蟬はもう晝前だのにまだ元氣よくてゐる。向ふの山の手の草葺の家からは、何處から出るのか、もや／＼と煙が出て、すつと林の中へすいこまれる。

けたたましく、汽車がすぎる。もう十一時だ。

### 月光の下

第二學年 長嶺正衛

ペンを投げ出すと欠伸が一つついた。母は燈下で着物を縫うて居られる。妹は母の膝下で絲をつまぐつたり、又欠伸をしては母の手つきを眺めてゐる。涼しい風がすぎて月の光が流れる。あたりの山は濃靄で掩はれ、山麓谷間は殊に濃く山頂は幻の様に浮んでゐる。満月は黃色の靄に包まれて底強い光を投げてゐる。濃緑色の稻田は重々しく續いて山麓の靄の中へ消えてゐる。向ふの家の電燈がばんやりして話聲が折々聞れる。蟲の鳴く音が前の小川の響と合奏するやうだ。稻の上に自分の黒い影が大きく映つて折々動いてゐる。銀笛を手にして吹いて見る。やさしい音が闇の帷に吸ひ

込まれて夜は静かに更けて行く。

### 海を渡る風

第二學年 赤間傳

涼しい朝風を帆にはらみ、滑らかに波のうねりを越にて我々の乗つて居る小舟は、青海島を目指して滑つてゐる。涼しい夏の朝風は我々の頬をなで帆をふくらませつゝ、沖の方へ流れて行く。右舷の景色は走馬燈の様に展開し、左舷のあなたには半島が青く廣々とした灣をへだてゝ見ぬ、行手の方には四五羽の鷗が風に戯れ、さつき出帆した海岸はもう小さくなつて、松の木が箱庭の木が風にゆれてゐる様にはるかに見ゆる。僕は舷に腰を掛け顔に千里よせ來る海の涼しい風を受け、足に奇麗なコバルトの日本海をひたしつゝ、心ゆくばかり、しだいに展開して行く景色によはされてゐた。

### 夏の朝

第二學年 山崎三資

ら／＼とたゞつてゐる。突然工場の汽笛がなり出した。六時半頃であらう。街燈もばんやりと「そこらに友達は居ないかしら」と言ふ様な顔つきで立つてゐる。妹の呼ぶ聲らしい。さあかへらう。鳥が一羽夕暮の空を横切つた。

### 海峡に落つる陽

第二學年 松岡巖

深紅の落陽を正面に眺めて船は一筋の銀波を辿る。靜として動かざる白帆！ 茫然として自失せる連山！ 橋を押してゐる船頭の顔は真紅だ。自分の浴衣も薄紅色に彩られてゐた。魚はしきりに飛ぶ。夕闇の風は遠くよりスーと吹いて來た。鳥渡後をむくと下關の何處かの窓硝子が電光の様にギラギラと夕陽に反射する。

海面が蒼黒くなる。

淡い淡い三日の月が微笑みはじめる。

門司は電燈が一直線に並んだ。

鷗は低く連れて關門海峡を彼方へ飛んで行く。船はやがて門司に着いた。

### 夕陽に立ちて

第二學年 田中了範

四方は又元の静寂に復つて並木の横から白色の綿のやうな雲が、悠悠と顔を出した。池の面上に白雲が浮いてゐる。

池の傍に咲き亂れたる眞赤のや眞白の朝顔が、愛想よく笑つてゐる。その繁みの内には夏の暑さがひつそり潜んでゐるだらう。

戸を開けるといきいきした朝の空氣があたりへ流れこむで、庭の新綠見るからすがすがしい。殘月の眉に宿つた白露は、何時の間にか綠の玉となつて葉末からボタリ／＼と池の中に落ちては、小さな波紋となつてスーと美しく消ゆる。

戸を開けるといきいきした朝の空氣があたりへ流れこむで、庭の新綠見るからすがすがしい。殘月の眉に宿つた白露は、何時の間にか綠の玉となつて葉末からボタリ／＼と池の中に落ちては、小さな波紋となつてスーと美しく消ゆる。

池の傍に咲き亂れたる眞赤のや眞白の朝顔が、愛想よく笑つてゐる。その繁みの内には夏の暑さがひつそり潜んでゐるだらう。

## 池の前に立ちて

第二學年 高 松 博

朝

第二學年 香 月 賦

「チヨン／＼／＼／＼」音がする、上の池に水が溢れたのだらう。

「ボチン」水の零が落ちる。小さい泡が二つ三つ散ると、輪は段々と大きくなつて行く。

三秒、四秒、涙の様な零は樋口に刻一刻太くなる。五秒六秒、まだ落ちぬ。八秒……又白い泡を散らす、喰悶してゐた鮎が、キユツと、頭をひつこめて、左の方に尾をびりつと曲けて、底にもぐつて行く。

「ボチン／＼」音をたてる、上の池の水をさつき汲んだ爲に樋口迄水が届かぬのだらう。此の金魚池は一昨日一年振りの修繕をしたのである。

一昨日、修繕の日である。

「てごをせんか、馬鹿ツ」

「くじをくりやあ、しやあせんから」と言つてバケツをなげ出して弟は逃げ出してしまつた……。

もう邊は真暗らになつてゐる。月はキラ／＼と輝いてゐるが、障があつて此處迄來ない。

今迄眠りこけてゐた木も涼しい夕立に洗ひ流されて、やうやく葉の頭を上げた。涼しい風が、かすかに吹くごとにバラバラと水晶の零を落してゐる。暑くるしい蟬の鳴き聲もたわて、指月の山には蜩の聲がきこゑる。

岩に腰をかけ、足を潮水にたれて、水底を見るごく美しい小さな青い魚が、ツツツと前を泳いで行く。そばのホンダカラは沈に流られて、フサリフサリと岩に身をうちよせてゐる。

又涼しい風が木の葉をゆすぐると、思ひ出したやうに、水晶の玉がバラバラと落ちる。

後には日和どんぼが飛んでゐた。

欄によりて

第二學年 楊 井 誠 之

流石の大風大雨も、けろりと霧れて、小山の如き怒濤もいつしか鳴め、月は凝視する様に、あの北海に錨を降してゐる、三百噸位の帆船を照し、波に碎けて、白絹の布もて、其船體をやはらかく包んでゐる。舷をたゞく波の音も、静かに。四邊

この静寂を破る何物も無い。此處は北極に程遠からぬ、カムサツカの一灣である。

月！カムサツカの月!!今僕は、南北數千里を隔てた萩の地に於て、同じ兎が杵つくといふ月、それを今、眺めてゐる。川の流は、ひた／＼と音して、夜は漸く静に更けようとしてゐる。月は無言、萬象も無言、自分はいつか北海に戦ふ兄を思つてゐた。

窓にすがりて

第二學年 荒 瀬 國 亮

あまりあたりが薄暗くなつたのでつと空を見た。さつきから曇勝だつた空にいよいよ雨雲が加つて、所々に残つてゐる青空が青雲のやうに見ゆる。ヤギヤと何處からか蛙が鳴いてゐる。一寸眼をそらした間に薄墨を流したやうな空から、やつと肉眼に見ゆる霧雨が静に落ちて來た。と倉の前のトタン葺に見る見る針でついた程の巧な班点が畫かれた。班点の次第に太くなるのは雨が本降に近づいてゐるのだ。煙突から時々出る煤まじりの煙が

そば降る雨に濡れて、ふわりふわりと浮いて来る。空には真黒な雲が様々に形を變へながら東へ東へと飛んで行く。太陽をうかがふと、山の三合目頃からにぶい光りを投げてゐる。雨は一粒毎に太くなる。又、蛙が一聲ギヤギヤと鳴いた。

### 月光の下

第二學年 田原義雄

細長い村の街道をほんやりとした月がほのかな光を投げてゐる。所々窓から漏れて來る電燈の光が仄暗く杉垣を照してゐる。

カラツ／＼といふ僕の下駄の音がシーンとして眠つてゐる村の街を囁き渡る。家々の雨戸は皆とざされてゐて、唯淋しく月が薄あかるい光を投げてゐる。

醫者のうちはまだかしら。

あゝ、吳服屋の二三軒向ふだつた。向ふに月光を受けて浮いてゐるのが確にあの吳服屋だ。吳服太物といふ看板が月明りに見すかされる。思はず足を速める。

月が淋しく光を地に落す。夜の風がスーと草木をなせて行つた。私の眼にはいつか病床の母の姿が現はれてゐた。

### 停車場

第三學年 大野一郎

停車場は、悲しみと、嬉しさとのおこる所である。遙に遠くで、汽笛の音が鳴り響くと思ふ中に汽車は目に見ゆるやうに、近くに來た。汽車が停車すると、旅立つ人は、見送り人達と手を離して涙ながらに別れを告げて、後髪引かれながら、汽車に乗る。一方迎へに來た人達は、汽車の停車するを、今や遅しと待つて居る位で、皆嬉しさうな話ををして笑つてゐる。汽車が停車すると、何だか物さびしくもあり、又嬉しくもある。初めて旅立つ人で、親を離れるならば、あの停車の時や、出發の時のものすごい汽笛は、さぞ、物寂しく耳に響くだらうが、親許へでも歸つてくる人の耳にはあの汽笛は、さぞ嬉しく、快く、耳に聞ゆるだらう。

### 涼み臺

第三學年 藤本實

赤い夕陽の名残が、西の空からだん／＼薄らいで來て、空には瞬く様な星が、二つ三つきらめいてゐる。雨上りの水溜に、美しく夕月が映つて來た。浴後糊硬い浴衣を着て、家の前の涼み臺に出た。四五の人々は團扇片手に、樂しさうな話をしである。隣のお爺さんは、長い頭髪をひねりながら、誰々のお屋敷は何處、御米藏は何處と、昔の話をして居られる。先日滿洲から歸へられた某氏の、あの廣い／＼高梁の野や、恐ろしい馬賊などの話には、大人も、小人も皆耳を傾けさせた。話はそれからそれへと、なか／＼盡きない。子供の

唱歌の聲が、どぎれ／＼に聞ゆる。梧桐の大きな葉陰から見ると、天の川か餘程はつきりして來た。やがて天の川も斜になつて、夜もふけて來た。脳な涼み臺も、靜になつて來た。

### 赤間宮

第三學年 三嶋將

### 七夕

第三學年 潟川治

焼けつく様に照る太陽が、地平線下に没すると何處からともなく、涼しい風がさらさらと吹いて來て、晝間の疲れも一時に忘れさす。かうした涼しい夏の夜、僕は一友と橋本橋上に涼を趁うた、

八月七日の夜は、到る所、七夕祭が行はれる。年一度の此夜、彼の牽牛織女の夫婦星が、鵠の橋を渡つて、互に會ふのだと云ふ。橋下には紅提灯をつけた小舟が、音も無く静かに辺つて行く。斜に立てた笹にとりつけられた岐阜提灯には、晝を欺く萬燈の火を点して、宛然火の墜道の如く、仕掛け花火の壯觀も、斯くやと思はせる中に、胡蝶の如く色紙短冊が翻へり、電車式自動車は往來の人波を押し分けて快走する。走馬燈の如き飽かぬ眺は只だ惚然として晝の暑さを忘れしめ、極樂の夢を見るやうであつた。

### 一對一の大接戦

第三學年 田邊世民

山陽野球界の雙壁である彼の廣陵中學と、柳井中學とは、ゆくりなくも准優勝戦に顔を會はせることとなりました。満洲遠征に依つて自信を持つてゐる廣陵が、勝を制しますか、意氣激渾とした新進の柳井中學が、此強敵を倒しますか。病氣後である柳中投手清水君、勇名を馳せたる廣中投手

人死んだ事を聞き、終に恐れて其の橋を神にまつたさうです。今でも其の清らかな川は、珊瑚と流れ、永久に其の秘密を守つて、人には語らないのであります。

### 男らしき人

第三學年 村木八郎

世には事業に失敗したからと云つて、くよくよ思つて居て、他の何にも手のつかぬ人と、失敗すれば、その失敗を教訓として、更に第二の事業に着手して、飽くまで之を爲してげようとする人などがある。前者は意志の薄弱なる者で、後者は意志の堅固なる者である。七轉八起と言つて、わざかの失敗などはごんごんはねかへして行つて、最初の目的に辿りつく者こそ、最後の勝利者である。昔ある分限者が、商賣に失敗して、遂に無一物となつた。しかし彼は落膽せず、早速商賣變へをして、八百屋となり、今迄の友人達の宅へ、頭を下げる、商に行つた。友人達は之を氣の毒に思ひ、競つて買つてやつたので、彼は昔の様な大金

田岡君、果して強打猛打を封しますか、其の實力伯仲の間にあるらしいのであります。兩チーム、元氣に溢れ、手に汗を握る、群集の視線は集まる。この一戦こそ、實に天下分目の戦と云はねばならなかつたでせう。かくて午前拾時、戦の幕は切つて落されました。ごつと起る喊の聲、活躍を継ける兩チーム、遂に二對一の大接戦で、勝利の榮冠は、柳井中學に授與されました。

### 殺生塚

第三學年 原田正人

私の家を去る七八町の所に、中村と云ふ所があります。其處には今でも高さ三尺、幅一尺位の立石が、路傍に悄然として立つてゐます。傍を流れる小川や、後にこんもりとしてゐる森も、なんどなくす氣味悪い感がします。其の立石は、昔は傍の小川に架つてゐた石橋だつたさうです。すると其の橋を通る人は、必ず死ぬるか、又は重い病氣にかかると云ふ噂が擴りました。初めはそんな噂には氣もかけなかつた村人達も、一人死に、二人死にとなつた。こんな意志の堅い淡白な人こそ、眞に男らしき人と云ふべきである。

### 涼み臺

第三學年 山本宗一

暑い。汗がにじみ出る。風呂から出て、手拭を竿に掛け、座敷へ行つた。まだ暑い。庭に出た。西の空にはまだ夕榮が残つてゐる。團扇を取りに行つて來ると、もはや、夕榮は薄らいで、上空には一番星がまたゝいてゐた、二番星、三番星などだんだん見えてくる。青い空に黒味がさし、次第々々に暗くなり、黄金の砂粒を蒔き散らしたやうになつた。座敷の電燈の光は、暗い庭に投げ出された。蚊を追ふ團扇の音が聞える。「アツ、流れ星が、流れ星が」と叫ぶ間に、北方の空へと消えて行つた。妹達は「暗い御空の流れ星……」と唱歌を歌ひ始めた。大小無數の星は、紺碧の大空に浮き出され、いかにも平和な心地がする、心の底まで涼くなつた。

## 兄弟瀧

第三學年 岩武照彦

我が家より西二町、大井川に注ぐ一支部に、兄弟瀧と稱する瀧あり。高さ約三丈、水量はさまで多からぬど、瀑下岩石多く、飛沫雪と飛び、花と散る。上に一小徑あり。我が部落より隣村仁保谷部落に通づる要路となす。或る梅雨の頃なりき。此處を通りて仁保谷に赴かんとする二人の兄弟あり。先なるは弟、後なるは兄、將に相伴ひて瀧上を過ぎんとす。弟如何なるはづみにや、足踏み辻らし、堂と水中に倒る。兄急ぎ救はんとせしも、既に遅し。あつと云ふ間もなく、水量増したる濁流に押流され、其儘瀧壺に落つ。兄、弟の行方や如何ならんと、峨々たる岩上に匍ひ上り、藤蔓握りて瀧壺を覗かんとする一刈那、忽ち足踏み外しはれ弟の後を追ひて、瀧に落ちぬ。爾來星霜幾百年、瀧の音は永久に變らず、兄の握りし藤蔓、徒に繁茂するを見る。里人名づけて兄弟瀧といふ。

## 寝られぬ夜

第三學年 小田博

ふと目がさめた、戸外は雨が降つてゐるらしく、ボト／＼と雨垂らしい音が聞れる。電燈の光も薄氣味が悪い。目をつぶつた。紫色の様な渦巻が、あちらにもこちらにもくる／＼廻つて居る様な気がする。氣味が悪いから又目を開けた。あゝむさくるしい。隣に寝て居られるお父さんの鼾が、さも、快ささうに聞れる。おゝうらやましい。早く眠りたい、どうして今夜は眠れないのだらう。隣室の障子がガタツと異様な音がした。何だか氣持が悪い。どうかして早く眠りにつかうと、あせればあせる程、頭の中に色々の事が考へられて眠れない。背中は汗でビッショリだ。外は未だ雨なし、雨垂のボト／＼落ちるらしい音が聞れる。時計は二時をうつた。

## 祖先の墓に詣でて

第三學年 田中敏亮

間、或靈感に打たれたやうだ。邊りはしんとして物靜かだ。そちこちに稱名の聲がする。線香の煙も盛んなものだ。然しそは益だけだ。夜は燈籠に火を點じ、精靈を迎へてゐる。新盆とかいつて、佛前を賑やかに飾る家がある。紋付羽織に袴を着けて、焼香に歩く者もある。前の川に出て見ると、日頃の河童連中は、一人も居ない。麥藁で作つた精靈船が川の彼方此方に浮んでゐる。子供がそれを取つて、家へ持つて歸る。益は淋しいものである。

## お鶴ヶ島

第三學年 田中茂一

先祖代々の墓所は、我家から三四町も離れた小高い丘の上にある。前は廣々とした日本海の大波小波の音を聞き、後にはかなり高い山が、長く續いて聳に立てる。夏休の嬉しさをたゞへて歸つた間もない頃、六歳になる弟と一緒に、或日の夕方、御墓參りをした。下駄をはいて登つて行けば、かなり骨の折れる坂路で、小石も澤山にころがつてゐる。墓所に着いて見れば、夕陽は真紅に西海上に没まんとして、金箭を放つてゐる。金の鳶の住家とも思はれる程に美しい。手と手を合せて拜む頃には、上の木立の中で、蜩の聲も一しきり、カナ／＼＼＼と聞かれて、なんとなく奥のかしい感もあり／＼＼＼とうかんで來た。

## 孟蘭盆

第三學年 三好謙介

八月十三日の事だ。墓へ行つて、掃除せよとの命令が、母より降つた。鍬と桶とを肩に擔いで、墓地に急いだ。来て見れば、墓前はコスモスや、菖蒲が叢生してゐる。鍬で除草して拜んだ。その瞬

何時の頃か判然せぬが、我が村に平野といふものがまだなかつた頃の事である。岡の上に働いて居た農夫等は、仕事の合間々々には、鍬を杖に歎息をもらしながら「あの入江が田地になつて呉れたらなあ」と、眼下に漫々たる水を湛へた入江を眺めた。斯くして幾代を重ねた後、今荒れ果てた長者ヶ岡の長者の祖先の代になつて、ふと神の御

告で、丙午の年に生れた女を、入江の鮫島に生埋にしたら、入江は平野になるといふことがわかつた。然し當り年の女としては、村の孝行娘お鶴の外には居なかつた。長者からの申込があつた其の日、お鶴は笑つて生埋にされた。此の事があつた數日の後、お鶴の母は墓の側に死んでゐた。傳へ聞く村人は涙に咽んで、島の名もお鶴ヶ島と呼んだ。お鶴ヶ島も今は變り果てた平野の中央に、饅頭山となつてゐるが、頂上に眠るお鶴の靈は、四方を眺めてどんなに喜んでゐる事だらう。

### 御局原

第三學年 五島直人

緑衣に蔽はれた山腹を縫うて行くと、小松の茂つてゐる所に、大きい石を、幾つも積み重ねた、小さな石山がある。幾百年の昔か、この所に御局が死んだとやらのこと。長い旅路の放浪に。山越に、野越に、何處を端ともなく、過ぎにし年の榮華を夢みつつ、今は寂しく日を送る人となつたのである。美しかつた衣裳も、見る影もなく破れ果

て、顔は瘦せて髪亂れ、足は血みどろになつて、食ふ物なく、飲む物なく、遂に此處に餓死したのであらう。何時の時代か判らぬ。又春であつたか、秋であつたか、それも知れぬ。どんな素性の人やら、もとより判らぬ。二三年前此の山の松も總べて伐られて、唯一の御局の素性を知つてゐた松もなくなり、地名にのみ御局原の三字を残してゐる。

### 勞働

第四學年 吉田 豊

勞働とは生産を營む人の労を云ふなり。故に人の労にても、生活の爲に非ざれば勞働と云ふべからず。娛樂的に山川を跋涉するも労働にあらず。吾人が日常の體操學校教練は労働にあらず。牛馬を使役して耕作に從事する農夫の労は、之を労働といふべきなり、我々は此に労働を二要素に分解するを得。労働力労働心是れなり。労働力とは人が労働をなし得る體力智力にして、勞働心とは、労働せんとする意志を云ふなり。

個人や國民の労働力労働心に大小強弱の別あるは、之れ人によりて労働の程度に著しき差ある所になり、而して労働力に、大小の別を生ずる所以のものは、老若男女の別、体格の優劣、智識經驗の多少、未來心の大小、政治の善惡、労働の尊卑報酬の如何に依るなり。

抑労働問題は生活問題にして人生問題なり。何となれば、生活困難なればとて絶ゆず労働心を刺戟して、労働力を消費せば、如何に強健なる者にても、永續すること不可にて、心身共に衰へ、遂に労働に堪へざるに至るべし。然らば労働の能率は如何にせば上るか。そは労働力労働心を强大ならしめ、文明の利器を廣く用ひ、一致協力して分業に從事せしむれば可なり。

### 時 の 價 値

第四學年 板垣禮作

古人謂ふ。「時は金なり」と、之れは、時は大切であつて、安に費してはならないと云ふ譬である。成程眞に名諺にはちがひない。所が、果して今日

### 海國民の責任

第四學年 竹内秀雄

おゝ見渡す限りの大海上。紺碧色の大海上。聞け、大地の底から、こみ上げて來る波の轟を。正

に是れ、我々青年の雄々しい正義の叫びの出現だ。この怒濤逆卷く大洋もて、四方を圍まれたる、我が國が、如何に海によつて、恵まれて居るかを考へて見よ。海あるが故に、氣候は暖く涼しいではないか。海あるが故に、魚類の如き、天產物が豊富ではないか。

然し、四面海なるが爲に、大陸國とは、異つた設備を、必要とする。即ち、國防上より云つても、交通上より云つても、又戰鬪上より云つても、皆それである。

故に我々の如く、海國民として、この尊き皇國に、生れたからには、大なる責任がなくてはならない。我々が、其の責任を全くすることによつて我が國をして、世界に霸を唱へしむることが出来るのである。

されば、その責任とは、抑も、何を云ふのであらうか。責任にも、色々あらうが、先この廣々とした海を、うまく利用し、國家の發展を計るのが第一であらう、否、それが總てであるかも知れない。

「時は金なり」とは、今更余が繰り返す迄もなく、あまりにも言ひ古された言葉である。けれども、いくら味つても、味ひ盡せない眞理が、含まれてゐる言葉である。否、「時」は雷金のみではない。「時」は實に此の空間と共に、金であり、光であり、熱であり、而して其の實在の凡てを生んでくれたものである。其の尊さ、其の偉大さは、我々が知れる範圍に於ける何ものを以つしても、比する事の出來ないものである。

而も其の「時」は又あらゆるものに最も大きな自由さと、最も廣い平等さとを以つて、それ程に尊いそして夫程に偉大なものを、惜しげなく次から次へと與へてゐるのである。勿論我々も其の自由と平等とに祝福された金と光と、そして其の凡ての父母である、「時」を惠まれてゐるのである。殊に今我々に與へられてゐる「時」は、我々が青年である事に依つて、どんなにかより尊く、どんなにかより偉大に、價値附けられてゐるものなんだらう。恐らく夫は我々の一生を通じて、最高な最大な尊いものであらねばならぬかも知れぬ。

## 時 の 價 值

第四學年 赤木弘

然し、「光陰矢の如し」、「歲月人を待たず」であるから、我々が青年であるが故により偉大な「時」を無爲に空費する時は、此の尊偉な時も、却つて無い方が寧ろ好い様な至つてつまらないものと變つてしまふであらう。愚も甚しいと云はねばならぬ。宜しく奮起一番、この「時」を我々の努力によつて益々尊く偉大なるものたらしむる様、勉め勵むべきである。

## 魚 鈎

第四學年 永留博

八月の何日であつたか、大水の出た翌日、僕は弟と共に大川に魚釣に行つた。正午に近い大陽は、遠慮無くかんくと頭上を照らしつけ、焼け附くばかりの暑さである。其の上風といつたら少しも吹かない。何時の間にか體中汗で濡めつぼくなつた。裏手の山では蟬が思ひくに鳴いて、一段暑い様な感じがする。僕等は草の上に腰を下して、釣竿の先を見てゐる、やがて弟が「はせ」を釣つた。僕も今に見てゐる大きなのを釣つて見せるぞと、

心に期待しながら望を以て一心に竿の先を見つめてゐる。其の時竿の先が流の方向にびくびくと曲る。續いてぐいと糸が張る。僕は何時しか立ち上つてゐた。暫く魚と張り合つてゐたが魚の力盡きたと見上つて來た。何んでも「ちぬ」にしては餘り細長すぎるがと思つて善く見れば「せいご」の八寸あまりのものだ。大きな奴を釣つたなど、弟の聲があちらの草の中から聞れる。その答は元氣旺盛。直ちに総を折つて水の中につけた。魚に取つて最も大切な所を破られても、まだ最後の勇氣を振つて泳いでゐる。其の様子は如何にも勇ましい。此の日は水の出でたためか、「ちぬ」二年もの十匹「はせ」一匹「せいご」一匹今までに無い大漁だつたので、午後三時頃家に歸つた。一同皆喜んでくれた。晚餐の時刺身にせいご、汁の實にちぬ。立派な役に立つた。

### 新聞紙

第四學年 和田 賢

新聞は、大は世界の大勢より、小は一町一村の

新聞紙は、讀者を離れてはない。若し世間に下品な新聞があるとせば、一面から見れば、讀者の品性の低い事を表す。之を思ふと讀者は、單に讀むだけでなく、同時に、自ら新聞紙の土臺を築いて行くと云ふべきものである。

### 海國民の責任

第四學年 山根友信

我國は四面海に圍まれ、世界交通の要地に立て居る。曾ては、日清日露の大戰が有つて、大勝利を得た。爾來、東方第一の文明國となり、各國の船舶が盛に出入するに至つた。

近時、交通の發達に伴ひ、我が軍備も完全に、世界五大強國の一に數へられる様になつた。誠に我國の進歩は驚くべきである。然れども、諸外國は此處に至つて、此の急速な進歩を恐れ、軍備縮少とか、或は、移民排斥とか、色々と我國の向上發展を妨げる様な手段を設けた。實に、我々國民にそつて一大打撃であり、且悲憤せざるを得ないのである。この時に當り、我等海國民の責任は、

細事に至るまで、自然人事あらゆる方面の事件を報道するばかりでなく、其れに關する評論や、寫眞を掲げて、讀者に知識と興味とを與へる。

新聞は、如何にして、吾人の手に達するだらうか。之を發行する新聞社に依つて、多少の相違は有れど、一般に、總務局、編輯、營業の二局と印刷部とが有る。各局はそれぞれ小部に分れ、各部に掛の記者或は技術家が居る。此の外、國內各地は勿論世界各國主要の地には、特派員又は通信員が居る。編輯部に集まつた材料は、整理されて、印刷部が印刷する。普通印刷機は輪轉機を用ひ、用紙は卷取紙を用ひる。輪轉機はよく一分間に、四百五拾枚を印刷する云ふ。印刷の出來上つた新聞は、直ちに販賣部から、遠近の地へ發送せられる。

新聞紙の報道は、極めて機敏なるもので、前夜の出來事も翌朝掲げ、歐米の出來事も一兩日の中には、報するなり。故に新聞紙は時間の節約の爲、時としては、間違がないでもない。此れは記者或許は技術家の不注意から起るものだ。

實に、大なるものである。即ち、一般國民に、平素より國防と云ふ觀念を養成する事が必要である。それには先づ、勤儉でなければならぬ。大いに勤め、大いに節して、國財を豊富ならしめ以て、國防機關を供給すべきである。

第二には、軍事思想を養成する事である。現に我々學生の實施せる學校教練なるものは、其の適切な一手段である。

以上の事が有つてこそ、不十分ながらも、一先づ安心が出来るのである。一旦緩急ある場合、我等は平素からの心懸を以て、大いに努力し、前にも劣らぬ戦捷を收める様に心掛けねばならぬ。思ひ立つた日に始めず、他日之に從事すれば、興味

### 時の價值

第四學年 池上武夫

「思ひ立つた日が吉日」とは、時の價值を重んじさせ、成功の秘訣を教へた名言である。思ひ立つて直ぐ其の事に取りかゝつたならば、興味が湧き、勞れを忘れて事業の進行は瞬く間である。若し思ひ立つた日に始めず、他日之に從事すれば、興味

は起らず、非常な苦痛と困難とを感じ、従つて其の事業が進行したとしても、前例とは比べものにならぬ。

鐵は熱しられた内に打つべく、又草は太陽の輝やいてゐる間に乾かすべく、總て物事は時を失つてはならぬ。

昔より君子、豪傑と言はれた人は、皆寸陰を惜しみ、時の價值を自覺してゐる。

時を惜しむと云ふ事はだゞ事業にばかりでなく、學德を修養し、品性を高尚にすることもそれである。毎日一時間の時を無益に費さず、又苟且に過さず、一意勉強したならば數年後に其の得る所は大なるものになるであらう。

凡そ光陰を大切にするのは、勤勉の習慣を生じ、責任を盡し、義務を重んずる所以であつて、立身出世の道を會得し、時の價值を悟つた最も賢明な處世の道である。

運は天にあらずして

第五學年 片桐恒夫

努力にあり

を、運が善いとか、強いとか解して居るが、これは誤つて居る。

棚に牡丹餅が上げて有り、其の牡丹餅を、鼠の奴等が食はんとして、過つて下に落し、そして、偶其の落ちた所に寢太郎が寝て居たとしても、寢太郎が口を開いて居なければ、口の中に入る筈がない。

即ち誰れかしら棚に牡丹餅と云ふ運命の神様を上げて置いたと云ふ原因と、寢太郎が口を開いて居たと云ふ努力とが相俟つて、「棚から牡丹餅」の眞意義をなすのである。

又「あの人は甘い事をした。やつぱり運が善かつたからなあ」と云ふ者が居るが、其の褒められる人になつて見れば、其の成功は、世人の云ふ様なものではないのである。皆奮闘努力した結果其の幸運を贏ち得たのである。

されば我々も大いに奮闘努力して、「人事を盡して天命を待つ」を叫ばう。

### 通信機關と文明

第五學年 安 部 實

「人事を盡して天命を待つ」と佐久間艇長は叫んだ。そのやうに、人は努力して始めて、天命を待たなければならない。

運は必ずしも常に、目の前に存在するわけのものでは無い。

運命の神は、前頭に僅かに毛髮が有ると云はれて居る。努力しつつ、運命の神が來たなど感じた時、くるりと後向をして、すばやく其の僅かばかりの頭髮を握らねばならない。斯の様に運命の神が逃げない様に、自分の手に入れる迄、後を向いたり、すばやく毛髮を攫んだりして、努力しなければならない。

「貧乏暇無し」と云ふが、結局彼等は、其の運命の神の行き過ぎた段になつて、はつと氣が附き、到底握る事が出來無い毛髮を握らうと、努力する。だから彼等は常に貧乏をしなければならないのである。それよりも、努力しつつ、又後から來るであらう所の運命の神を待ち構へ、來た時にすばやく、前の髪を攫む方が得策だ。

「棚から牡丹餅」と云ふ事を、大概の人々はこれ

通信の歴史を辿つて見ると、中々興味あるものである。飛脚時代には、郵書は幾日かの宿を重ねて後、受信人の眼前に、己の顔を現はしたものであるが、之を現今通信機關に較ぶれば、世の中の變遷の如何に激しきかを示して居るではないか。明治維新以來、郵便あり、電信あり、電話ありて、通信機關の進歩は實に著しきものである。通信に依つて、世界の文明の状況は、吾々の眼前に展開せられ、それに依りて、又、吾々の文明の程度も高まつて行く。

マルコニーの無線電信の發明は、世界の事情を速に傳達し、通信界の覇を握るに至つた。

無線電信が、文字のみに止まらず、寫真をも傳ふるまでに進歩せしは、通信機關の著しき發達にして、又、一方には、文明の向上を如實に物語つてゐるものである。

之に由つて之を觀れば、通信機關の發達は文明

の發達を促進するものであるといふ事が出来る。

### 報恩の念

第五學年 橫山剛熊

鳥の林に住み、魚の水に泳ぐが如く、人は恩の中に生く。詳言すれば、人の世に處するは、單に自己の力にのみ依るにあらずして、君父師衆生等より受くる諸種の恩に依りて、生を維持することを得るものなり。

諺に「犬は三日飼へば三年其の恩を忘れず」と云ひ、「鳥に反哺の孝あり」と云へり。禽獸すら且然り。况んや萬物の靈長たるものに於てをや。人にして報恩の心なきものは、鳥獸にだも劣る者と云ふべきなり。

されば受けたる恩は、必ず何等かの手段によりて、之に報いざるべからず。忘恩は人の行爲の中に於て最も嫌惡すべき惡徳なり。世に忠と云ひ、孝と云ふ。是皆君父の恩に報ゆる行爲に名づけたる者にあらずや。故に、報恩の精神の燃ゆる所には必ず嘆賞すべき人情美の現るゝを見る。今茲に

舉ぐるまでもなく、古今其の例に乏しからず。嗚呼、吾人は吾人の依りて以て生を營むことを得る幾多の恩に對し、朝夕感謝の念を捧ぐるごとに、機に臨み折に觸れ、出來得る限りの努力を盡して、報効の實を擧ぐべきなり。

### 時の價值

第五學年 久保一郎

時は金なり。と西洋の古人は賢明にも云つて居る。實際時は貴重なものである。人生は纔に五十年、而して青年は其の十二三年間のみである。其の十二三年間の短日月に、我々は世に處して行くに必要な知識を得、又其の基礎を築かねばならない。然るに其の半分は寝て暮してしまう。眞に我々が學ぶのは、正味六七年に過ぎないのである。この短日月の間に、我々人間の價值は定まつてしまふ。即ち時を惜んで利用して行くものは勝利者となり、惜まずに浪費するものは哀れな敗北者となるのである。

塵も積れば山となる。一つの雨滴でさへ末

は大河を成して居る。時も同じである。時計のセカンドを刻む間に、一年經ち二年經ちして、終に青年も了つてしまうのである。だからこの一秒間が我々の價值をきめてしまうのである。一秒間と云つては我々に對して何の惜しい感じをも起させない。併し其の時の斷片が人生の價值をきめてしまふとすれば、我々は忽せにして置く事は出来ないではないか。まして一日、一月、一年に於てをやである。

過ぎた時は再び歸つて來ない。だから我々は一秒一秒の刹那を惜まねばならない。

「時程貴重なものはなく、時程貴重がられないものはない」と言はれて居るが、全く其の通りで、人は兎角時を輕蔑して居る。時の價值に目覺めないために。

我々は時の價值を知らなければならぬ。そして人生を向上させなければならぬ。

### 成功ご失敗

第五學年 河野三朗

失敗は成功の基と言ふ言葉あり。世に完全無缺なる人は蓋しあるまじ。されば吾人の爲すことは失敗なしと言ふこと能はず。かの赫々たる事功を成し、世人の羨望の中心となりし人も、其の裏面に於ては、人知れず幾多の辛苦艱難を味ひ、多くの失敗を繰り返しし結果なり。之に反して事業に成功すること能はざりし人々の多くは、他に種々の原因もあるべしと雖も、概して些細の失敗を餘りに悲觀して、自暴自棄となり、失敗に依りて得たる貴重なる經驗を、將來成功の基と爲さざればなり。

佛國のベルナールバリツシーは、陶器に必要な釉薬を發見し、天下に芳名を誦はれし人なるが、彼が成功するまでには、實に慘澹たる辛苦を嘗めたりき。彼は失敗に失敗を重ね、家財を蕩盡し妻子には見棄てられ、人には狂人と罵られしも、猶ほ成功を志して已らず、從來の失敗より得し経験を教訓とし、苦心に苦心を重ねて、遂に成功せり。古今東西に於て、此例少なからず。一心凝れば石に矢の立つ例もあれば、失敗に征服せられ

す、失敗を征服して自己の最善を盡し、以て目的に向はば、光榮ある成功の彼岸に達し得べし。之に依りて之を觀れば、實に失敗は成功の基なるかな。

### 運動により得る修養

第五學年 村木七郎

人間活動の素は身體の健康にあるのである。健康の上に缺陷があつては、社會の一員として仕事をして行く事は出來ぬ。古來運動に熱中して雄飛した人は、何れも體力が強壯であつた。國民の體力が強い時は、國家も強く、國民の體力が低下するにつれて、國運も傾いてくるのである。一國の繁榮が國民の健康にあるが如く、一家の平和は家族の強健によるのである。是の意味より一會社、一商店の繁榮は、ペンを執り帳簿をくる健康の所有者たる社員、店員の激動たる活動に俟たねばならない。是等の人々に運動を奨励すると言ふ事は彼等の健康を増進して、其の人格を向上せしむる結果を生むのである。それと同時に彼等の爲す仕

事の能率が向上するのである。純然たる體育運動に於ては、各國人に必要な體力氣力を發達させ、又身體の順當なる發達を促進し、以て最大限の健康抵抗力を得しむるのである。その上艱れて尙已まさるの氣概を發揮して、以て一層鞏固不拔の魂を鍛へ得るのである。

運動を怠る人は、身體の具合が悪くなり元氣がなくなる結果、愉快に仕事をする事が出来ない。之に反して良く運動をする人は、身體も非常に健康になり、精神も共に生き生きとして来る結果、愉快に事業に從事する事が出来る。愉快に事業に從事する事と否とでは、能率の上に大なる相違がある。此の故に現今都鄙を通じて運動熱勃興し、老若男女を問はず、運動競技に趣味を有する様になつたのは、我等の最も喜ぶ所である。しかも猶ほ人々の中には、運動競技に對して無理解な者があるのは、甚だ遺憾な事であつて、どうかして斯の如き人々に、運動の價値を知らせて、益能率を増進し、同時に體格を強壯にさせたいものである。尙ほ精神的體育競技は、唯選手のみが以上の修養

### 人生と奮闘

第五學年 柴田哲夫

予は人生と奮闘といふことを學生の本分たる勉學に就いて説明しよう。貧困な家に生れた人でも、その人の奮闘次第で一代に巨萬の財産を蓄積した人も有る如く、假令凡才に生れても、その人の工夫と努力とで天才を凌駕する程の智徳を修養することが出来ないとは限らない。如何に秀才で有つても高慢心を起さば、彼の童話にある兎と龜との競走の如く、終に歩みののろき者に名を成さしむる結果となるのである。

頭脳が悪いと云つて悲觀すべきものではない。秀才でないことを自覺して、大に自重し大に警戒して、一意專心秀才と對抗して行くべき工夫を凝らして、勉學修養したならば、秀才何ぞ恐るゝに足らんやである。弱者には弱者の兵法あり、凡才には秀才に打勝つ手段がある。大道を通つて勝てなくとも、間道を走つて早く目的地に到達することも敢て不可能ではない。故に云ふ、凡才も工夫の賜である。

と努力を以てすれば、秀才を凌ぐことは出来る。だから人生最後の勝利は奮闘にあるといひ得るのである。

### 眞勇

第五學年 永田 孫太郎  
眞勇とは何ぞや。正義の爲めには、利を顧みず害を避けず、事に當るの意氣。即ち、我校訓として、日夕服膺する義勇是なり。

眞勇は古來最も尊ばれたる徳の一なり。東洋にては智、仁、と共に三達徳と稱せられ、西洋にても、叡知、節制、正義と並びて、四大徳と呼ばる。學生が、學業を勉勵するも、實業家が、事業を經營するも、皆、此の勇氣に因る。

正義と、勇氣とは、相離ること無く、兩者、相俟ちて、始めて、事を爲すものなり。故に、吉田松陰先生も「義因勇行、勇因義長」と云はれた。古來、是の勇氣を發揮せし例、少からず。我國にては、和氣清麻呂の如き、西洋にては、ソクラテスの如き、皆其の人なり。吾人、此の徳を、

持すれば、處世上、如何なる困難に遭遇すとも、恐れず、憶せずして、己の信する所を遂行することを得べし。曾子の「自反而不縮、雖褐寬博、吾不備焉。自反而縮、雖千萬人、吾往矣」と云へるが如き、眞勇の意氣を語り得て、餘蘊なしと謂ふべし。我等は、自己の今日の立場より、大に、眞勇の養成に努力せざるべきからざる必要を感じり。是れ、我等が、行爲の根本をなすものなればなり。

### 運は天にあらずして 努力にあり

第五學年 吉村 貞治

「天は自ら助るもの助く」。生に目覺めた若人よ、よくこの眞理を味へよ。運命は天にあらずして努力にあるのである。將來に對して煩悶せよ。煩悶は汝を大成する一の階梯である。煩悶の極、積極的に光明の途を辿るべく、奮闘努力を續けると、其處に自ら運は存在する。色々な天災地變が襲つて、一夜の中に我等を不幸のどん底に突き落すこ

とがある。見よ運命の激變が、昨日までの榮華を槿花一朝の夢と化せしめて、その歸らぬ追憶に無益の涙を絞らすことの少くないことを。斯る時の運命を罵り、徒に悲觀するも、結局得る所のものは何ぞ。永遠に生きんとするものは、運を頼まずして全力を理想に集注して努力すべきである。「艱難汝を玉にす」艱難それ自體は何處までも破壊的である。只その艱難に打ち勝ち得る丈の奮闘努力をする者の處にのみ、運は生じて其の者は光明の世界へ入り來ることが出来る。運を天に頼むものは、努力に依りて其の好機會を捕捉する能はざる故、不運である。故に運は天にあらずして努力にあると云ひ得る。前途遼遠なる青年よ。大に此に注意して奮闘努力しようではないか。

□□□□□□□□□□

奉迎 鶴駕謹賦  
學半 河野通毅

扶舞郊迎野老情  
至誠感應積陰晴  
城山獻壽爲歌頌  
北海湛喜擬鳳鳴  
忠烈遺蹟遭鶴駕  
珍奇草木觸聰明  
微臣亦幸蒙親閱  
長語子孫傳此榮

□□□□□□□□□□

great that it was called "An Invincible Empire".

When we think of this, we need not be sorry when we have only a small area and population. Whatever we may undertake, if all of us are united, we can accomplish it easily. Sons of Yamato, push forward, push forward with a firm resolution.

### THE SUN

Toshio Akagi, 4:B

Every day I work at my lessons in one of the two-storied room. From there I can command a fine view of Koshigahama and Kikugahama, the one clustered with dwelling houses and the other embellished with a few cottages and a long belt of pine-trees.

At four o'clock in the morning faint glow of light is seen through the window. At five o'clock I get up and go to the beach in front of my house. In the eastern sky the brilliant morning sun rises above the hills in the hasty distance.

The instant I expose my breast to the sun, my mind opens its eyes, and I am completely cured of fatigue, idleness, anger, and other various vulgar ideas. The sun is, as it were, an efficacious remedy acting best on the mind and also on everything in the universe. For, when deprived of light, plants grow white in their stalks and leaves, and men become pale and unhealthy. Indeed, the sun is the mother who brings up every-thing in nature.

### SHUHO-DO

Reisaku Itagaki, 4:A

When our Prince of Regent took a long trip in the Chugoku districts at the end of May, 1926, he was pleased to pay a visit to the cave called Takiana at Akiyoshi, Nagato, which is noted for its long, large excavation. This cave mostly consists of stalactite. The Prince took so great a fancy to it that by his will its name was changed to

## 英 文 欄

### LESSON FROM THE WORLD-MAP

4:3 GENJI SUZUKI

In my boyhood I was fond of listening to the stories which my father told me. The following is one of them. There are many countries on the earth, but no country has more dignified nationality, more graceful landscapes than our own.

Our Emperor is the son of the Sun, and his august virtue is as omnipresent as the blessed light of Heaven. Who but our Emperor can become the ruler of the world? I was pleased with this story in spite of my youth, and was proud of my country for a long time. After I entered the Hagi Middle School and looked at the world-map, I knew that our country is a small island floating on the eastern sea, and lies near China and Russia, with the United States of America very far off to the east. Each of the above countries is several times as large as Japan with larger population and greater natural resources. And I knew that our country is far inferior to the advanced countries in the world both in the progress of learning and the development of industry, I could not help being filled with sorrow. If our country is so poor, we should not be proud, however dignified our nationality may be. Needless to add here more, but I am looking forward to the day when we shall be able to make Japan's power felt abroad more than ever.

Just look at the world-map, and you will see a small country in the Europe which coped with almost all the world in the great war, and continued it for five long years. This powerful country is no other than Germany, and yet its area is as large as that of Japan, and so is its population. And before the great war Germany was so

Hagi-Mt. Shizuki, Mt. Shizuki-Hagi. These two names go together so closely. The place is symbolized by the mountain so well that it shall remain as symbol of Hagi as long as the town stands, nay, the universe exists!

Now the noble mountain peaks its grand figure against the crimson sky, and I am involuntarily inspired with something of heroic feeling.

In the sky no speck of cloud is to be seen. What are there in the vast blue sky which seems to hold every secret in the universe, I wonder.

Somewhere a cricket chirruups. Oh, autumn has already crept upon us! Time flies like an arrow, indeed! Before I am aware of it, lights are seen quivering on the hill of Tsurue.

### THE GREAT MAN ON MY DESK

By Saburo Miyazaki. 5:C

"Get up! Get up! You will be too late." The voice comes punctually in the morning to awaken me, from on my desk, where stands what I call the great man, Alarm Clock by name.

There are many things we have to learn from him. He is the most industrious in the world. He always puts me to the blush in point of diligence. Probably you can find out nowhere such a hard worker as he. He works all day long, but he has never been heard to complain, while the least industrious people of society are the readiest to do so. He is really a man of character.

It is because he hates to live in idleness and luxury that he is ever found busy from morning till evening, day in day out. Accordingly he is a person of great energy. No matter how hard we may work, we shall not be able to excel him. In view of the fact that we cannot work like him without rest, it is necessary that we should exert ourselves to the utmost at least while at work as punctually as he.

Honesty is another phase of his greatness as well as industry. He ever goes, heart and soul, into his work even when he is entirely left alone,

Shuhodo. I think it came from the Chinese sound for Akiyoshi. So it has not been named without purpose. Since the visit of His Royal Highness, this grotto has won a wide reputation throughout the country.

At the entrance of the cave, the water from the interior runs down into an abyss and the thundering sound of the water is very dreadful to hear. It is called "Ichino-fuchi". All the visitors will be surprised from the outset at the sight. To go into the grotto from here we have to cross a bridge. After walking a little farther, we see "Yoino-myojo". It is a natural skylight and looks as if a star were twinkling up the dark sky. It is said to be a small hole measuring three feet in diameter, which opens outside. It always looks so no matter what the weather may be. Next, there stand six rocks which are suggestive of human faces. They are called "Roku-jizo". When we enter deeper, we come to a stream which must be crossed by boat. After crossing it, deer and deer we walk into the recesses of the cave until a wide panorama spreads out before us. The most attractive sight of the middle part of the cave is a large golden column rising above the clouds. It is what people call "Ogombashira". On the way home, there are many amusing places such as "Koya", "Kasaya", "Chijimizaza", and "Hyakuchoda", etc. At last we reach "Jigoku" which is at the end of this cave. This horrible name originates in its unfathomable depth. A foreigner once recklessly tried to explore it, but it was in vain, I hear. The cave is now illuminated with bright electric light, so even a child can enjoy this unparalleled fine view.

### AN EVENING ON THE BEACH

(From My Diary)

By Goro Nagadomi. 5:A

The sea, in summer, is very calm, still more so in the evening. The crimson surface of it is like that of coloured quick silver. Many islands Hishimas, Oshima, and Aishima-stand out of the sea by themselves. Mishima Island which is enveloped in pale purple atmosphere, is also seen far off.

while not a few people are eye-servants. That is why I call him a great man to be modelled after.

## RADIO

By Toshio Akagi. 5 : B

Radio comes first in the list of all the favourites of the day. Even in the future it will dominate over all others. It has become so popular all over the country that there are few people who do not know what "radio" means. We can see some antennae put up high between two poles even here in Hagi. Much to our regret, however, this place is far distant from any radio broadcasting stations, and we students cannot afford to get a radio set fit for distant reception. Though a grand one has been installed in our school, for some reason or other we have little chance of listening in.

Our country has at present, as you know, only three broadcasting bureaus, in Tokyo, Osaka, and Nagoya, and the Department of Communications is now contemplating a plan for establishing, within the next five years, several additional radio broadcasting stations in great cities, and then we should be able to listen to people and performances at a long distance, almost as plainly and as distinctly as if we were in the same room. Thus radio is going to break down phonograph. The most marked difference between the two is that by the latter we have to wait for mouths after the word has left the lips of the speaker, while the former gives us the very word as soon as it is uttered. It is also the case with music and other enterments.

We may safely say that radio is one of the most adequate equipments for the present world, where the struggle for existence is so keen. It is far beyond our imagination how radio would become an indispensable factor to improve the world. We must not only use it for entertainment but also for the distribution of knowledge.

## 雁のおこづれ

エール大學より

同校 吉田 寛

拜啓

懐しい指月の櫻も散つた頃かと存じます、其後御無沙汰致しましたが先生にはお變りはありませんか、お伺ひ申上げます、今年の八月で在米も二ヶ年になります、萩の花もう四五年も見ぬやうに感じます、がらはない俗物輩が郷愁としやれるのも無理からぬ事と存じます。

昨秋は思出の深い校友會雑誌をいたゞきまして誠に有難うございました、年々に榮に行く母校の有様を我事のやうに誇りに感じます、私共と、萩中學校なる連鎖で結びつけられた幾百の健兒諸兄に私の學びつゝあるエール大學の學生々活の概略でもおしらせしたいと、かねぐ思つてをりましたが、遂に其の暇もなくて殘念に存じます、唯此頃

ひよつと思ひつきましたので、エール大學の日々出来る新聞を一週間分許りお送り致しますから、先生御一讀の上差支がなかつたら、生徒諸兄に見せていただきたいと存じます、同新聞は我々大學院の學生よりは、主として大學の學生を中心としたものであります、運動の事が大部分をしめてゐますが、私のことに面白いと感ずるのは完全な自活制度であります、丁度私のお送りする所には禁酒問題の討票及 honors system (試験場の監督を全然廢止する制度) の委員會決議等がはいつてをります、エール大學は私が去年ゐたブラウン大學等と比し遙に萬事完備し、同時に學生の氣風までアリストクラティックであり又同時に保守的だと思ひます、運動は恐ろしく強い方であります、或人が米國の大學を評して "Athletic institution with intellectual opportunities open to feeblebody" と云つたと云ふ事であります、そんな傾が確にあります。六月中頃から九月末までの夏休みが今からまたれます、略く休み中の計畫もたちました、今年は三月末に、外務省の命によりテキサス、ルイジア

ナ方面に二週間許り經濟状態視察旅行をしましたので、面白かつたかはりに日下多忙を極めてります。御無沙汰のお詫びを兼ねまして、遙に御挨拶を申上げます。

五月一日

岩田校長殿

玉机下

寛拜

敬具

### 東亞同文書院より

同校 井上宗親

崑崙の峯から落ちる長江万里の流が洋々として東海へ注ぐ江南の地、上海の雜踏の共同租界を離れた樂園の佛蘭西租界内塗家灘に、菩提樹に包れて高く聳ゆる赤色の學舍こそ我東亞同文書院であります。從來萩中とはあまり縁が無かつたので、書院の成立ち及之を經營してゐる東亞同文會なるものゝ歴史等、御存じの方は少からうと思ひますから、逐一述べると良いけれど長くなりますが、省きます。

故もありませうが相當に六ヶ敷い様に思ひました單語の六ヶ敷のは出ませんでした。何處の試験でも此の様な傾向がある様に思ひますが如何でせうか。日常の容易な單語を注意せられて居られる事を御願ひします。其から支那各地の有名な地名是非覺ゆて居て下さい。

漢文は今年は全部三四五年の本から出ました。

國語は古文と支那に關聯した熟語とでした。漢文は支那人に依つて書かれたものは特に注意して下さい。兎に角教科書と英國漢文の解釋位をざつと見ておかれたら大丈夫と思はれます。

滿鐵派遣生の選抜試験方法は一寸變つて居て試験官が文章を讀むのを聞いて居て之を二時間位に成る丈其に近く書くのだそうです。受験資格は全級生徒の十分の一以内に居る者だそうです。書院の學費は月々五十五圓で山口縣派遣生は四十圓づゝ支給され滿鐵派遣生は六十圓づゝ支給されます。縣費生の義務年限は三年で満鐵のは八年です。滿鐵派遣生選抜試験地は東京名古屋京都大阪廣島大連等で、私費生のは東京京都です。書院では制服

書院にはすつと以前には商務科の外に政治科工學科等ありましたが、只今は商務科のみです。三十餘國の人民の入混んで居る世界の縮圖と云はれる上海に、書院は在るゝ云ふ事が、實に、大に意義ある事であつて、教場での講義を聞く丈でなく此の地を除いて得る事の絶対に出來ない國際氣分を養ひ、支那研究、上海研究等をする事が書院に於ては非常に重く見られて居ります。從つて語学は非常に大切な支那語（北方官話）、英語には大に努力して居ります。書院學生は次の三通りです、即ち縣費生、滿鐵派遣生、私費生です。縣費生の選拔試験様式は各縣にて勿論異ひますが、本縣に於ては毎年一月頃縣廳で行ひます、採用人員は二名で之に日露協會學校へ派遣される者一名、都合三名で今年は五十名志願者が居ました。縣費生選拔試験問題に付き數學は今年は三角は出す、立、平幾何と代數とのみでした。全部で五問でしたのが教科書位やつて居れば充分でせう。而し之が大勢を決する様です。

英語は英文和譯、和文英譯丈でしたが私の苦手の

其他一切學習上必要品は全部支給し月々四弗手當を吳れます。就職狀態は非常に良く殆んど全部が支那各地に於いて獨立事業をして居り、或は公使館、領事館、會社、銀行、商店等又學校等にあらゆる方面に活動して居ます。日本學生、中華學生（中華學生部一年豫科を経て来る）共皆寮に入る事になつて居ます。御承知の様に上海は非常の不健康地で（山口縣人十三人中一人は國へ保養して居り二人は入院して居る）加ふるに寮生活で運不足且つ内地の學校の如く教練体操もなく又料理は油こい支那料理の事とて四年間には斃れる者が少くありません。又上海は魔の都、淺草の比ではない。四年間の異國の學舍での生活に堪へ尙將來も大に此の支那に在つて活動せんとするもの、身體が強健で意志の堅固な方である事は必要と言はざるを得ないです。

熱と赤い血潮を持つ元氣な母校の諸君が、東亞の一角に閣立し、東亞を舞台として靖亞の大理想を持つ、此の東亞同文書院を御理解になり、此の倦怠し切つた支那に來られる事は日本の爲、支那

の爲、東亞の爲如何に嬉しい事でせう、中華學生と共に諸君の一人でも多く來られる事を希望してやみません。萩中からは私一人です、精しい事は手紙で南寮第三の井上へ御問ひになれば喜んで御答へします。

### 神戸高等商船より

同校 村木喜八

秋風吹きそむる頃、燈下親しむべき好季節に臨み、諸兄益々奮闘せらるる事と信じます。此の際聊か我が校の内情につき述べ、抱負ある諸兄の参考にまで資せんと思ひます。前に六甲山の雄姿を仰ぎ、後は蒼渺大灣入を扣い、遙南の彼方に紀伊の諸山を静に眺め、東の彼方に大阪を、西の此方に神戸を扣り、其の中間に位する我が校は眞に地形のよろしきを得たものと云はねばなりません。入試に關して別に變つた事とてなく、教科書を十分にやつて置けば其れで結構間に合ふと思ひます。然し數學は代數が最も主要で三角法、幾何の順序ですが、兎に角總点で行くのですから恐るる

しては小生只一人なる故に、諸兄の來校を望む亦切なるものであります。

### 熊本藥學専門學校より

同校長瀬誠

### 「天龍猛る」

と歌はれた大阿蘇を遠望し、昔を偲ぶ託摩ヶ原の一角、一万五百坪を領して立つ舊館に加へて、延二千餘坪の新館は六千坪の運動場と三千坪の薬草園をひかへて、オリーブ色の雄姿を誇つて居る。これが本校です。而も獨立官立専門學校僅に二校、一つは富山一つは本校、瓦石の中の雙壁とも云ふべく、若人の得意推して知るべきです。

顧れば明治十八年熊本藥學校として建設せられたのが濫觸で、次で四十三年九州藥學専門學校に昇格。進むを知りて退くを知らぬ武士の意氣そのまゝに現校長安香博士は、更に官立移管を志し、東奔西走夢寐にも忘れ得ぬ努力の結果、大正十四年一月の春移管の業全く成つたのです。

諸兄の内我藥學界に雄飛せんと志さるる方があれ

には足りません。体格検査は海兵と同じ程度で施行して居ります。校内には航海及機關の二科を設け、生徒は全部寄宿舎に入れ、これを十二分隊に分ち、分隊がユニットとなつてゐて、柔剣道は勿論盛んであるが、其他各種の運動競技娛樂及圖書新聞の閲覽も頗る自由に許可されて居ります。今日は桜子樹の影に居り、明日はオロラの美をたたね、雨半球の波枕と言ふ如く、熱帶寒帯を活歩し天体相手の仕事をするのですから、頗る時間を嚴守し、寒暖を厭はず行ふ事は厳格にやつて居ります。然し何れにしても大した事はありません。我が校は開校以來日尙淺しと申しましても、校内設備の完全なる点に於ては、恐らく何れの學校にも劣らぬ事を信じます。近來人知開發に伴ひ世人に知られて居る商船校の所謂ストームなるものも今日の我が學校では野蠻な行爲なりとして廢止して居りますから、安心して入學して構ひません。其の上我が校には給費制度を設け、生徒の修業に便利を與へられて居りますから、心ある者は振つて入學せられん事を切望致します。萩地方出身者と

ば、吾人は雙手を擧げて歓迎致します。又入學試験其他に御不審の事があれば出來得る限り御盡力致しますから、學校宛御一報下さい。

最後に諸君の御奮闘と御自重をいのります。

### 高松高商より

同校上田雄次

阿武川のほとりで、秋の陽に恵まれ乍ら、勉學の道にいそしめつゝある、六百の健兒を想つて筆をとります。

私の在學してゐる高松高商は比較的新しく、來年第1回の卒業生を出すのです。學校が新しいと云ふことは、丁度今「生みの苦しみ」をなめつゝあるといふ事を意味します。生みの苦しみにたつ子には、見られない努力と新しい希望とが御座います。その意味で私の學校は、全校擧げて普通の高商に見る様な、墮氣と先輩たよりと云ふものが御座いません。創生時代にある我高商は非常な元氣を以て、眞理探求と新時代的な紳士を造り出すことに熱心であります。

諸君が一度四國の地を踏れるならば、誰もがが感じ得る様に、暖い南の國と云ふ感じを與へます。情緒と思索を生む南の國の學徒は、正義と自由を高唱しつゝ勉學します。遠く海上より玉藻の城を望み、足を栗林の園に入るのは、春秋に富む若い學徒は、奮然として、力を感じて、勉學するのです。眞に瀬戸の風景をほしいまゝにし、古は歴史を秘めた尾島を望み見て、我高松高商生は、勉學し得るのです。自然の配劑を獨占したのが高商です。地の利を得た高松にある我高商は、眞摯な、而して研究心に富める學徒を望んでゐます。私から云ふのも、可笑しい事ですが、全校生徒が、絶えざる勉學をしてゐるといふことです。成績は他の高商生徒の比ではありません。原因は容易にお分りでせう、自然生まれて來る「生みの苦しみ」なるものゝ實です。

寮には百八十人もあります。自治でその名も床しい紫雲寮です。紫雲山下には、日本一なる栗林公園と、生みの悩みにある、我高商があります。學校の商工經濟研究室は、實に早く完備して、東京

商大、神戸高商と肩を並べ得るとまでも、自他共に許してゐます。我校の方針が死せる所謂「物識り」的な勉學は少しもさせないのでから、すべてが、實行的な、昨日教はれば今日は應用され、役に立つといふのです。

四五年の生徒諸君は、燈火親しむべき時、来る春の榮冠を胸に書かれて、精進し準備されつゝあると思ひます。高商志望の方は、我校に來られる事を切望します、眞剣な眞實な人世の歩みをなさる方は、我校に來られる事を奨めます。實に南國的な自由な紳士は我校から生まれる事と思はれます。終りに、校長並びに諸先生の御健康を祈り且つ生徒諸君の御勉強を偏へにお願ひします。尙、學校の事に關しての委細なる事は私まで、御通知下されば、出來得る限りお盡し致します。

### 山口高等學校より

同 校 有 美 邊

山口といふ所はつまらない所だといへばそれまでだが、勉強にはいゝ所です。山口は遊ぶ所がないといつても過言ではないでせう。それだけ研究材料や標本も豊富です。

が。然しこれ以上練習は眞剣です。それで何等勉強に差しつかへは有りません。そして面白い現象は一番二番といふ成績のいゝ人は大抵選手です。考古學研究には都合のいゝ學校です。郷土史研究會といふものがあつて、日本的のもので全國一といつても過言ではないでせう。それだけ研究入試験——落ちつきが何より大切です。平生惰まけてゐる者は仕様がないとして、學校の科目と學校で使用してゐる参考書を熱心にやれば十分です。世の中にはそんなに飛び抜けた天才なんかさう澤山ゐるものでは有りません。私等の級でも皆どん栗の丈くらべです。その證據、首席より末席までの平均點の差は僅々二十點以下です。首席が八十二三點、末席が六十四五點位です。入試験の御参考までに山高先生の採點法といへばいひ過ぎますが、そんなものを一寸書いて見ませう。

英語の先生は四人、字を綺麗に書くことが何よりも、いつかもいつて居られました。「綺麗に書けば二三點は増してやる丈けの氣が起るね」と。意

### 滿洲醫大より

味が解る範圍の直譯が安全です。國漢、あなたがべからず。点は頗るつきのから味

増、作文でいゝ點取る等まあ豫期しない方がいゝです。六十位ですね、大低は

數學、二問不完全よりは一問完全をモットーにして下さい。此の先生の方針御意見は「受験と學生」によく載つてゐます。

暗記物は徹頭徹尾要点をつかまへて暗記するより他は有りません。ついでに歴史の先生の御話を御参考までに。

「今年の二班の歴史の問題の一一番と三番とは私が出題したのだが、歴史ト何でもさうではあるが、要点を確實につかむことが大切だ。一番の如きも聖德太子といふことを思ひ出せば、もうそれで八九分は成功だ。此の問題では即ち聖德太子といふことがつまり要点なのだ」

因に問題は「推古朝の佛教文物について」でした。運動家大いに歓迎！

折角御自愛、御勉學の程祈りつゝ。

純重さがなくとも、天氣、心氣共に晴朗に意氣天を衝くの感がある。六月も過れば、早や夏休み。久方振りに故山の風情を味ふも亦樂しみだ。秋天高く、青く澄み渡る中に、一望千里丈余の高梁踏み分け、大自然の偉大、變轉、風情を味ひ、遠く遊び、或は暖かい陽を浴びて草原に横はり、涯なき空の或は高く、或は丸き、或は母の子を抱けるが如き雲の運行を眺め、深い瞑想に耽けるも亦よい。北風吹き初める頃、零下二十幾度の中に、シヤツ一枚になつて、スケートする壯快さは内地にては到底味へない。鏡の如き氷上にスケート立て一思ひにスツト滑る時の痛快さ!!! 思ふだけでも血沸き、肉踊る様だ。夜は又學びの夜だ。一を教はり、二を想像する時は冬の冬だろう。殊に冬の夜は、心氣冷靜になる。一年中の勉強は此の二三ヶ月の間に、皆出來てしまふ様だ。

これで、滿洲の風致、氣候、我々の生活も御紹介致しました故、一寸入試の注意に類したもの本書いて見ませう。御承知の如く、當校は問題は極く平易で、一見馬鹿げた所がありますが、然し、

同校兼田功

諸君御承知の如く、支那と言ふ所は昔より醫者の非常に地位の高い國であります。從つて滿洲、否、支那に發展せんとする、醫術を権にするのは、得策中の最も得策だと思はれます。然れど、滿洲、否、支那に發展せんとする者は、やはり語學の力がなければ不可能でありませう。其等を加味して建設せられたのが、我が滿洲醫大であります。豫科の間は支那語は、獨語同様に重要視され、將來支那發展の醫者を養成してゐるのであります。過言の様なれども、支那に醫術をもちて發展せんとするには、恐らく我が滿大的學生を除いて、他人に比肩すべき好都合の立場にある學生はありますまい。

春三月下旬、雪解け、氷解け、廣漠たる平原にも陽春は訪れ大地は微笑む頃、新綠芽生ゆる平原を散策すれば、内地のそれと又異なる壯快さがある。一望赤土の平原、内地の春の如く、血を陵る

その馬鹿げた問題に味もあり、實もあり、骨もあり、仲々六ヶ敷く、平易な問題を如何程完全に解決し得るか、骨子で、英語、數學は殊に然り。國漢の如きは問題が多い故に、その主意を確實に譯すことを注意せねばならぬ。物理は、証明問題が多く、化學は、方程式、分子式、計算問題、動植物は、醫學に關係あるもの等に注意するのが肝要である。

尙、卒業後の就職難は更になく、自由なる新天地を開發し得。諸君にして重箱生活をせんとする者は、いざ知らず、人口問題、食糧問題の解決、滿蒙開發、將た又、日支親善を口する者は來れ。前途光明に輝く滿蒙、否、支那の天地こそ吾人發展の地ならずや。

思想も貧弱、文章も不得手なので躊躇してゐましたが、萩中出身者は、私一人なので、且つは、諸兄の當校入學を喚起するためには大膽にも筆をとりました。紙數にも都合あるらしく、勿論思つてゐる事を充分書く事は出來ませんでした。

二一 高 より

同校田村義雄

古の都、京都と言へば、直に山紫水明の語を以つて標幟とするが、苟しくも長州の地に孕まれ特に萩町で學の園にいそしむ輩が先づ山紫水明を口にする様では駄目だ。

の松下村塾に教を受けし若人が、此の京都の地で  
剣戟人馬の間を往来し、幾度か生死の境に出入して以て大偉業を完成せしめ天下に霸を稱するに到つた事を、思ひ来れば山川草木一々として古の思出の種でない物は無いのである。第二の松下村塾たる萩中學校に學を修めし者、京都に上りて、古英雄の跡を偲びつつ第二の英雄たらん事を期して勉學する、又以て痛快ではないか。

我が京都の地は、東には翠綠滴る東山の連山峨々として聳ゆるあり、北には如意が嶽、比叡の聖山と相對し、天を磨して岐立するあり、西は遙に京都盆地の盡くる所、愛宕山の諸峯屏風の如くに立

事に就いても肝要な事である。其れから試験問題中には、陥し罠が、甚だ多い。其の罠に眼を看ける事が第一である。其の罠に眼を着けたら最早十分八九は合格した者と見てもよからう。

幸に諸君御健に御勉勵あつて、神樂が丘に凱歌を挙げられん事を請ふ。

一  
四

全棱 橫山幸生

既往に於て一高は籠城主義の旗幟を掲げて自負獨往、世に卓立して或は時世の潮流に棹さざるかに見ゆた。向陵の麗しき傳統も氣風もその裡に醸成せられ、かくてこそ向陵の特性は發揚せらるるが如くに思はれた。さり乍ら時世は永く向陵の超脱を許さなかつた。その所謂濁世が如實に向陵を搖がすの時は來た。現代は一個人の内心に係る問題は暫く之を措いてソシアリティーの時代である。社會の實相に對して關心なく生活することは時代錯誤であり無自覺であらねばならぬ。吾人は飽迄社會の客觀的實在を仔細に認識しなければな

らぬ。實にかくの如き思惟が向陵にその脱殻を慾したのである。かくして向陵は時代と社會とに對する自覺に立脚して、堅實にして確固たる地歩を進めんとしてゐる。既往に於けるとは異つた意味に於て、時世の先驅たらんとしてゐる。云はずもがな斯の如き思潮は痛しき辛酸を経て、眞摯にして熱烈なる少數の若き魂に依て扶掖せられたのである。

向陵は坊間傳へらるるが如き天國ではない、樂園ではない。かくの如き憧憬者に取りては、向陵の現實は寧ろ天國の滅落、樂園の喪失迄に墮してゐるかも知れぬ。向陵の生活は自己に對する眞誠なる反觀と自己の至深處への沈潛とに於て意義がある。自己の第一義的な精進——無論大乘的意味に背馳せざる範圍に於ける——を除いたならば向陵生活は味ふに値しない。浮薄なる虛榮と狹隘なる利己とは何れも眞の自治寮生活ではない。盲目的なる舊株墨守と無批判なる流行謳歌とは何れも現在の寮生活の眞義ではない。故に向陵三年の生活は自己に對する正しき認識と内我に對する嚴か

ち並び、南は廣く開けて大阪平野に續く、琵琶湖の水を大阪灣へ送る賀茂の流れは、此等の秀峯と共に山紫水明の實景を描出して居る。

我が第三高等學校は 市の東北隅に  
を尊ぶ、質實剛強は、神陵健兒の誇る

る。質實義勇を標示とする萩中學校に類似する所  
も仲々多い。入學試験の競争も隨分激烈だが、併  
し都會漢恐るに足らずである。自己に充分實力  
を有し、而して其を充分に發揮すれば、合格に決  
つて居る。數學は、教科書を徹底的に究め、参考  
書を合はせて概括的な知識を得る事が肝要だ。文  
字及び問題の吟味は決して忽にしてはならぬ、英  
語は文法的の關係を充分吟味して、單語を相當記  
憶すれば宜しい。又試験採點者の話に依ると、及  
落は國、漢、作文、で定ると言つて居るが其の言  
も多少参考にすべき所もある。暗記物は問題集の  
中から出る事が多い。

なる價值判断に依存せねばならぬ（當爲の論になつて甚だ相濟まぬ）それの有力なる助として寮友との深刻なる交游の存することはこよなき幸である。

私の在校中、遂に萩中の何人も丘の上の人とならなかつたのは頗る遺憾である。勇躍一番入學されんことを期待する。我寮生活の体験が人生の過程に於て常に力強き暗示を與へるであらうことを確信する故に、諸君の入學を冀望する次第である。入學試験に就ての注意に至つては、別に機微はないし諸君の知悉する所だらうから省略する。さらば。

### 江田島より

同校 藤田小太郎

諸君私は此の江田島の地より諸兄と談するを快とする一人です。御承知の通り此の兵學校は海軍將校を養成する所ですから、規律は非常に厳格ですが、而し又教官と生徒間の温情は甚だ深いものです。何事も戦鬪を基本とするのだから教育訓練

へ。冬季休暇にでも遊びに來られましたら又ゆつくりと御了解のある迄御話する事も出来るでありますから。

### 龍南の天地より

五高 竹内孝雄

大永金太郎

龍南の秋は深い。校門から構内に通づる櫻並樹の路に落葉の散り敷く頃だ。松林の合間に隠見する黒ずんだ赤煉瓦の本館は我々の學究と思索の殿堂である。物古りた、落着きのある、宏大な建物は我龍南の誇りであり、其傳統の偉大さを物語るものである。其處には青春の氣に溢れた一千の若人が育まれ、意氣と熱との男性の雄叫びを聞くのである。瑞邦館には夜にかけて、一本の蠟燭の下に集つた哲學・宗教・社會科學等の士の熱烈な辯論が練られ、文藝同好者は五高より各種の雑誌を發行して、想を練り筆を磨く。武天原には其茫茫たる草原の中に野球部と競技部との活躍を見る。高専野球戦に優勝した野球部の練習は猛烈である。

白草原上に建てられた濟美館には柔道剣道の士の斃れる迄やり通すてふ力強い太息、と涙ぐましいまでに高潮した劍戟の響音とを聞くであらう。今年剣道部の優勝は微動だにもしなかつた團結の力だと合點かる。東光原頭に漂ふ黄昏の色彩の中に我々は又蹴球部の奮闘を見、其の一隅に新設された五十米のブールには水泳部員の雄々しい姿を、其の高き跳び込み台上に見受けるのである。龍南の秋は深い、次に我々は熊本の市の相を諸兄に御知らせする。「森の都」と誰でも云ふ。其處に一脈の哀愁と一脈の活氣とが溶け合ひ流れて、何處どなし、溢んだ色彩を我々に與へる。低くせ、らぐ白河の流れは阿武河の比ではないが其の兩岸に垂れ下つた深い樹々に我々は散歩の傳を求める。龍田山上に默想の境を見つける。實際熊本は木立が深い。小高い處に上つて町を一瞥するならば森と森とを縫つて電車が走るのを見受るであらう。時に我々は郊外に遊歩する。一望遙か阿蘇の連山に連る草原。其の間、丘がうねり小森が點在し、小森の蔭には小さな部落を見出すのである。

## 日露協會學校より

我が萩中生諸兄よ。龍南に憧れて一矢を報いら  
れんとする諸兄よ。大地を踏みしめるがいゝ。男  
の熱が力が兩の腕をぐんぐんと流れるであらう。  
意氣だ。意氣に生る青年よ。龍南は大いなる腕を  
擴げて、諸兄の熱烈なる希求の情を納れるであら  
う。諸兄が眞面目に唯一條に精力のあらん限りを  
盡されるならば。青年にはそれだけの意氣が必要  
である。試験勉強に就いての取るべき最上の道は  
諸兄がとくと御自覺なつて居る事と思ふ。唯一つ  
眞剣にやつて呉れ給へ。

我々は徒に諸兄の前途を誤らせたくない。併し  
心から龍南に憧れる人には我々は又熱烈な援助を  
惜まない。

我萩中生諸兄よ。長州人士の血の流れを受け、  
幽寂な古典的色彩に富んだ萩の町に教養受けられ  
る諸兄よ。

長州男子の名の爲めに、萩中の名譽の爲めに、  
敢然として、立たれん事を我々は心から祈る。  
の筈。我校極光會も校運と共に今や運動部に文藝  
部に年々に充實をみせてゐます。

入學に就ての詳細は縣廳學務部に問合せられ度  
く、受験者數は十五年度は特に増加して五十人中  
全文書院に二人當校へ一人を採用、以前は廿人位  
の受験者だったのです。卒業生の殆どは南北滿洲  
に在つて、滿鐵を始め、海陸交通方面、金蝠銀行  
及箇人商會や官衙に又通信、外交方面にもかなり  
の人が活動して居られます。右大畧御報らせま  
で。尙當哈爾賓市の秩序は近時大いに整頓してゐ  
ます。校友會員諸賢の御健康を祈りつゝ擱筆。

## 長崎醫大附屬藥學専門部より

同 校 田 村 季 雄

我が懷しき母校校友會から御通知を得ましたので、秃筆を弄して我校の様子を御紹介します。我校は市中の繁雜から離れた、其名もゆかしい浦陵ヶ丘の上にあります。從て構内は一面に麗しき芝生、綠滴るばかりの樹木もて蔽はれ、之が三方も亦秀峯にて圍まれてゐます。外氣は清淨無垢で、

同 校 中 村 秀 輔

校友會雜誌第廿五号の御發刊を機に「インスチ  
トゥト、ヤボノルスカヲ、オブセストグ」我日露  
協會學校の内情を御照會致しませう。創立は大正  
九年九月後藤新平子を會頭とする協會本部の經營  
所在地は經濟的國際的に注目すべき哈市郊外の久  
遠の廣野に悠然と聳にて、百餘の健兒は歩調揃へ  
て極光寮々生活に親むでゐます。本年は新に中村  
秀輔君を迎へ、今や西田氏と共に萩中出身三名も  
在校してゐます。生徒は各府縣、及滿鐵の派遣生  
で、教職員は高田校長を始め萩町出身、横山教頭  
英國紳士及佛語にフランス美人を聘して、從來大  
陸に雄飛せんとする若人の活氣富める授業を續け  
てゐます。明年よりは三年生のバイカル湖邊りよ  
り、アムール流域都市を尋ねての修學旅行を舉行

外界の雜音は耳にせず、實にのんびりとしてゐま  
す。之を京阪の學校に比すると、眞に恵まれた地  
ではあります。

藥學専門部に獨立して、年月尙淺きため、設備  
は完全ではありませんが、内容に於ては割合に充  
實してゐると思ひます。全生徒數は僅に百六十餘  
人で、風紀もよく、概して眞面目です。修業年限  
は三ヶ年で、試験は三學期制度です。就中第三學  
年に於て前期後期の兩卒業試験を行ふのは、我校  
特色の一です。又運動部、音樂部、雜誌部等の機  
關が設けられてあります。就中優勢なのは庭球部  
競技部、音樂部等です。僕等が今教つてゐる學科  
は獨逸語、化學、藥用植物學、分拆學及び之等の  
實習が、其の主なもので、此外鑛物、修身、英語、  
教練等があります。何よりも樂しいのは分拆實習  
の時間で、二三時間は知らぬ間に経てしまひます。  
次に入學試験ですが、其の科目は數學、英語、國  
語、漢文、物理、化學の六科目です、數學は平面  
幾何に代數でした。頭を捻る様な問題は割合少な  
かつた様でした。之が準備としては、別に申すこと

はありませんが、要は教科書の忠實なる総復習にあるのです。但し數學、物理、化學には参考書も充分やつて置かれたがよいです。入學試験とて、別に驚く様な問題が出されるのではありませんから何によらず徹底的に理解して置かれたらいと思ひます。

次に我校の社會との關係に就て述べますと、卒業後の就職の道が可成り多方面にあることは又我校特徴の一でせう。即ち藥劑師としては、病院に、藥局に、技師となりては、各種衛生試験所に、將、會社に、或は教員に、學者など我等の進むべき道は數多くあるのです。

高遠なる真理を論及するのも可いでせう。嚴正なる軍令の下に活動するもよく、尊きハンマーを打ち振るも可いでせう。それは諸君の欲する所に従はれたい。何處までも興味ある吾が藥學方面に趣味を有し、希望を持つて居られる方は明春はゞしき御入學あらんことを切望します。今萩中出身者は大學に三人居りますが、藥專では一年に厚東君、上野君と私の三人だけです。尙何か御不

れます。此の科の將來は言ふまでも肥料、砂糖、麥酒其の他の醸造等に道があります。

然しそんな小つぽけな事はおいて、今や我が農村には小作問題のため、平和な農村も地主と小作人との間に、火の出る様な争が起り相讓らず何時解決がつくか予測を許しません。又我々國民の一日も忘られない食料問題と云ふ奴があります。年々七八十万の増加ではたまりません。追々米が喰べられなくなります。然し御安心なさい我が國には未だ方々に有効な土地が捨て、ありますから。余り農科の事を悪口致しましたから農科のため大責任大任務を述べた次第です。

入學試験には數學(代數、幾何、三角)英語、物理、化學、動物、植物の六科です。(試験は知れたものです。只充分我が學校を理解あつて、受験せられる事です。他の専門學校と異なり實習があつて相當苦しいのです。(化學科は一年の時だけ實習があつて二年からは全部化學實驗です)農科などは夏は一ヶ月しか休みはなく實習をして居ります。私は只學校を紹介しただけで、充分將來を考

審の点があれば遠慮なく尋ねて下さい。詳細御知らせします。

最後に諸君の御奮闘と御健康を祈ります。

鳥取高農より

同校三好治男

月並に燈火親しむべきと云ふ季節から、皆さんの受験生活と云ふものが開始され、自己の希望の道に猛進するための努力を續けられる事であります。幸ひ此の時少しばかり私の學校の事を述べて見度い考へです。私共の様な低能なものが校友會雑誌に寄稿するとは、潛越至極かも知りませんが。我が校は現在は農學科と化學科との二科ですが近く畜產科か林科かのどちらかの出來そうな話です。二科で二百足らずの生徒が居る譯です。農學科はさして言ふ程の事もなく、十五六町もある農場でコツコツ百姓をして居る位です。寧ろ鹿兒島などへ行かれるを希望します。然し化學科は全國農林學校中一番施設が完備して居ると云ふも過言ではありません。先生もよいのが澤山をら

へて學校に入りさへすればよいと云ふ無鐵砲さ、と先輩が只自分等の學校に入れ度いと云ふ、無責任から飛び込んで悔恨せられない様、呉れ／＼も注意して擗筆します。

返へす／＼も洋學專要に奉存

候(中略)但西洋目今實用の所  
深く研究の上隨レ地隨レ人變而  
通レ之存ニ于其人ニ也

十日二十一日 (松陰先生書牘の一節)



## 藻 塩 草

(舊作)

### 長 門 峠

(舊作)

特別會員 金 子 乙 助

神秘の扉開かれて

一、幾千萬代閉されし

大山祇のことさら

長門峠は世に出でぬ

水姿石態面白や

造りなしけん好風致

奔湍怒號地を搖る

二、危岩突兀天を摩し

百尋の潭水碧し

千尺の崖苔蒸して

長門峠は天下の勝

雄大豪壯比なき

もみち葉匂ふ岩の陰

三、櫻花咲く山の峠

水に躊躇の映ゆる夕

峯に白雪積る朝

長門峠は天下の勝

艷麗清楚類なき

鴛鴦も來りて影うつし

四、ます鏡なす淵の面に

かじかもすみて歌ふなり

綠陰深きせせらぎに

長門峠は天下の勝

幽邃閑雅例なき

來りて觀よや天地の

五、鳴呼長峠は開かれぬ

神代ながらの峠谷の

なしのまにく生れ出でし

靈氣に觸れん人はいさ 神秘探ぐらん人はいさ

## 兵 営 生 活 の 記

第五學年 永 富 五 郎

十月二十一日

薄墨色の惡魔の様な雲が、東から南の空一帯に  
かゝつてゐる。心配しながら準備を整ひて登校。  
來る者來る者皆元氣旺盛。武裝……と言つても  
銃は無い……を終つて七時出發。長い側面縱隊  
で堂々と校門をくぐる時は、さながら、出征軍  
人の様な氣がする。舊道をたどつて、一路山口  
に向つた。金谷神社で少憩。涙松のあたりに行  
つた頃、西方の空から、次第に晴れて來た。其  
の古を想起しながら、靜かに顧れば、今しがた  
迄、夜のベールに蔽はれてゐた、平和な巴城の  
水都は、再び、はげしい生存競争の衢にならう  
としてゐる。

暮れに近い秋、殊に田舎の秋は、一しほ寂寥の  
情を起させる。黒ずんだ緑の中に點綴する紅葉、  
黄ばんだ残り葉の中に、鈴なりになつてゐる柿  
すみの中に消えて行つた。消燈喇叭であつた。  
九時半。

全月二十二日

六時半起床。窓ガラスがかすんで見れないが、  
外からは、もう勇ましい掛聲が聞にて来る。銃  
剣術の練習をやつてゐるのだらう。窓を開けて  
見れば、一面朝霧にとざされて十間先は、わから  
らない。此のが山口の特徴らしい。

今日は、畏くも、長慶天皇御在位御申告式の爲  
め休日。午前實包射擊の豫定であつたが、午後  
に延して午前中は營内各所を見學し後休んだ。  
早速酒保につめかける。あちらこちらと各所に  
グループを作つて、盛んに口を動かしてゐる。  
甘黨軍の攻撃が功を奏したものか、賣主は、品  
切れを連發してゐる。

健兒の意氣を示すべく、一同、校歌、開校紀念  
歌を合唱して、堂々とのりこんだ。午後六時遂  
に目的的たる營所に着いた。廣い營庭には、盛  
んに銃剣術の練習をやつてゐる。近々中隊對抗  
の競技會があるそうだ。早速夕食にとりかかる。  
無論最初の事であるから、向から當番が出て、  
準備して呉れた物である。大きなアルミニュー  
ムの器に、まだ湯氣の立ちのぼつてゐる飯……  
有名な麥飯……が山盛り、其のくせ料理の少い  
のには一寸面喰つた。午後八時半、點呼。直ち  
に就床。一日の强行軍で、すつかり疲れたらし  
い、すぐ寝こんでしまふ。

ひろくい營庭には霞が、一杯に立ちこめ、淡

午後一時。いよいよ實包射擊が始まつた。瓜先きのぼりの草原の廣い射擊場の向ふには、砂塚が有り、其の麓に深い監的濠が作つてあつて、長さ五尺、幅三尺位の回轉式になつてあるのが立つてゐる。二百米の射距離をおいて射つのである。各人の彈丸五發。ズトン!! 般々たる銃聲は、秋の静けさを破つて。餘韻は山又山、谷又谷。はるかの彼方に消えて行く。つゝけ様に起る銃聲に、異様な自然の音樂が奏せられる。かくして午後六時終了。夕食後も、相變らず酒保は大繁昌。今夜は、順番を作つて、本物の兵隊さんと共に、不寢番に立つ。此れが中々苦しい。殊に二時三時頃の番になつた者は一層苦しい。九時半消燈。

#### 全月二十三日

今日は靖國神社の遙拜式があつた。廣い兵庭の中央の松を圍んで、聯隊全部の兵が、スラリと並んで音一つしない、嚴肅そのものである。吾々も式に參列する事を得た。ぐるりしか残つてゐない軍旗を拜した時、まさしく激戦當時を

爲めに、飯盒炊爨をやつた。宮野川の河原には、前以て準備をしたものらしい。數個の竈が作つてあつて、盛んに炎をあげてゐる。もう日は全く西に沈んで、人の顔もはつきり見れない程であつた。二人につき一個の飯盒、各小隊に二個の牛罐、それが料理である。晝間のはけしい演習で、腹はペコペコだから非常にうまい。七時過ぎ、いよいよ夜間演習にうつつた。敵の歩哨線に向つて、夜襲を試みるのである。満月に近い月は、もう東の空に頭を出して、全く夜襲に不適當な晚であつた。斥候の報告によれば、三の宮の森から記念碑高地の一帯にかけて、敵の歩哨線があるらしい。敵情を知つた吾が軍は、行動を開始する事になつた。中隊縱隊を作つて、全く盜人の様に、コソリコソリと進むのである。早くも、此を知つたものか、敵の輕機關銃分隊は猛烈に射撃する。もし此が實戰であつたら、吾が軍は全滅であつたかも知れないが、吾が軍も臆せず、遂に敵陣目がけて突入した。はるかの遠くから演習中止の喇叭が聞わかる。こゝにい

#### 感想

想はせる。最後に射擊名譽旗授與式があつて分列式が行はれた。壯重な喇叭の音にそろへて進む様は、眞に何とも言はれない感じがする。午後になつて野外演習があつた。自分は先づ歩兵長として動作したが、地理もわからず、廣くはあるし、一寸困つた。練兵場の東端に陣どつてゐる敵を攻撃すると言ふもくろみである。彼に距離が接近するといよいよ火線構成。廣い練兵場一杯に長い火線を作つて、チリチリ敵陣に攻めて行く所は、さながら實戰である。それに平生、吾々がやる演習とは違つて、輕機關銃分隊が加はり、益々士氣があがつて来る。敵もさる者、猛烈な弾丸をあびせかける。吾が軍もなかなく、届しない。距離百米内外となるや、勇ましい突撃喇叭の音が響いて来る。スワッ!! とばかり一同、ありつけの喊聲を揚げて、敵陣目がけて突進する。遂にへこたれたものか、敵も退却し始めた。二百米も追撃した頃、演習中止の号令が聞えた。時に五時。今晚は、又夜間演習がある筈。四十分ばかり休憩して、夕食の

#### 全月二十三日

今日はいよいよ三日間の兵營生活を終つて歸るのである。僅かな日數どは言ひながら、三日間の契を結んだ兵舎に、別れを告げて午前十時出門。

終始吾々を指導して下さつた上野見習士官に引率されて、野田、豊榮神社に參拜、教育博物館、龜山公園の各所を見學、山口驛に着いたのが十一時半頃、正午の汽車で山口驛を出發。小郡、厚狭を経て、美禰線に乗りかかる。一世紀遅れた様な氣のする車である。でも此が唯一の交通機關だ。三時間後、吾々の眼前に現れたものは、あの廣大な日本海であつた。短いことは言ひながら、全くの山中生活に、氣もふさぐ様な吾々には、未だ嘗て經驗した事もない程の親しみを感じた。かくて五時過ぎ、吾々は故郷の人となつたのである。

「兵營は苦樂を共にし、生死を同うする軍人の家庭である。」と言ふ事を教はつた事がある。果してそうだらうか、と多少疑を抱かないでもなかつた。だが此の度の營内生活に於て、時日は單小なりと雖も全く此の疑雲は掃はれた。長以下各兵卒に至るまで、よく融和が取れ、紀律節制も十分に守られ、有機的の團体として全く恥しからぬものであつた。又吾々の指導役としてつくされた、見習士官及び下士の非常に親切であつた事は、此に更めて深く感謝する、とにかく吾々が、此の尊い團体の一部分として働く事の出來たのは男子的一大痛快事で、又意義ある体験をしたのを悦ぶ次第である。

百事精思而後行ふべし長者  
小頭を凌忽して人の疾惡を取る  
こと勿れ汝才氣なきを患へ  
され患ふる所は此の二事のみ。

(松陰先生書牘の一節)

## 校報



### ◎第二十六回卒業式

大正十五年三月三日午前十時より第二十六回卒業式を講堂に於て舉行す。來賓官公吏有志等九十餘名、學校長勅語捧讀の後、卒業證書を一括して卒業生總代田村義雄に授與し、學校長告辭、知事代理として岡阿武郡長の告辭代讀、來賓總代の祝詞、父兄總代の祝詞、卒業生總代の答辭、在校生總代の祝詞等あり、午前十一時過終了す。當日卒業生にして受賞せし者左の如し。

田村義雄、齊藤音熊  
一、平素勤勉にして能く校則を守り、伍長となりて能くその任務を盡したるもの

阿武義輔

一、五箇年間皆勤したるもの

石光仁吉良、村岡幸作

一、五箇年間精勤したるもの

藤田小太郎、廣順一、香川俊男、藤村和輔、國弘三郎、山田明、市原茂樹、井上宗親、村本忠治、大岡鶴二、多田利雄、有

美邊、松井利明、大和忠雄、中山眞哲

一、本學年間皆勤したるもの

塙田壽男、田村義雄、山田忠、國司武雄、田村季雄、有美邊

松井利明、波田繁夫

一、本學年間精勤したるもの

平田保雄

一、卒業の際七席以上にして、同窓會より獎學賞を受けしもの

田村義雄、齊藤音熊、多田利雄、藤田小太郎、國弘三郎、阿

武義輔、藤山光雄

### ◎縣立學校生徒獎勵

規程による受賞者

四月八日、新學年の始業式後、前學年度に於ける第四學年以下の生徒に對し、賞品賞狀の授與式行はれたり。

一、特等賞（平素勤勉にして能く校則を守り、學力優秀にして伍長となり能くその任務を盡したるもの）

一年、高松博、豐田正之

二年、岩武照彦

三年、柴田敏夫、兒玉玄太

一、一等賞（學力優秀にして能く校則を守り、伍長となりて能くその任務を盡したるもの）

四年、永富五郎、野稻清定、仙波武

三年、板垣禮作

二年、五島直人

一、二等賞（平素勤勉にして能く校則を守り伍長となりて能くその任務を盡したるもの）  
三年、田北享、厚東光、三浦彦八、大村武一  
二年、田邊世民、藤井潔、岩田忠夫、村本八郎、三好謙介、渡邊良介、林吉郎  
一年、宮本哲治、光井泰城、田中國盛、小池茂夫、大藤義人  
岡本一雄、恵本長一

一、學力優秀なるもの

三年、赤木弘

一、三等賞（本學年間伍長となり能くその任務を盡したるもの）

四年、新山半治郎、清水豊吉、小枝清、伊藤滿、脇本元、堀源助、阿武博一、久保一郎、小原美紀、大永金太郎、森澤史郎、濱村伸、宮崎三郎、横山剛熊

三年、辻永勝明、田村久男、峯岡貞文、高橋博、田村英治、山根芳郎、和田賢、河村忠雄、三井正治

二年、原田正人、岡田勝、清水俊雄、山本宗一、吉屋安雄、長谷川保、秋丸兵一、松浦藤三郎

一年、岡崎正夫、村岡慶太郎、赤木正二、中村正一、八木哲夫、長嶺正衛、澄川滋、安江美保介、田中了範

一、三等賞（本學年間室長となり熊くその任務を盡したるもの）

四年、下瀬知雄、藤井勇、益田實、原一衛、中澤銀市、野稻清定、脇本元、河武博一、小原美紀、宮崎三郎、永田孫太郎、吉村醇

一、四等賞（本學年間皆勤せしもの）

一、等外（本學年間精勤せるもの）

四年、伊藤滿、伊藤徳太郎、未成寛、河武博一、堀源助、篠原正太郎、津田茂、本永鴻、西村重晴

三年、田原新一、土井五郎、村木權次郎、渡邊敏夫、山根芳郎、秋山俊輔、横山三重

二年、大津朔一、三島將、小田博、金子敬三、金子爲朝、中尾喜彦、山本正、五島直人、乃美魁、大野重一、井上弘幸

小田清作、松浦藤三郎、田畠恒夫、大島次郎、石川満男、宮川泰治

一年、岡正夫、來島秀男、中野良雄、野村琢磨、中村正吉、阿武正夫、楊井誠之、赤木元夫、三好桂太郎、山田博、桂木素夫、中村正一、八木哲夫、高尾豊彦、三原正治、末武禎次、藤村壽夫、城一雄、津森正夫、龜屋武治

同日同窓會よりも、各學年成績優秀なるものに獎學賞の授與あり。

四年、永富五郎、野稻清定、小原美紀、大永金太郎、仙波武三年、板垣禮作、赤木弘、兒玉玄太、柴田敏夫、水野一郎  
二年、五島直人、岩武照彦、三好謙介、岩田忠夫、松浦藤三郎  
一年、高松博、豊田正之、赤木正二、長嶺正衛、宮本哲次

### ○先生の更迭

大正十四年十一月以後（前號報告後）先生の更迭せられし者左の如し。

△古川啓藏先生 大正十五年四月、依頼職を免せられ、唐島縣廣

陸中學校に奉職せらる。

△近藤文雄先生 大正十五年四月、福岡縣へ出向を命ぜられ、豊津中學校に奉職せらる。

△駒田卯三郎先生 大正十五年四月、山口縣立長府高等女學校に榮轉せらる。

△下間教修先生 大正十五年四月、新任せらる、英語科擔任

△沖田晋一先生 大正十五年五月、新任せらる、地歴科擔任

△東久雄先生 大正十五年九月新任せらる、英語科擔任

### ○校 誌（節 略）

（自大正十四年十一月）

○圖書館週間 十一月二日、圖書館週間事業の一として本校講堂に於て、高須太助の「支那事情」本校香川教師の「防長と海軍」に就き講演あり。

○體育デー 十一月三日、全國體育デーの爲め前庭に於て學校長の訓話あり。明倫小學校に於ける阿武郡主催體育大會に本校選手を出場せしむ。

○松陰先生追慕式 十一月廿一日、講堂に於て舉式、河野教諭の講演あり、松陰神社に參拜す。

○辯論大會 十一月廿六日、講堂にて開催

○皇孫御降誕祝賀式 十二月十日、前庭にて舉式、一同春日神社に參拜、歸校後、殿下及帝國の萬歳を三唱す。

○衛生デー 十二月廿二日、全國衛生デーの事業として身體虚弱者に特に校醫の診斷を受けしむ。

四年、下瀬知雄、益田實、原一衛、瀬川洋、土屋秀雄、村木七郎、中村明、宍戸武夫、永松三衛、青山常次

三年、金田延佑、神田武雄、片山若彥、河村一雄、弘實明、宮崎典也、山根友信、仁保政敬、楊井勇、阿武顯治、永留博

上野七郎、山本博、田中久人、西山種雄、竹内季雄、安田稔、中野孝造

二年、中村稔、德久正敏、中原信登、馬來壯祐、林薰、福田壽男、品川透、岩本誠、宮原進、弘永正、岡崎正信、田村秀夫、神崎清作、武居好次、神西豐、藤本實、天野昌平、兼田英一、中本節一、矢次福正、田村信義、藤井良雄、和田遙、服部武夫、大野一郎、田中敏亮、藤井史郎、奥部武義

一年、吉賀幸一、渡邊義雄、山内清繁、田原正旗、大野元明池内博、都野繁雄、橋本顯二、高橋勉、磯川司平、持山侃二郎、清水武夫、佐々木徳太、平田正輔、藤田正直、花村英一、神田雅人、梅木義男、筒本正、石田勇、高垣正秋、藤野晃、河野富男、大庭清宣、藤谷正雄、三隅田浩治、阿部惠三、田原義雄、鴻嶺利光、弘春輔、野間百合藏、池上文夫、堀利久、岡勇、渡邊知正、永田正二、伊藤芳治、宇野富夫、中村不二夫、藤田榮作、今地忠雄、久保田保久、彦田徳市、金田範尾、白井光人

- 寒稽古 大正十五年一月十一日開始全廿日終了
- 武道大會 一月二十一日舉行
- 消防演習 一月廿九日舉行、萩警察署長の講評あり。
- 教練查閱 二月五日、歩兵第四十二聯隊長川崎亨一大佐來校、第五學年全部並に四年以下各一組の教練查閱。
- 卒業式 三月三日(別項参照)
- 縣知事視察 三月六日、新任大森知事來校校内視察。
- 陸軍記念日講演 三月十日、本年は明倫小學校講堂に於ける陸軍記念日講演會聽講。
- 活動寫眞撮影 三月二十六日、堺大濱飛行協會の水上飛行機來萩、本校附近を活動寫眞に撮影す。
- 入學試驗 三月廿七、八兩日舉行。
- 入學式 四月九日舉行。
- 學級自治會 四月十六日各級にて開催。
- 修學旅行 第四學年生徒、五月三日午后六時三十分玉江出發、五月八日歸校。
- 一日遠足 五月八日、各學年にて舉行。
- 皇太子殿下御盛德謹話 五月十七日講堂にて學校長講話、引續き香川教師の「防長人士忠君の事蹟」につき講演あり。
- 御親閱場整理作業 五月十七日より開始、これより大雨の日の外殆んど毎日、五月三十日御親閱當日まで或は學年各別に或は惣出にて御親閱場整理に熱中したり。
- 辯論小會 一二三學年は五月十八日、四五學年は五月十八日各別に開催。

- 御親閱豫行演習 五月廿二日、本校生徒の隊形編制豫行演習を行ふ、五月廿三日及び五月廿六日、阿武大津美禰三郡の御親閱を受くる者全部集合隊形編制豫行演習を行ふ。
- 山口學生聯盟主催陸上競技大會 五月二十三日舉行、本校より選手十五名派遣、本校二等。
- 海軍記念日 五月二十七日、朝枝海軍大佐の潛航艇に關する講演あり。
- 武道大會 五月二十七日舉行。
- 皇太子殿下行啓一路御安泰祈願 五月廿八日職員生徒一同春日神社に參拜祈願。
- 鶴驚奉迎遙拜式 五月廿九日、講堂にて舉式。
- 台覽競技 五月廿九日山口にて舉行本校一等。
- 皇太子殿下御親閱 五月三十日午后一時五十四分職員生徒御親閱の榮に浴す。(御親閱記事参照)
- 奉迎提灯行列 五月三十日午後六時より土原新道に集合萬歳三唱五間町を通り藤田邸址にて開散。
- 皇太子殿下奉送 五月三十一日午前六時萩驛前に集合御一路御安泰を祈りつゝ御奉送申上げたり。
- 殿下萩地御巡啓謹話 六月一日、講堂にて藤本萩町書記田中本教諭の講話あり。
- 競技講話並に指導 九月八日、河村内務省囑託河村本縣視學來萩を機こし競技に關する講話並に指導を受く。
- 展覽會 九月十二日、第二、三學年生徒の父兄保証人會を開き併せて理科、書道、畫道、地歴科の展覽會を開く。



## 校友會報

### ◎競技部記事

#### ▲攝政宮殿下御台覽競技會豫選記事

五月一日我校選手は三浦先生引率の下に山口に向つた。五月二日午前十時華やかな開會式が、大會場たる山口高商グラウンドにて舉行され、愈々八百米リレー第一豫選によつて大會の幕は截つて落された、トップの金森幸一君、嶄然他を壓して敵勝を寒からしむれば續く角屋興三君、例によつて好走し第三走者田中君に更れば、田中茂一君猛烈に頑張る、其の後を林正次郎君うまく操り美事入選し二着との差約五十米、壯快なる哉。續いてローハードル第一豫選が行はれた、ハードラーコとして縣下に其の名を知られて居る金森、秋山兩君だ軽く好走して入選す、次で約二時間の後八百米リレー第二豫選があつたが、例の調子だ、問題なくタイム一分四十一秒だ。内では棒高飛が始まつて居る、山縣君、田中君共よく奮闘され、山縣君ば君一流の美事なフォームで火の出る様な接戦の後、三等にて入選された、田中君もよく頑張られたが惜しくも六等にて落選された。トラックでは今ローハードルの第二豫選が行はれて居るが、之も全く問題にならず、兩君共樂に入選された。續いて青年團百米決勝、女子五十米決勝の後ローハードルの決勝が行はれた、兩君共美事なフォームにて先頭に立ち、殆ん

ど同着にてゴールイン、一着金森君のレコード二十八秒に、兩君の美事なフォームに觀衆は唯驚歎の眼を向けて居る、愈青年八百米決勝の後、入百米リレー決勝が行はれた、萩中は最早戦はずして他を壓して居る、金森君華やかにトップして既に敵を壓し往年の能美先輩をそぞろに思ひ出ひ出させる、角屋君又悠々ミリードすれば、田中君も我劣らじと得意のスプリントを利用して力走するのを林君老巧にバトンを得るや巧みに敵を操つり、二着との差約二十米にて優勝す、タイム一分四二秒、斯くて我校選手は全部優秀な成績を以て入選し、晴の台覽競技會には猶一層優秀な成績を收め、我校の名譽を萬古不朽にせん事を期するのである。當日出場選手、及びレコード左の如くである。

八百米リレー 林 正二郎 一分四二秒

金森 幸一

角屋 興三

田 中 茂 一

棒 高 跳 金 森 幸 一 二十八秒

秋 山 昇

田 中 次 郎

山 縣 定 芳 三 米 ○ 六

#### ▲台覽陸上競技會

縁濃き大正十五年五月廿九日、畏くも、皇太子殿下山口町に行啓あらせられ、山口高商前御親閲場にて各種團體御親閲の後、我等の競技をも台覽あらせられし事は吾々の末代までも忘るゝ事

八百米リレー 一等 萩中チーム

（林正二郎  
角屋興三  
田中茂一）

一分四十七秒

二等 山中チーム

（金森幸一  
梅屋生記）

三等 鴻中チーム

（梅屋生記）

#### ▲山口學生聯盟主催

##### 關西中等學校陸上競技大會記事

山口學生聯盟主催關西中等學校陸上競技大會は、五月二十三日午前八時より舉行された。各校參加選手の壯嚴なる入場式に次で、前年の優勝校廣陵中學より優勝旗を返還し、愈午前八時半より百米第一豫選を以て競技は開始された。前日の雨は晴れ、天氣晴朗にして、絶好のスポーツ日和であつた。當日のレコードは左の通りで、遺憾ながら我校は廣陵の爲に敗れてしまつた。

一、百米決勝 一等（山師）二等（己斐中）三等（萩商）  
我が校の林君は悲しくも決勝で四等にて賞に入らなかつた、金森君は第二豫選にて三等で落選

當日は雨の爲レコードは全然見るべきものはないが参考の爲、光榮に浴した出場者と共に左に掲ぐ。

ローハードル 一等 秋山 晃（萩中）二十九秒  
二等 服部（萩商）三等 岡（山師）  
棒 高 跳 一等 山縣定芳（萩中）一米六〇A

二等金森(全) 三等(山中)

一、千六百米リレー 一等山中チーム

三分五十五秒五分ノ二

二等萩中チーム 三等廣師チーム

我チームは最初より抑へられ、遂に優勝する事は出来なかつた。

然し選手の元氣、實力は偉大なる者があつた。

一、砲丸投 一等(廣陵) 二等(廣師) 三等米廣(萩中)

米廣君コンデシヨン悪く遂に日常のレコードも出す殘念ながら

優勝は出来なかつた。

一、円盤投 一等米廣(萩中) 三十米一五

二等(廣師) 三等(山中)

一、走幅跳 一等(廣陵) 一等(萩商) 二等不明 三等(廣師)

我校の山村君は惜しくも賞に入らなかつた。

一、走高跳 一等(廣陵) 二等(萩商) 三等(萩中)

我校の仙波君米廣君は殘念にも踏切悪しき爲、賞に入らなかつた。

一、檜投 一等(關商) 二等(廣師) 三等(廣師)

我校の仙波君米廣君は殘念にも踏切悪しき爲、賞に入らなかつた。

一、ホースジャムブ

一等(廣陵) 二等(山師) 三等(萩商)

田中君、山村君共大に奮闘されたが殘念にも入賞しなかつた。

當日の得点は次の如くである。

山縣君孤軍奮闘され三等に入賞された。

ホルダーナーたる米廣君が午前のコンデシヨンのまゝで調子が悪い。脚氣の爲か二回までファーレルの悲報は審判員の口から呼ばれた後一回でベストが定まるのだ。自重して投げた三回目の円盤投は飛んで二十七メートルのラインは無事通過。二十七メートル出ない者はベストに乗らないのだ。ベストに入つてからも自重して投げた爲か功も奏せずして二等となる。一等は山師で二十九メートル八十七だから前年作った君のレコード三十メートル〇は依然として残つてゐる。三十三メートルは軽く飛ぶ米廣君に對して同情に耐へぬ。宮本君も場所慣れない爲惜しくも等に入らぬ。ファーレルのバッドコンデシヨンに拘はらずトラックでは巾々の元氣だ。百米第二豫選に於て、松岡君走るは走る、一秒六ミリとレコードでテープすれば、仙波君もよく頑張り柳高の吉浦君のタイム十一秒四ミリと胸一つの差で二着に向うの爲に六メートルを出さずして五メートル八にて二等、吉屋君は大会の二週間前より足を痛めて失敗したものは残念。ハードル豫選にはアーチである山村君と吉屋君との走幅跳だ。六メートル〇はショーカーである。先づ第一に松岡君が思ひ切り馬力を掛ける、秋山君が例のスプリントで走れば、林君も自重しつゝ操り、金森君は特有のホールドで力走す。タイム一分四十一秒六で一着。

一等廣陵中學 二十六点五分  
二等萩中學 十三点 五等萩商 十点五分

斯くして我校は殘念にも敗れたりとは謂へ、昨年に比して、大に廣陵中學に内迫し、昨年の如き大スコアにて優勝せしめなかつたのである。後輩の諸君、専心練習され来るべき來春には、美事、今年の雪辱をされん事を望む。(村木生記)

### ▲山口縣教育會主催 行啓記念山口縣體育大會

縣下のファンから大なる興味をもつてその日を待たれてゐた、山口縣教育會主催の陸上競技大會は、今春、行啓遊ばされし、皇子殿下の記念事業の一つとして、舉行され、我校は又もや、霸權を握る事が出來た。

十月十六日午前八時三十分、壯嚴なる送別式は舉行され、全校生徒の聲援に送られ、我等選手は山本、三浦兩先生と共に山口に向つて出發した。

途中雨の爲明日の天候を心配した。

十月十七日午前八時、開會式は吳第二艦隊軍樂隊の吹奏裡に、山口高商の大スマザアムに於て花々しく開始された。優勝旗を先頭高く棒げた我校の選手は、ステップも軽く入場し正面前に整列した。前日の雨はからり晴れ、秋の光は力に躍る若人達の面上に映る。例に依つて優勝旗返還、訓話及び山師の末光君の宣誓あり、愈々血湧き肉躍る若人の力競の幕は、トラックでは百メートル豫選、ファーレルでは砲丸投げに依つて切つて落された。

熱狂せるファンの應接に依つて第一日のプログラムは終りを告げた。成績、秋中十九点、萩商二十三點、山師二十一點、點數に於て第三等と雖も、よく豫選にバスす。恐ろしいのは山師だが、我々選手は勝つて見せるさ強く々々心に誓ひ、全軍の意氣は天を衝く。

××××

明くれば十月十八日、我校二十七回の創立記念日だ。時もあらうに我校の開校記念日に當つてこの花々しい大會が開かれようとは………冷水にて體を清め、二十名の選手意氣揚々としてグランドに向ふ一早く紺のユニホーム姿を、トラックに現はもてウォーミングケアップに身體の調子を整へた。二百米第二豫選をホース、ジャンプに依つて火蓋は切られた。二百米には林君一人、君には後に大切なリレーが二種もあるのだ。この上足を痛められてはと思つて棄權する様にと頼んだが、足ならし位にと言つて出場したが、不幸落選した時には君に同情せざるを得なかつた。足さへ痛まなければ愚痴をこぼしたものなる。次ぎは八百米決勝。萩中の奮起する動機は實に此だ。八人の選手は後になり先になり、巴状戦を演じたが最後に至つて突如角屋君トップに出でてテープを切る。來島君少くも揉まれてか惜しくも三等となる。

内ではホース、ジャンプの大接戦だ。山村君はどう言ふものか思ふ存分飛べず遂に失敗。田中君はバットコンテンションにも拘はらず奮闘し、日頃の十二米五〇も出さずして終に四等。山師一、二等を占め、得点十二点を取られて、我校の形勢不穏に傾く。トラッ

クでは百米の決勝あり、新進者の松岡君は體も疲れて來たのか二等と接戦しだが終に及ばず三着となつた。仙波君のスタート悪くして落ちたのは殘念。續いて千六百米リレーの決勝だ。先づ第一に金森君スタートしてトップを抑へ第二走者林君にバトンを渡す林君は動かない足を無理に動かす、苦痛の表情は自ら顔に現はれて、見る者我知らす感涙に咽ぶ。あゝなに痛じものな、涙を呑んで應援す。林君最後のラストコーナーまで頑張つたが頑張り切れず、終に山師に抜かれ鴻中と接戦だ。秋山君にバトンを渡す際鴻中抜く。秋山君は力走に加ふるに力走を以てし、一、二等を抜いて走る。最後のストレートに至つて、餘り頑張つた爲か、再び山師、鴻中に抜かれ三着でバトンを角屋君に渡す。角屋君バトンポツクス飛び出した時にはもう一等の山師は十五米の前方を走りその中間を鴻中が走つてゐる。角屋君は最早死に物狂ひだ。一步々々と肉薄して行き最後のカーブで首尾よく鴻中を抜きラストヘビーに依つて山師を抜かんとして力走した。テープまで五十米………山師との差六米、後三十米………差四米、後十米………差一米半、もう一息だ。觀衆は天地も裂けんばかりの聲を上げて呼んだ。後五米二人は接近した。切つたテープ………悲しかな、脚一つの差で惜しくも二等。けれどあれ程肉薄する事の出來た角屋君の功や、稱讃すべきだ。

千五百米豫選には來島君最初より一等に附いて軽く走る。この調子ならばと思つて見てゐる結果してラストコーナーに入つて一等を抜いてテープを切る。河村君は揉まれて失敗したのは殘念。

薪りつゝ經過を見る。スタートを離れた來島君の姿は第二位に現はれた。一等には萩商の植村君、三等を見れば山師だ。三回までそのまゝでラストになる突如五、六等の處にわたり柳中と岩中が山師に接近して終に二人とも山師を抜く。やゝ胸をなせる。來島君を見れば悠久二等で遂に最後まで頑張る。おゝ若き小選手よ！お蔭で萩中五十點山師六十三點、差十三點となる。これに元氣付いた山縣君、得意のアーチモーションで飛んでゐる。山師も頑張る。ローハードルは初まつた。これは我校の御手の物だ。山師の成績如何に依つては我校の勝たと思つて見てゐるさ先づ群を抜いて走つてゐるのは秋山君、今春御台覽の光榮に浴した丈あつて見事見事。ホーム、スピード、共に申し分がない。二等は多分金森君だらうと思へば豈はからんや、山師の岡君だ。金森君はスタート悪しき爲三等を走る。四等と五等を山中が走る。五十米位の處で金森君山師に肉薄す、同時に山中も接近して来る、後三十米と言ふ處で金森君完全に第二位を占む。最後のハーダードルで山中の二人は山師を抑へ、我校は一、二等入賞す。山師は五等だ。

本日の秋山君のタイム二十七秒二是十四年度の全國中等學校記錄二十七秒八九遙に破つてゐる。

ハーダードルの結果として萩中六十二點山師六十四點、もう後二点だ。棒高跳の山縣君も自重して跳ぶ。山縣君の奮闘如何に依つて我々の運命は全く解決されるのだ。三米二五は跳ぶ、山師も萩商も跳ぶ。三米三〇に上げられた。一回目は惜しいかな失敗山師も失敗。萩商の西村君は自信をつけてゐるので無事にバスす。午前からの寒風は時折りこのグランドに見舞つて寒い事夥しい。二回目を跳

んだ。體が上つたと思ふ時一陣の風の爲ホームが亂れて又もや失敗、山師は早や我軍の勇に屈してか？三米三〇に自信のない爲か？ホームも出來ずして失敗。貴重な最後の一回に於て山縣君の態度を見た。君は今度こそは跳んで見せると言ふ色を顔に表はしつゝ時機を見て走つて來た。體は宙に上つた。観衆より渦びしかゝるごよめきは雷の如く鳴り響いたその瞬間、體は何人の苦もなくバーを越へた。我等選手の控席からは歎呼の聲が上つた。山師はどうかと打ち震ふ心を沈めて見守つたが駄目。この戦ひに依つて山縣君二等山師三等で今は秋中山師共に六十七點の同點だ愈々大會の花と言はれる八百米リレーに依つてお互の勝敗は定まるのだ。満場の觀衆は勝負如何に手に汗して片唾を呑んでゐる。

先輩並に我等全部は四人の選手を前にし熱誠籠る言葉にて、立派に戦つて呉れと頼めば、決つて勝つて歸へると言ふ……息の詰る様な沈黙はクライマックスに達してゐる……送る者も涙、送らるゝものも涙、悲壯の氣は控所前に満ちる。心を取り直して一同拍手を以て選手を送つた。この悲壯極まる光景は筆に盡し難く口に言難し。まのあたり見たものでなくしてはこのシンの感情は解るまい。

やがて各々の選手はスタートラインについた。突如號砲は温やかな空氣を破る。サット松岡君が飛び出したがその時はもう遅かつた。山師がトップを押へて抑る。松岡君は猛烈なスピードを以て迫る第二走者秋山君にバトンを渡す時は殆んど並行、秋山君バトンを得るや力走して五メートル計り抜き林君にバトンを渡す。林君は例

の足でも必死の力を以て勇氣百倍す。跛を引きながらも間隔を縮ませる事なく走る。金森君ラストを調子よく走る山師は二百米に一等を取つた藤本君だ。肉薄又肉薄、觀衆の汗を握らせたが金森君には勝てず、金森君首尾よくチームを切る。

ファンは一聲に萩中の努力を讃美する。

嗚呼我校勝てり、我校勝てり。遂に榮冠は萩中の頭上に落された。總ては我々を祝福するかの様に微笑んでゐる。あの燐然たる優勝旗は我々を迎へてゐるではないか。血と涙とに依つて得た優勝旗を握りしめ、歌ふ記念歌の聲は薄暮のグランドから洩れて来る。努力！努力！おうそうだ努力が全てを解決に導くのだ。過去一年間の努力を以て遂に三度優勝旗を獲得する事が出来たのだ。

終に先輩諸兄の御指導と全校生徒諸子の熱烈なる眞心を感謝する。同時に我校運の榮に競技部の盛んならんことを祈りつゝ筆を擱く。

當日の出場者並に記録は左の如くである。

種目	人	名	得點	レコード
百米	仙波	岡巖	3	
二百米	田中	正二郎		
四百米	小角	屋興		
八百米	来島	秀三	5	二分十五秒

### 山口縣教育會主催行啓體育大會

#### バスケットボール部

本年新に孤々の聲を揚げた、我バスケットボール部選手七名は、諸先生生徒一同の熱誠なる後援のもとに、意氣と希望に燃いて、十六日山口に向つた。

明十七日午前九時、開會式後直に、徳中對山中の試合を以て戦の幕は切り落された。

参加學校五校のためリーグ戦であった。

我校は第二回第四回第六回第八回のゲームに出場した。第二回戦は萩中對山師であった。

さすが山師で參加學校中嶄然として頭角を表はし、其のドリブル、ショートも實に圓滿に又冴えてゐた。我等奮戦も甲斐あらず遂に幸か不幸か零敗した。しかし此の戦こそ我等に或力強いインフルエンスを與へた。

第四回戦は萩中對徳中で之の度は樂に敵を壓倒した。

第六回戦は之れ又強敵山中チームであつた。

初めから自重して敵を迎へた。

先づ最初の二点は萩中が得、次に山中がフリースローで二点を入れ、再び我校が二點を獲得し、次に山中が二點をさり、かくして接戦の結果ハーフタイムまでは、八対八のスコアであつた。十分間の休憩時間も過ぎ、再び白熱的接戦が演ぜられた。

其の結果残念にも我校の不利となり敗戦した。

顧みるに選手一同、皆よく其の分を盡し、奮闘し一時は山中チー

ムをとして心臓を寒からしめた。

此の戦は實に涙ぐましい程であつた。此のゲームこそ審判者のみならず、他校の生徒に萩中の實力を充分にインプレスすることが出来た。

明れば十八日午前八時半山中對帥範との試合が行はれた、あたかも兩虎の相鬭ふ如く感ぜられたが、遂に山師の勝利に歸した。我等は最後の戦で、萩中健兒の意氣を示さん。

斃れて止むの決心を以て戦つた。そして遂に我校の勝利となつた。

附記——参考のため左の一事を記す。

第二回戦に零敗せし理由、

一、試合用ガールが我等が平生練習せしガールを達つて石の様に堅かつたこと。

二、リンクが萩中の備付けであるのを全く違つてゐたこと。

三、我等が消極的態度に出たこと。

此等の爲めから面喰つてゐた、それで余りシユートも意味を示さなかつた。

最後の安中との試合は非常にシユートが冴えてゐた。

左に優勝チーム及び我校出場のゲームに於けるスコア ミメンバーアを示す。

優勝チーム

山口師範

二等

山口中學

三等

萩中學

### 第二回戦 萩中(○) 山師(四〇)

### 第四回戦 萩中(十八) 徳中(七)

### 第六回戦 萩中(十二) 山中(廿二)

### 第八回戦 萩中(十九) 安中(七)

萩中チーム、メンバー

吉屋(五ノ二) 板垣(四ノ一) 三井(四ノ三) 吉田(四ノ三)

水野(四ノ三) 山根(四ノ三) 長瀬(四ノ三) 以上七名

最後に趣味を持たるゝ諸兄は大に此の技を練達し自己体力の増進をはかり現代烈しき生存競争に美事打勝たれ其の間何等かのスポーツマン、シップを体得せられんことを希ふ。

終りに臨み諸君の努力を望む

### ◎ 武道記事

#### 寒稽古

一月十一日より同二十日まで十日間劍柔兩部、寒稽古を行ふ。

一月二十一日、寒稽古後武道大會舉行、寒稽古皆勤者及精勤者に賞状を授與す。

五月二十七日、劍柔共大會を行ふ。

七月六日、軍艦陸奥の劍道部柔道部各十數名對青年學生の紅白試合を秋商道場にて行ふ、我校より劍柔各十名出演。快き試合なりき。

### 武道寒稽古出勤狀況表

(甲)出席者一日平均調

### 劍道部

#### 個人試合

○(福井中) 鈴木 ○(京都師劍友會) 北川 ○(愛知支部) 伊豫田

○(京都須知農) 大村 ○(本校) 河内田 ○(本校) 河武

○(本校) 清水 ○(神戶商) 前田 ○(本校) 世良 ×(愛知支部) 下瀬永

○(本校) 佐賀中 ○(本校) 佐賀中 ○(本校) 佐賀中 ○(本校) 佐賀中

主將 永田 輝○ 下瀬知雄

遠藤 吉夫 ○ 清水 豊吉

廣瀬 利雄 ○ 世良 荘一

深田 新平 ○ 河 武博 一

大園 春江 ○ 大村 武 一

三四點對二八點にて敗る。

### 柔道部

#### 個人試合

○(本校) 新田 ○(和歌山親武) 小野村

○(本校) 高瀧 ○(尼崎講武) 井住

○(本校) 野口 ○(京都淺川道場) 山永

○(本校) 井森 ○(本校) 上澤

大正十五年七月下旬、京都武徳殿に於て、總裁久邇宮殿下同妃殿下の御臨場の下に、第廿七回青年演武大會が嚴に開かる。吾校出

演選手氏名及成績左の如し。

### 京都青年演武大會

大正十四年度全校生徒ノ五割九分弱 皆勤期間十日

大正十三年度全校生徒ノ五割 皆勤期間十日

大正十四年度全校生徒ノ五割 皆勤期間十日

大正十五年七月下旬、京都武徳殿に於て、總裁久邇宮殿下同妃殿下の御臨場の下に、第廿七回青年演武大會が嚴に開かる。吾校出

演選手氏名及成績左の如し。

副將 滌口 古曳

山口縣體育大會

皇太子殿下行啓記念の目的を以て十月十七日十八日午前八時より山中講堂に於て演武開催さる。試合の方法選手氏名並に成績を掲ぐ。

絶する緊張味があり豫想以上の元氣が漲つて居た、午前七時半宿を出て新鮮な空氣を吸ひながら雄姿堂々と試合場山口中學校道場に臨んだ、殺氣そのものの様な空氣が浮漂して居る、忍ち激しき掛け声と共に見るも男性的な大試合が開始された。

付けられるかの如くにヤツト掛聲雄々しく取りくんだ、猛烈な試合の結果敵を斃す事が出来た。戦機は益々熟して行く、其間我校は優秀な成績を修める事が出来た。試合中に如何なる考で發するのかは知らぬが、餘りにも相手を侮辱した言語を發する敵も居た、おのれつ、そ其度毎に咽喉元まで繰り出ようとする憤怒の言葉をぐつと制へて、此時だ、平素誨へ聞かされた事もと、堪へた時、勝つては勿論、假令敗れたりとも自己は飽くまで立派な態度で戦つて來たのだと思ふと言ひ切れぬ満足を感じずには居られない。一回々々プログラムの進行と共に第一日目の試合は終つた。最早周囲は薄暗くなつて居た。歸宿、その晩は實に心地よく寝られた。

十八日、今日こそいよいよ強敵ばかりと戦はなければならぬ日である。緊張又緊張物凄い程緊張して居た。朝の中の二三の學校に對しては吾校が全勝又全勝だった。

さすがに名をなす強敵には敗れた。確實に敗慘の憂目を味はされた。やがて百三十六回のプログラムも了つた。血肉を分けた兄弟よりも親しく感ぜられる吾々選手の者は汗ばんだ柔道衣を片手に試合場を出た、お互に満足しながら……

平素練習の工夫或は試合數は必要なるかの如し。各自一層自覺して剣道を通して萩中精神を發揮せられん事を切望す。(河武博一記)

◎ 辭論部記事

本年度より辯論部は一の改革をすることにした。それは辯論會を大會と小會との二種し、前者は秋季に、後者は春季に各一回之を開くこととして、小會は各學級毎に（都合に依りては一ヶ學年合併して）開催し、大會は全校生徒合併して行ひ、辯士は各學級より辯論小會の成績其他を考慮して選出することにした。かくて第三學年の

春季辯論小會

は五月十九日午後零時半より開會した。演題左の如し。	笠きてくらせ己が心に	弘 永 正
海外に發展せよ	盲從を去る	小林宗平
悔悟の工夫	鈍吉の話	新谷要次
炎暑の征服	體 育	山田只夫
一榮一落これ春秋	機略が肝要	岩田忠夫
國亡びて山河あり	英文朗讀	原田芳介
國を愛せよ	三好謙介	岩武照彦
全日全時間第二學年の小會を開く。	大谷仁三郎	村木八郎
若槻首相の事ごも	三島 將	大谷仁三郎
高 松 博		

皇國の興廢此一錢にあり  
膽力を養成せよ  
無題  
偉人とは何ぞ  
黃金より土を尊ばざよ  
勤儉  
犠牲の精神  
英國はどんな國か  
第五學年的小會演題左の如し。

思想の進行  
劍道の意義  
雜感  
修學法の必要  
世界に於ける二大勢力  
自己の境遇を知れ  
人生と自己完成  
自然境の幸福  
衣食住と國民性  
人生の四季  
第四學年の演題左の如し。  
青年  
活動論  
支那研究  
大英雄リンカーンを思ふ

◎書道部記事

英雄の心(忍耐心)	齊藤
日章旗	末山文彦
登山趣味	吉村貫一
動物について(教育の力)	浅原精次
皇太子殿下奉迎に就きて	柴田政雄
我が農業	高橋祐之
僕たちの覺悟	中村洋
眞の勇氣	完規
中學生の本分	井上洋
發明は注意より	井清
統一せられる心	秀介
◎書道部記事	
九月十二日、成績品展覽會が開かれた。我が書道部は、第四學年二、三組兩教室を以て陳列場に充て、午前八時より午後四時まで、一般の觀覽に供した。朝來晴れ亘つて氣持よく、且、日曜日ではあるし、大人も子供も次第に集り來り、感心したり、批評したりして居た。午後に至り、時々雨がやつて來て、大變涼しくなり、漸次に觀覽者が増して來た。抑今回の陳列品は、昨年十一月以降今日に至るまでの間に、教師監督の下に書したものの中より、佳良の者を選抜したもので、これを一等二等三等等外の四階級に分つてある。今一等賞を得たものを左に掲げる。	藤井町秀介 藤井上三郎
藤井潔君(現在三年生)	藤井清
大野源太郎君(一年生)	中村洋
白井素巳君(二年生)	井上洋

第一學年の小會（十八日）演時  
精神の養生  
弱者を見下げ強者を敬ふ  
武士道の精神  
生徒の服装について  
青の洞門  
岩見重太郎  
笑 話  
油断大敵  
文晁と草雲  
人の道  
眞の朋友  
物事は熱心なれ

第一學年の小會(十八日)演題左の如し。

森口福悟直禮亮一  
瀧垣堯禮  
板垣北  
峯岡井  
吉田田  
香藤吉和  
平井克  
生梓豊賢文治亭作亮一

森 大 河 桂 秋 田 山 山 福 小 野 板 平  
澤 谷 崎 田 村 本 田 永 野 村 垣 井  
陽 善 元 秀 忠 吉 東 虎 正 邦 正  
亮 齋 祐 祐 穂 彦 夫 行 雄 彦 博 雄

東宮殿下の御覧の光榮を賜はりし藤井君、中所君の書、及び参考品としての吉賀君の書には、何人も感嘆せざるを得んであつたらう。尙特別大書すべきは、本年よりは、小學校の成績品を募集することになつたことで、多數出來榮の見るべきものを得て、一教室を満たし、大に觀覽者の眼を引き、豫期以上の効果を收めることが出来た。今左に出品校名を掲げて感謝の意を表する。

明倫、椿東、越ヶ瀬、椿西、白水

最後に、益々此の部の發展進歩する様、一層諸君の努力せられんことを望んで筆を擱く。(二年 豊田生記す)

◎ 畵道部記事

九月十二日。例年の如く我が部二三年生の保證人會を機として生徒成績品展覽會を開催した。今年は特に四峠内の小學校からの出品が有つて一室を以て之に當て他の一室を以て本校生徒諸君の出品陳列室に當てた。小學校生徒諸君の純眞な作品に向つては只感激の外は無かつた。又本校生徒諸君の画は昨年に比して敢て遜色無く寧ろ努力の跡の表はれてゐたのは實に愉快とするところである。其の外本年卒業生大和義雄君の出品二點が有つて特に觀衆の目をひいた。我々は只惚として君の筆を敬せざるを得ないのである。今後回を追ふに従つて諸君の努力に依て益々吾部の伸びて行かん事を祈る、本回製作品の成績は次の様である。

岩田忠夫外五名。二年生 一等 赤木正二。二等 田原敦雄外四名  
三等 渡邊義雄外五名。一年生 一等 堀江庄藏。二等 堀野準一  
外二名。三等 井町秀介外六名。(吉賀一夫記)

### ◎ 地歴部展覽會概況

九月十二日保護人會に際し、他の諸部と共に開かれたる、我部の概況をいはんに陳列總點數百十七にして一年に六十三點、二年に三十點、三年に八點、四年に十六點の出品あり、上學年に出品點數の少きは、教科の關係上、上學年は物理化學部出品となりたるを以てなり、入賞者は一等賞五點、二等賞三十六點、三等賞五十四點なるが、陳列物につきて概評せんに、今年は地理模型の製作尤も多く、成績の優秀なるもの亦少からず、地圖、統計表、記述等の點數漸次これに次ぎり、模型に外國に關するもの多からず歴史關係製作の甚少數なりしは遺憾なり、蘇士運河、バナマ運北米の五大湖附近、歐洲に於ける、英佛及伊太利等の模型は、地學上より見ても、材料上より考へても、製作して趣味あるべきものと思はれ、其他猶之を外國に求むれば多くの、好地點あるべきを信す、本年は小學校の出品をも期待せしが、明倫校より十三點越濱校より一點出品を見たる外に他の校の出品なきは遺憾なりき。

◎地歷部展覽會概況

◎ 理化記事

五年生 一等 河村祥三。二等 三好悦治外二名。三等 伊藤満外  
七名。四年生 一等 伊藤昇。二等 久志敬範外三名。三等 赤木  
弘外四名。三年生 一等 松原雅夫。二等 中村義明外三名。三等

# 大正十四年度校友會費收支決算報告

般の観覽に供した。

以  
上

經常部	總收入高	前年度繩越金
內譯	總支	雜收入
金參拾八圓六拾六錢也	年度	基金利子繩入
金參百七拾七圓四拾貳錢也	及寄附金等	職員生徒會費
金壹千九百九拾壹圓六拾八錢也	度	總支
並貳千四百七圓七拾六錢也	出	高
金貳百貳拾七圓也	道	劍道部
金貳百拾八圓六拾錢也	道	柔道部
金拾參圓八拾九錢也	球	野球部
金拾九圓參拾錢也	誌	游泳部
金貳百九圓參拾貳錢也	論	雜誌部
金壹圓貳拾錢也	道	辯論部
金八拾錢也	道	書畫部
金壹圓四拾六錢也	運	運輸部
金六百七拾壹圓拾六錢也	賽	雜賽部
金百五拾九圓七拾四錢也	獎	獎勵部
金五百七拾五圓拾錢也	賞	費部
金壹百圓也	基	基金部
金貳百拾圓拾九錢也	金	金積部
金貳千四百七圓七拾六錢也	積	翌年度八繩越

## 基 金 之 部

總 收 入 高

一金壹萬壹千六百參拾七圓九錢也

內 譯

前 年 度 繼 越 金

金八千八百七拾四圓六拾六錢也

証 券 及 預 金 利 子

金五百參拾貳圓四拾參錢也

基 金 蕩 積

金壹百圓也

金貳千百參拾圓也

寄 附 金

一金壹萬壹千六百參拾七圓九錢也

總 支 出 額

金貳百參拾貳圓八拾貳錢也

經 常 費 へ 操 入

金貳百六拾八圓六拾錢也

柔 道 場 叢 新 調 費 へ 流 用

金貳拾四圓四拾四錢也

屋 外 鏡 架 取 付 費 へ 流 用

金壹千百參拾圓也

器 械 標 本、辭 書 購 入

金九千九百八拾壹圓貳拾叁錢也

水 浴 場 及 倉 庫 新 設 費

翌 年 度 へ 繼 趣

松 下 村 墓 聯  
 自 非 讀 萬 卷 書。 寧 得 爲 千 秋 人。  
 自 非 輕 一 己 勞。 寧 得 致 兆 民 安。

附 錄 第 一  
 同 窓  
 會  
 誌



## 附 錄 第一

### 同窓會誌〔自大正十四年十一月

至十五年十一月〕

○三月二日、午後七時より風月樓上に於て臨時評議員會を開き或る事件について議す。午後十一時散會。出席者左の如し。  
菊屋、末岡、長井、齋藤、厚東、石原、和田、山本、中津江諸氏。

○三月三日、第二十六回卒業式後、寄宿舍談話室に於て、恒例により、新入會員歡迎會を開く。出席者左の通り。

新入會員九十七人(卒業生百人の内)

來賓、岩田會長、駒田。金子、郷田、諸教諭。

引受側舊會員、菊屋、末岡、長井、田坂、石原、堀幸一。諸氏。

○三月三日、卒業式の際、左記成績優良の卒業生諸君に記念寫真を贈呈。

田村義雄、齋藤音熊、多田利雄、藤田小太郎、國弘三郎、阿武義輔、藤山光雄。

○四月八日、始業式の際、前學年の成績優良生徒に筆記帳二冊宛を贈る。その氏名左の如し。

第五學年、永富五郎、野稻清定、小原美紀、大永金太郎、仙波武。

第四學年、板垣禮作、赤木弘、兒玉玄太、柴田敏夫、水野一郎。

第三學年、五島直人、岩武照彦、三好謙介、岩田忠夫、松浦藤三郎。

第二學年、高松博、豊田正之、赤木正二、長嶺正衛、宮本哲郎。

○六月九日、會長上京を機さし、東京本鄉正門前にて午後六時より指月會開催、因に指月會とは東京在住の同窓會員より成る會なり。當日出席者左の如し。

岩田會長。舊特別會員高田德佐氏。

勝野清(第一回卒業生) 中村喜代藏(二回卒) 田村能介(三回卒) 口羽雅介(三回卒) 神代利往(六回卒) 森重操(六回卒)

佐藤良文(七回卒) 山根四郎(八回卒) 伊藤道顯(十回卒)

長宗純(十二回卒) 下瀬幸男(十五回卒) 秋山誠一(十五回卒)

横山繁介(十五回卒) 益田兼施(十六回卒) 木村平作

(十六回卒) 片山弘(十八回卒) 福川秀夫(十九回卒) 山本

義男(十九回卒) 板谷一馬(十九回卒) 阿部芳甫(二十回卒)

石津照實(二十回卒) 堀永徳太郎(二十回卒) 山本登代治(二

十回卒) 高田良雄(二十二回卒) 下村定儀(二十三回卒) 井

町勇(二十四回卒) 安達平作(二十五回卒) 益田兼清(二十六回卒) 波田繁夫(二十六回卒) 山崎新一(二十六回卒) 以上

三十二名

尙、指月會事務所は辯護士法學士森重操君方。

同氏事務所、東京市芝區新幸町一番地、第一堤ビルデイン

ケ三階(電話銀座二六六九)。

指月會幹事、横山繁介君(ジャパンタイムズ社在勤)。東京  
市麹町區内幸町一ノ六(電話銀座四〇三番)

○八月一日、午後八時より、梅月亭に於て定期大會を開く。會費

金貳圓。出席者左の如し。

菊屋孫輔、和田涉、厚東太郎、伊藤通利、堀幸一、高垣重一  
伊藤行藏、和田準介、前原四郎、吉武恵市、齊藤壽福、竹内  
八郎、廣榮一、岩崎小一、尾崎信一、末岡周介、河村義雄、  
八木榮一、野村龍介、長井寛治、増野純亮、中津江延彦、以  
上二十二名。

先づ和田幹事開會の辭を述べ、厚東幹事座長として總會を開  
く。中津江幹事、會務、基金會計、一般會計等の報告をなす  
次で、例年の大會に、新卒業生、歸省學生等、多數出席せし  
むる様、協議し、この際、心氣一轉のため氣銳の士を幹部に  
求め、大に會を隆盛ならしめんと、評議員一同總辭職を諸  
り承認。よりて選舉を略し、菊屋、和田、長井、三氏を後任  
評議員詮衡員に推し、三氏別室にて協議の結果、左の諸氏を  
發表。承諾あり。

石原忠亮、竹内八郎、吉武恵市、河村義雄、伊藤通利、和田  
涉、齊藤壽福、長井寛治、中津江延彦、下間教修。  
次で前記評議員互選の結果、左の諸氏幹事に當選、承諾。  
和田涉、吉武恵市、竹内八郎、中津江延彦、下間教修。  
尙、出席者を多數ならしむる方法に就ては、幹部に於て熟考  
しおくこゝゝし、配膳に移り、午前三時頃閉會。

訃報 (自大正十四年十一月  
至十五年十一月)

○二月十二日、杉彥熊君(十九回卒)病死、吊辭を送る。

○二月 日、山本忠之君(十八回卒)嚴父逝去、吊辭を述  
ぶ。

○四月二十三日、竹内忠雄君(二十二回卒)病死、河野幹事  
代理會葬。

○五月十四日、下瀬一郎君(十四回卒)逝去。

○七月一日、前原四郎君(五回卒)令息逝去。

○十月十二日、岩田會長母堂逝去、依つてその葬儀に會員  
會葬するやう新聞に廣告し、又、その葬儀に際し、生  
花一對を贈る。

○十月十日、會員名簿を會員に發送。

## 附錄第二

# 前原一誠日記

(本篇は特別會員安藤紀一先生の特に寄せられしもの茲に厚くその厚意を謝す)

卷之三

前頁一歲四月

ここに掲くる前原一誠日記は断片なりと雖かの事變以前に於ける關係諸士の行動を夥方覗するに足るものあり讀者之を當時の史料と對照せば得る所あるべし余曩に故前原昌一氏の諾を得て之

安藤紀一

附 錄 第二

戸(文字不明)

十九日、木戸來訪。

九月六日、木戸來訪。

二十一日、同佐佐木宿澤江  
二十二日、到深川訪木戸。

二十八日、發深川宿澤江。

二十九日、入萩。

十月四日、中津人來ル。

十七日、土人田中有年來。

十一月三日、海潮寺火。

四日、一清等從東京歸。

二十二日、高知縣人大石圓

池知重利來。

十二月九日、水戸人薄井顯肥田

政鈴來。

十一月、水戸兩生來。

十六日、木戸再び萩に赴く。

十七日、木戸別杯ヲ唐樋河

内屋に酌。諫早福原頗酣。

諫早基清、福原又

スト云壯士六七名來テ予家

ニ宿。

二十七日、到嚴島。

二十八日、拜祠而發。

七月二日、到多度津。

三日、謁金毘羅祠。

五日午後八時半、入兵庫港

而泊。

六日、駕汽車、與横山到大

阪。謁與丸公子尾道屋。

八日、謙道以下汽車到神戸

九日、與横山同到神戸。是

日發神戸。

十日夜、着横濱宿。

十二日午後、往東京、訪國

國司は一誠の姉の娘子なり。

十三日、贈書木戸。

十五日、横山岡田往東京。

十八日、到東京訪永岡敬次  
郎(越後人)。夜宿佐倉屋。

二十二日、到東京、謁從三

うし、後に東京思

戸(文字不明)

十九日、木戸來訪。

九月六日、木戸來訪。

二十一日、同佐佐木宿澤江  
二十二日、到深川訪木戸。

二十八日、發深川宿澤江。

二十九日、入萩。

十月四日、中津人來ル。

十七日、土人田中有年來。

十一月三日、海潮寺火。

四日、一清等從東京歸。

二十二日、高知縣人大石圓

池知重利來。

十二月九日、水戸人薄井顯肥田

政鈴來。

十一月、水戸兩生來。

十六日、木戸再び萩に赴く。

十七日、木戸別杯ヲ唐樋河

内屋に酌。諫早福原頗酣。

諫早基清、福原又

スト云壯士六七名來テ予家

ニ宿。

二十七日、到嚴島。

二十八日、拜祠而發。

七月二日、到多度津。

三日、謁金毘羅祠。

五日午後八時半、入兵庫港

而泊。

六日、駕汽車、與横山到大

阪。謁與丸公子尾道屋。

八日、謙道以下汽車到神戸

九日、與横山同到神戸。是

日發神戸。

十日夜、着横濱宿。

十二日午後、往東京、訪國

國司は一誠の姉の娘子なり。

十三日、贈書木戸。

十五日、横山岡田往東京。

十八日、到東京訪永岡敬次  
郎(越後人)。夜宿佐倉屋。

二十二日、到東京、謁從三

うし、後に東京思

て山口に入る。

十九日、木戸發足。

二十六日、千人會發會。

木戸山口に留ること三日にして下關に出づ。

八月十五日より、

十月四日まで、木戸、萩若くは深川に在り。其後下關に赴く。

大津郡三隅村澤江

萩海潮寺。

一誠の弟佐世一清

通稱三郎。

三月讀書場規則成ル。有勅旨

明治八年徵一誠。

六月十八日、決意於東上。

二十日、發途、送到金谷者

四十名。到明木者十一名。

此一人ハ脱卒也。薄暮到

山口、宿木津屋。夜、正木

招飲。

二十一日、與正木相伴訪佐

佐木。六時、到宮市、宿大

島屋。正木佐佐木送來。痛

飲至二時。

二十二日、山根周策招飲。

大醉。

二十三日、到三田尻。

二十四日、發三田尻。

讀書場は、一誠萩地方の子弟の爲に設けし教育所にて舊明倫館舍を用ゐたり。

位公。訪伊藤木戸。皆不在。案橋にて捕へらる。

是日、與浮田永岡上有明樓伊藤博文。

十一日、伊藤博文來。

十二日、海江田來リテ予ヲ海江田信義。

抑留ス。蓋左府之命也。是左大臣島津久光。

日、有志輩來訪。

十二日、今日於朝廷有征韓之會議。

十三日、歸横。

十四日、横山、海江田ヲ訪ヒ

予去東京ノ情實ヲ陳ブ。是一誠、母の病の報  
日拔錨。  
十五日、到神戸。  
十六日、與横山到大阪。晚  
歸神戸。青木軍平來云、從  
十四日到今大凡四度ノ電信  
木戸伊藤兩參議ヨリ來リ、  
梧一右一稔大阪ニ在ルヲ以  
テ、彼等ニ托シテ、予ヲ抑  
留スルナリト。夜半、稔梧  
一來ル。  
十八日、歸三田尻、是日歸  
萩。  
二十二日、宮富哲平來。  
九月二日、歸去。  
七日、大橋清賛自東京至。  
十四日、正院史官ニ辭表ヲ  
郵致ス。ソノ表文ハ別ニ記  
ス。十月十五日届書達ス。

十月五日、吉田右一來ル。頗ル

品川に致すと云ふ  
十七日、晴、岡田來。夜品  
川生來訪。  
十九日、晴、品川來告別。  
二十七日、雨、終日無事。  
讀書場廢止。  
五月四日、晴、横山藤井來云ク、  
爲學事視察東上ノ命ナリ。  
十日、雨、横山其他以今日  
發程東上。予亦往告別。己  
而自山口發程ヲ止ム。蓋井  
上馨山口ニ來ルヲ以テ也。  
二十九日、晴、聞都野生爲  
藏番、久芳爲十四等出仕。  
佐佐木ハ如江州開拓地。勝  
間田上坂。吉田ハ東上。蓋、  
皆井上ノ命ヲ奉スト云フ。  
三十日、秋田士小菅成勲來。  
不遇。  
七月三日、品川彌二ヨリ、國法  
汎論一部ヲ贈致ス。

を得て急に歸る。

出仕ノ事ヲス、ム。

六日、赴明倫館之會。

十一日、右一歸山口。

二十六日、青森士根津親徳

及びて、館舍を本

陣となせり。

蓋、舉兵の密議な

らん。事を起すに

西郷隆盛。

伊六名は安馨、秋

月藩の中老格。

哲之助は車之助の

弟。

大橋一藏、永岡久

茂の同志なり。

三月十六日、秋月ノ人宮崎伊六

同哲之助來會於横山。

四月十四日、晴、品川彌二來ル

來。春日潜菴門生也。

二月二十七日、西郷復書到。

明治九年

十二月四日、佐賀人三名肥人來

訪。不遇。

一月二十八日、德山人今田壽江

來。春日潜菴門生也。

西郷隆盛。

伊六名は安馨、秋

月藩の中老格。

哲之助は車之助の

弟。

予指宿ニ與へ小銃ヲ乞フノ

書發覺。加之佐佐木其他伊

藤己下、反覆、予揚兵大政

ヲ覆スノ企アリト訴フ。故

ニ政府紛擾、使彌二説予、

以鎮靜ヲ謀ルナリ。

品川の來るも、木

戸の意なり。

西郷隆盛。

伊六名は安馨、秋

月藩の中老格。

哲之助は車之助の

弟。

大橋一藏、永岡久

茂の同志なり。

三月十六日、秋月ノ人宮崎伊六

同哲之助來會於横山。

四月十四日、晴、品川彌二來ル

來。春日潜菴門生也。

西郷隆盛。

伊六名は安馨、秋

月藩の中老格。

哲之助は車之助の

弟。

予指宿ニ與へ小銃ヲ乞フノ

書發覺。加之佐佐木其他伊

藤己下、反覆、予揚兵大政

ヲ覆スノ企アリト訴フ。故

ニ政府紛擾、使彌二説予、

以鎮靜ヲ謀ルナリ。

品川の來るも、木

戸の意なり。

西郷隆盛。

伊六名は安馨、秋

月藩の中老格。

哲之助は車之助の

弟。

大橋一藏、永岡久

茂の同志なり。

三月十六日、秋月ノ人宮崎伊六

同哲之助來會於横山。

四月十四日、晴、品川彌二來ル

來。春日潜菴門生也。

西郷隆盛。

伊六名は安馨、秋

月藩の中老格。

哲之助は車之助の

弟。

予指宿ニ與へ小銃ヲ乞フノ

書發覺。加之佐佐木其他伊

藤己下、反覆、予揚兵大政

ヲ覆スノ企アリト訴フ。故

ニ政府紛擾、使彌二説予、

以鎮靜ヲ謀ルナリ。

品川の來るも、木

戸の意なり。

西郷隆盛。

伊六名は安馨、秋

月藩の中老格。

哲之助は車之助の

弟。

大橋一藏、永岡久

茂の同志なり。

三月十六日、秋月ノ人宮崎伊六

同哲之助來會於横山。

四月十四日、晴、品川彌二來ル

來。春日潜菴門生也。

西郷隆盛。

伊六名は安馨、秋

月藩の中老格。

哲之助は車之助の

弟。

予指宿ニ與へ小銃ヲ乞フノ

書發覺。加之佐佐木其他伊

藤己下、反覆、予揚兵大政

ヲ覆スノ企アリト訴フ。故

ニ政府紛擾、使彌二説予、

以鎮靜ヲ謀ルナリ。

品川の來るも、木

戸の意なり。

西郷隆盛。

伊六名は安馨、秋

月藩の中老格。

哲之助は車之助の

弟。

大橋一藏、永岡久

茂の同志なり。

三月十六日、秋月ノ人宮崎伊六

同哲之助來會於横山。

四月十四日、晴、品川彌二來ル

來。春日潜菴門生也。

西郷隆盛。

伊六名は安馨、秋

月藩の中老格。

哲之助は車之助の

弟。

予指宿ニ與へ小銃ヲ乞フノ

書發覺。加之佐佐木其他伊

藤己下、反覆、予揚兵大政

ヲ覆スノ企アリト訴フ。故

ニ政府紛擾、使彌二説予、

以鎮靜ヲ謀ルナリ。

品川の來るも、木

戸の意なり。

西郷隆盛。

伊六名は安馨、秋

月藩の中老格。

哲之助は車之助の

弟。

大橋一藏、永岡久

茂の同志なり。

三月十六日、秋月ノ人宮崎伊六

同哲之助來會於横山。

四月十四日、晴、品川彌二來ル

來。春日潜菴門生也。

西郷隆盛。

伊六名は安馨、秋

月藩の中老格。

哲之助は車之助の

弟。

予指宿ニ與へ小銃ヲ乞フノ

書發覺。加之佐佐木其他伊

藤己下、反覆、予揚兵大政

ヲ覆スノ企アリト訴フ。故

ニ政府紛擾、使彌二説予、

以鎮靜ヲ謀ルナリ。

品川の來るも、木

戸の意なり。

西郷隆盛。

伊六名は安馨、秋

月藩の中老格。

哲之助は車之助の

弟。

大橋一藏、永岡久

茂の同志なり。

三月十六日、秋月ノ人宮崎伊六

同哲之助來會於横山。

四月十四日、晴、品川彌二來ル

來。春日潜菴門生也。

## 各種レコード表

(附錄第三)

種 目	世 界 レコード	日 本 レコード	全 國 中等校 レコード	本 縣 中等校 レコード	本 校 (昨年) レコード
100米	10秒 $\frac{2}{5}$ (米)	10秒 $\frac{4}{5}$ (谷) 11秒(高木)	11秒 (高木)	11秒 $\frac{2}{5}$ (萩商服部)	11秒 $\frac{2}{5}$ (阿武)
200米	21秒 $\frac{1}{5}$ (米)	22秒(谷) (上田)	22秒 $\frac{9}{10}$ (上田)	24秒 (萩中能美)	24秒 (能美)
400米	41秒 $\frac{9}{10}$ (米)	50秒 $\frac{1}{5}$ (納戸)	45秒 (松居)	56秒 $\frac{1}{5}$ (古田)	57秒 $\frac{1}{5}$ (能美)
800米	1分51秒 $\frac{9}{10}$ (米)	2分0 $\frac{2}{5}$ (繩田)	2分8秒 (堀)	2分17秒 $\frac{2}{5}$ (安達)	2分20秒 (來島)
1500米	3分52秒 $\frac{3}{5}$ (芬)	4分7秒 $\frac{4}{5}$ (全)	4分27秒 $\frac{4}{5}$ (三輪)	4分47秒 (萩商植村)	4分44秒 (中村四)
5000米		15分34秒 $\frac{4}{5}$ (永谷)			17分18秒 $\frac{7}{10}$ (大谷)
10000米	30分23秒 $\frac{1}{5}$ (芬)	32分11秒 $\frac{4}{5}$ (永谷)	35分51秒 (宮本)	37分25秒 (萩商植村)	39分50秒 (大谷)
ローハードル	23秒(米)	24秒 $\frac{3}{5}$ (三木)	27秒 $\frac{2}{5}$ (山田)	27秒 $\frac{1}{5}$ (萩中秋山)	28秒 (金森)
800米 リレー	1分27秒 (米)	1分30秒 (日本チーム)	1分38秒 (同志社チーム)	1分39秒 $\frac{3}{5}$ (萩中チーム)	1分39秒 $\frac{3}{5}$ (ペストチーム)
走　巾　跳	7m696(米)	7m24 (織田)	6m41 (桑田)	6m2 (萩商服部)	6m25 (山村)
走　高　跳	2m014(米)	1m85 (平岡)	1m80 (染谷)	1m70 (山中安田)	1m67 (山田哲)
ホツブステツブ ジヤンブ	15m525(豪)	14m84 (織田)	13m22 (南部)	12m35(山根)	12m70 (山村)
棒　高　跳	4m247(英)	3m80 (森岡)	3m50 (洲脇)	3m61 (萩商西村)	3m25岩田 3m26山縣
圓　盤　投	47m89(米)	40m94 (沖田)	32m66 (曾谷)	30m40 (萩中米廣)	30m40 (米廣)
砲　丸　投	16m544 (米)	12m88(溝川) 14m975(全)	12m58 (全)	11m98 (全)	12m39 (米廣)
槍　投	68m10 (尾崎)	54m56 (尾崎)	46m19 (—)	— (41m38)	

者奮發、伊退反覆ノ馬脚ヲ見ズ。

十一日、會人竹村小笠原蓋

切迫論ナリ。

十三日、夜竹村小笠原來、將來ノ策ヲ議ス、往復ノ暗号ヲ定ム。

十四日、竹村小笠原歸東。

二十五日、松岡忠來。東肥致神小方小太郎者來。不出百日、奏實行スペシト云。

十月四日、予自罹病、大凡百五

十日許。今日ニ到リ、猶未

全快、坐則頭如浮、行則地

如搖。

七日、自昨朝、一清木部ニ

往、直ニ須佐ニ往、坂上忠介ヲ訪フ。

十一日、一清還自須佐。一

清至須佐、訪坂上。坂上頗

竹村幸之進俊秀、後日、思案橋の變の主謀たり。

小笠原明六。

竹村歸りて永岡に

報する所あり。

松岡忠、萩の士な

緒方小太郎弘。肥

後の人。

廣岡濟、小方小太郎ノ添書

ヲ持テ來ル。廣岡徑ニ發シ

テ歸西。蓋故アルナリ。玉

木往小倉。

自重論。且暗時勢如盲人云、須佐ノ人亦總然リ。

十六日、予甚不快、全身震動、頭如浮如飛又如閉。且

顔色甚赤シ。因灌水二荷。

二十二日、遇廣岡。(熊本人

廣岡濟、小方小太郎ノ添書

ヲ持テ來ル。廣岡徑ニ發シ

テ歸西。蓋故アルナリ。玉

木往小倉。

八年十月三日、劇場火起。

九年三月二十六日、小畑山林失火。延焼及越濱、一村悉

焼失。

九年六月一日、中村雪樹、巴

城學校長ト爲ル。

九年十月二十日、謙道爲椿社祠裳

期を一誠に報し、歸途秋月に至る。

十四聯隊長として小倉に在り。正誼

兄に勧むるに、一

舉に加ふる事を以

小倉に在り。正誼

× × × × × × × ×

校正の筆を擱くに當りて

本誌の編輯は雑誌部長が主に當られました  
たが、途中で部長は榮轉になり、殘務と  
校正とは、編輯者以外の人が之に當りました。  
した。それで聊か手違も起きました。會  
員諸君の意に適はぬ所もあらうと思ひま  
す。幸に次號よりは、もつと立派のもの  
を作りたいと思ひます。會員諸君の奮勵  
を祈ります。

× × × × × × × ×

大正十五年十二月十六日印刷納本  
大正十五年十二月二十一日發行

山口縣阿武郡萩町大字西田町  
發行兼編輯者 三輪

山口縣阿武郡萩町大字西田町  
印刷者 荒瀬徳治  
印刷所 信清舎印刷所

